

外国語に関する 現状・課題と検討事項



1. 現行学習指導要領のポイント

<目標設定>

- 「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」を一体的に育成する過程を通して、「学びに向かう力、人間性等」に示す資質・能力を育成することとし、小中高で一貫した目標を実現するため、国際的な基準であるCEFR^(※1)を参考に、5つの領域^(※2)で英語の目標を設定

(※1) 欧州評議会が示す外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ共通言語参照枠

(※2) 「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと〔やり取り〕」、「話すこと〔発表〕」、「書くこと」

<科目構成の見直し>

- 小学校から音声を中心とした活動を通じて外国語に慣れ親しみ外国語学習への動機付けを高めた上で、中学校への接続を図ることを重視するため、小学校3・4年に「外国語活動」、5・6年に教科「外国語」を導入
- 中学校では対話的な活動等を重視し、授業は英語で行うことを基本とした
- 高校では、5領域を総合的に扱う科目群（英語コミュニケーションⅠ、Ⅱ、Ⅲ）やディベートやディスカッション等を通して発信力を高める科目群（論理・表現Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ）を設定し、科目構成の見直しを行った

2. 小学校・外国語に関する課題

- 5領域の活動を通した指導が定着しつつあり、R4学習指導要領実施状況調査によると、4技能全てで相当数の児童ができている設問が多い
- その一方で、一文を書き写す問題の正答率が学校間で約30%～90%の差がある等、「書くこと」に課題が見られる。また、「読むこと」「書くこと」において、児童が「興味・関心をもちにくい」「理解しにくい」と回答した教師の割合が多く、教師が指導に難しさを感じている

3. 中学校・外国語に関する課題

- 5領域の活動を通した指導の推進に一定の進捗が見られ、CEFR A1以上を有する生徒の割合が増加（H25：32.2%→R6：52.4%）するとともに、学習指導要領実施状況調査（H25→R5の比較）で改善が見られる
- 一方、経年変化分析調査（R3→R6の比較）のスコアは低下し、コロナ禍の影響も考えられるものの、この傾向に歯止めをかける必要（各種調査に共通して、特に社会的な話題に関する問題や文法等の正確性を問う問題に課題）
- 前回改訂により中学校で習得すべき文法事項や語彙の増加、話題や活動の高度化により、教科書の難易度が上がり、授業づくりが難しいとの指摘がある



4. 高等学校・外国語に関する課題

- 5領域の活動を通じた指導の推進に一定の進捗が見られ、CEFR A2以上の英語力を有する生徒の割合が増加（H25：31.0%→R6：51.6%）
- その一方、R6学習指導要領実施状況調査等によると、「話すこと」及び「書くこと」といった発信の領域において課題が見られる(※)
- 特に英語での発信を中心とする科目であるはずの「論理・表現」において、4技能をバランスよく学ぶ「英語コミュニケーション」と比べても、授業で活動を通じた英語使用の機会が十分に与えられておらず、科目の趣旨に沿った指導が十分行われていない実態がある

(※) R6学習指導要領実施状況調査では「書くこと」に課題が見られるとともに、R1・R3・R6年度におけるGTECの結果等の分析において「話すこと」「書くこと」は横ばいまたは低下傾向

5. 小中高に共通する課題

(1) 校種間の接続・連携に関する課題

- 小(外国語活動→外国語)→中→高の円滑な接続・連携が依然として課題。教師が他校種等の指導内容・方法を必ずしも把握できていない、接続・連携のために重点を置いて指導すべき点を必ずしも理解・意識していない等の指摘も

外国語活動→外国語：音声等に慣れ親しむ指導に、円滑に読む・書くを段階的に加えることが課題

小→中：聞く・話すの音声面中心の指導から、読む・書くを含む5領域のバランスの取れた指導、文法事項や語彙の増加に円滑に接続していくことが課題

中→高：中学校の既習事項を定着させ、学習内容の高度化・複雑化につなげていくことが課題

(2) 語彙に関する課題

以下の諸点が相まって過度な負担が生じているとの指摘

- 前回改訂で、指導すべき語彙数を増やし、教科書の語彙数が増加した結果、中学校では、小学校で扱った語彙の定着に加え、増加した新出語彙を指導する必要
- 解説で受容語彙と発信語彙の考え方(※)を示したが、実際には教科書の新出語彙を全て覚える指導がなされるなどメリハリのある語彙指導が行われていない実態も
- 社会的な話題が中学校学習指導要領に位置付けられ（解説で環境問題や世界情勢、人権問題等を例示）、教科書の話題が高度化し、難易度の高い語彙が増えた

(※) 児童生徒の発達の段階に応じて、意味を理解できるよう指導すべき語彙（受容語彙）と表現できるように指導すべき語彙（発信語彙）があり、児童生徒が全てを発信することが求められているわけではないこと



（３）生徒の英語力の把握・評価に関する課題

- 現行の学習指導要領はCEFRを参照して目標や活動例を定めるとともに、第4期教育振興基本計画ではCEFRを基準として英語力の数値目標を定めている一方、全国学調等でCEFRを参照したレベルの調整等はない等、生徒の英語力の把握や経年比較がしづらい
- 高校のパフォーマンステストで「書くこと」「話すこと」の両方を実施している割合は、「英語コミュニケーション」「論理・表現」のいずれの科目においても55%に満たず、生徒の学習状況の適切な把握に課題
- H25以降、各学校が「英語を使って何ができるか」（CAN-DO）の観点で到達目標を具体的に示すことを求めてきた結果、各学校でCEFRを参照したCAN-DOリスト形式での目標設定が進んだ（R5 小：84.5%、中：96.1%、高校：94.8%）

（４）社会や社会変化に関わる課題

＜AI時代に外国語を学ぶ意義＞

- 英語が「好き」な児童生徒や、将来英語を使いたいと考える生徒の割合の減少等、英語を学ぶ動機が弱まっているとの指摘があるほか、他教科を含め家庭学習の時間も全体的に減少傾向
- AIの飛躍的な発展で手軽に高精度の翻訳が可能になる中、AIの活用が当たり前となる社会を前提としつつ、外国語を学ぶ本質的意義を再定義することが不可欠
- グローバル化・内なる国際化が進み、多文化共生・共創社会の構築が喫緊の課題である中、こうした社会の創り手を育てていく観点から外国語教育が果たすべき役割を検討する必要
- グローバルな視点・情報を駆使した価値創造・課題解決を促進するとともに、日本や地域の魅力発信を強化していく観点からも、我が国において外国語を学ぶ重要性は益々高まっている

＜社会の期待・認識との乖離＞

- 受検者数や受検者層が異なるため、英語力を国際的に比較する有効な指標とは必ずしも言えないが、各種資格検定試験の結果、我が国の受検者のスコアは他国と比べて低いとの批判
- 日本の若者は諸外国に比べて「自分の考えをはっきり相手に伝えることができる」「自信をもって自分のアイデアや意見を考えたり、話したりした」割合が低い、自分の意見を書くことが苦手など、英語教育に留まらない課題も
- 全体として、小中高の英語教育には一定の進捗が認められるものの、社会の期待・認識とは依然大きな乖離があり、この乖離を埋めつつ、更なる教育課程・指導方法の改善を図っていく必要



6. 指導体制・環境面に関する課題

(1) 5領域の活動を通じた指導に関する課題

- 5領域の活動を通じた指導が定着しつつある中^(再掲)、中高で語彙や文法等の知識及び技能を目的や場面、状況などに応じて活用できるようにするための効果的な指導方法が分かりにくいとの声がある
- 中高では授業は英語で行うことを基本としつつ、補助的に日本語を用いることも可能としているが、日本語使用を禁止しているとの誤解を生んだり、教師・外国語指導助手（ALT）等の英語が生徒の理解の程度に応じたものとなっていない事例もある
- ALTによる生徒の発言への適切なフィードバックが英語力の向上に寄与すること等が明らかになっているが、自治体によってALTの参画状況や教師との連携の度合いに差が生じており、改善が必要

(2) AIを含むデジタル学習基盤の活用に関する課題

- 外国語教育においてもデジタル学習基盤^(※)を前提とした学習の充実が不可欠。とりわけ生成AIは会話練習や英文添削、家庭学習での活用等、練習量の増加や動機付けの強化が期待できる。国の実証事業でも英語力や関心・意欲の向上、指導改善に有効であることが示され始めている

(※) 1人1台端末やクラウド環境等の情報機器・ネットワーク・ソフトウェアなどの要素で構成される一連の学習基盤

- 発信力強化の観点からも、AIを活用した教材作成や発信内容の改善など、自分の言いたいことを主体的に発信するために、母語もうまく活用しながら、AIを多様な場面で活用することが期待される
- 外国語学習向けの生成AIや各種アプリについては、今後一層の発展が見込まれるが、学習指導要領等に位置付けられていないことが、学校現場での活用格差を生み、英語力の差につながる懸念される
- 「遠隔地の英語に堪能な人との個別会話」が英語力の向上に寄与することが明らかとなっている一方、実施している割合は中高共に約10%に留まっており、1人1台端末及びクラウド環境が十分に生かされていない



1. 教育課程企画特別部会の議論を踏まえた検討事項

1. 育成する資質・能力の在り方・示し方

- (1) AI時代に外国語を学ぶ意義の再定義
- (2) 「中核的な概念の深い理解」「複雑な課題の解決」を中心とした一層の構造化

2. 指導と評価の改善・充実の在り方

- (1) 生成AIを含むデジタル学習基盤の活用や情報活用能力の育成強化を前提とした「主体的・対話的で深い学び」の一層の充実方策
- (2) 目標・内容の一層の構造化や「学びに向かう力、人間性等」の評価の新しい整理を踏まえた評価の在り方

3. 誰一人取り残さず資質・能力を育成する柔軟な教育課程の在り方

- (義務教育における調整授業時数制度や高校における科目の柔軟な組み替えや履修の免除を可能とする仕組みを前提とした場合に、考えられる教育課程・学習指導の工夫の在り方)

2. 外国語に関する課題を踏まえた固有の検討事項

1. 英語力・発信力強化に関する課題

2. 5領域の活動を通じた指導に関する課題

3. 指導体制・環境面に関する課題

4. 社会の期待・認識との乖離に関わる課題

5. その他環境整備等に関する課題

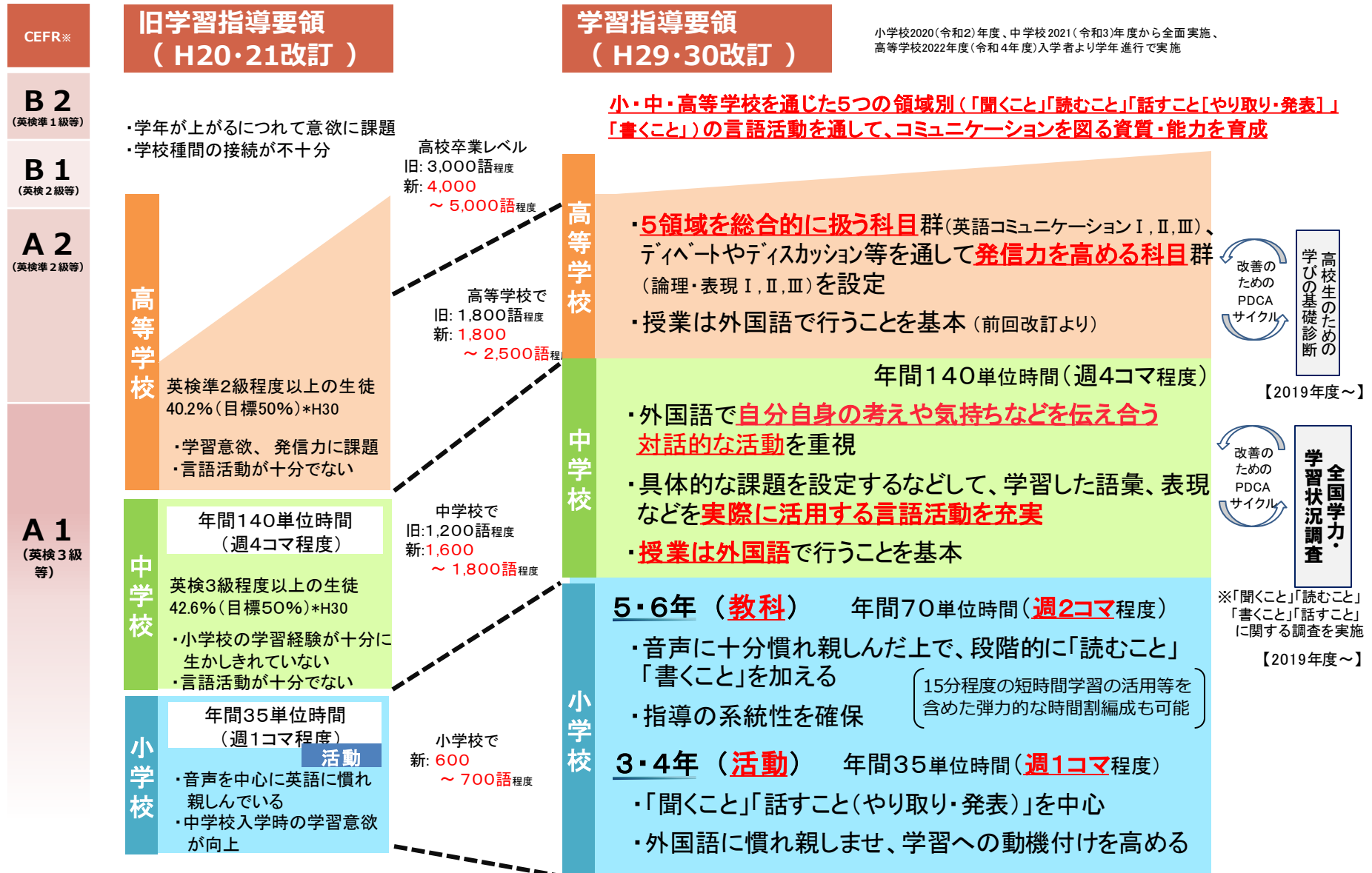


参考資料・データ

1. 現行学習指導要領のポイント

前回改訂における主な改善事項

小3～4年で外国語活動、5～6年で教科化、中学校も授業を英語で実施、高校卒業時の習得単語レベル4000～5000程度に

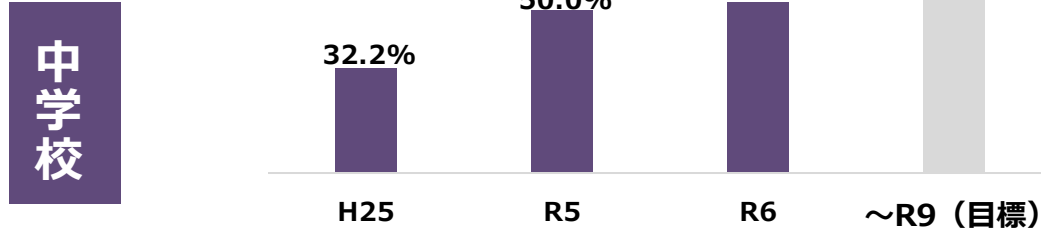


※CEFR：欧州評議会 (Council of Europe) が示す、外国語の学習や教授等のためのヨーロッパ共通参照枠を言う。英検との対照は日本英語検定協会が公表するデータによる。

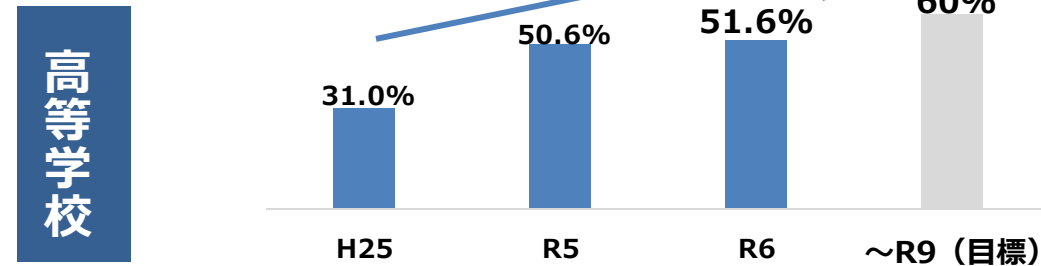
一定の英語力を有する中高生の割合は向上

生徒

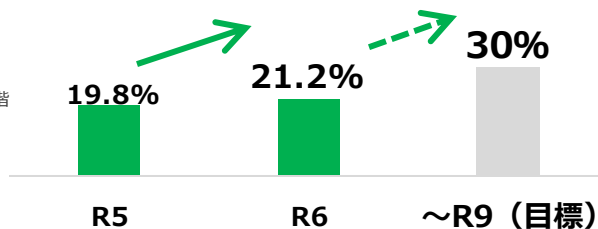
CEFR A1 (英検 3 級相当) 以上



CEFR A2 (英検準 2 級相当) 以上

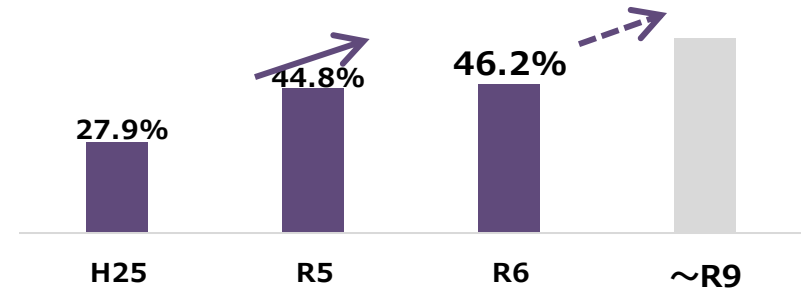


CEFR B1 (英検 2 級相当) 以上

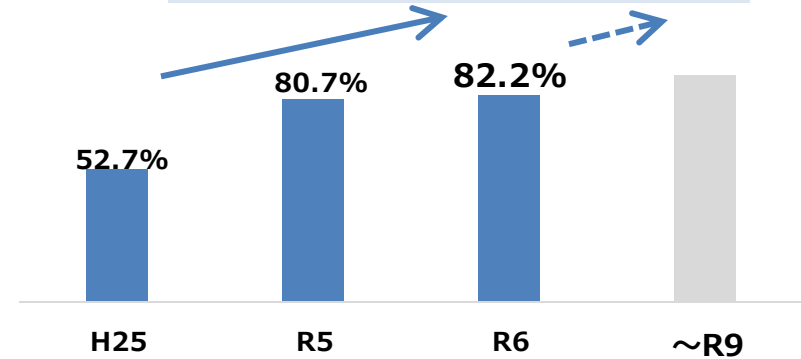


教師

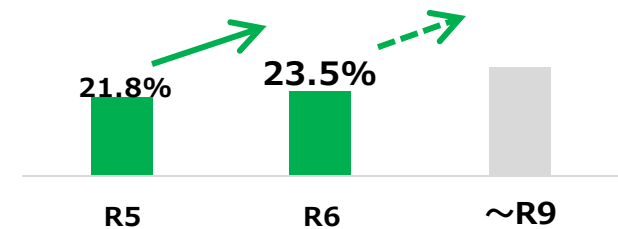
CEFR B2 (英検準 1 級相当) 以上



CEFR B2 (英検準 1 級相当) 以上



CEFR C1 (英検 1 級相当) 以上



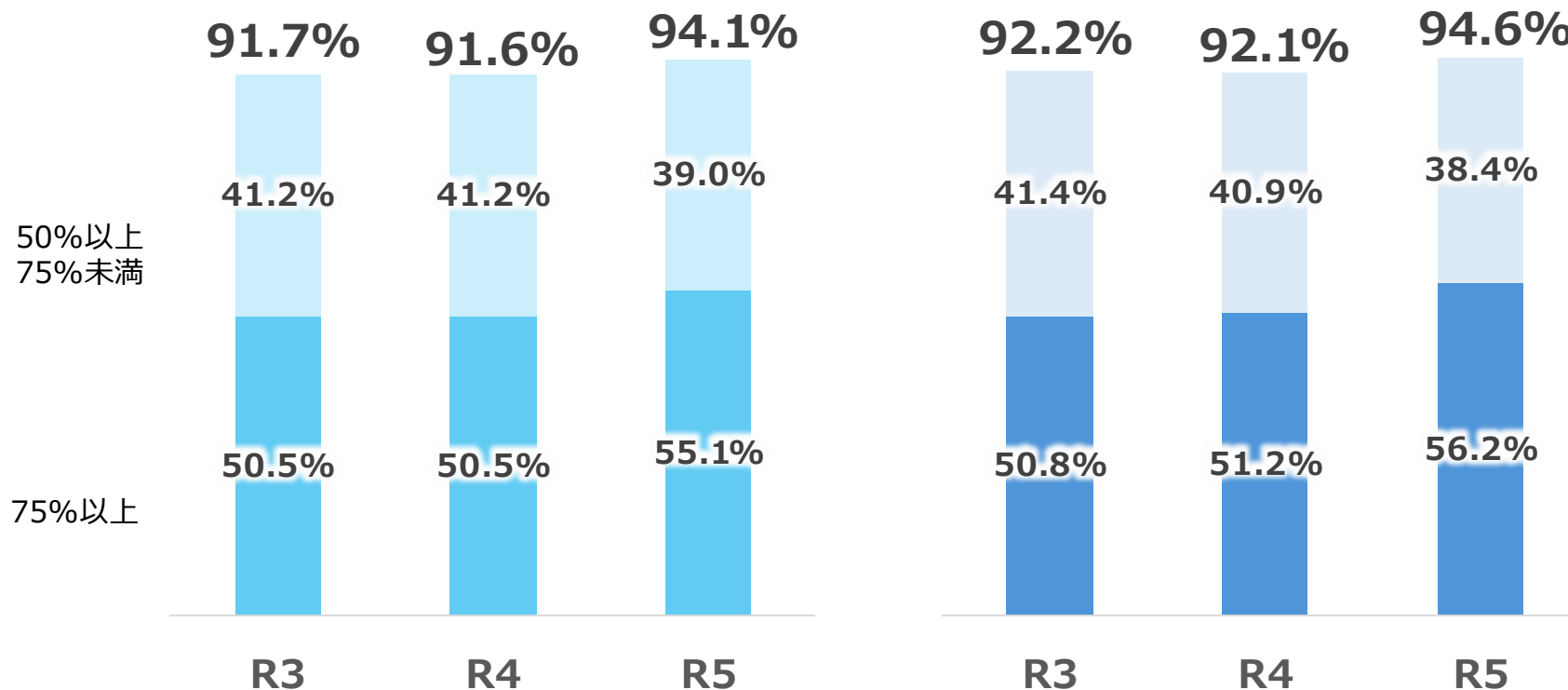
※「第4期教育振興基本計画」(R5~R9)では、
中学校卒業段階でCEFR A1レベル相当以上、高等学校卒業段階
でCEFR A2レベル相当以上を達成した**中高生**の割合**6割**以上、
CEFR **B1**レベル相当以上を達成した**高校生**の割合**3割**以上
を目標としている。

2. 小学校・外国語に関する課題

児童の英語による言語活動時間の割合

小5

小6



※調査対象は公立小学校、義務教育学校の前期課程（H28～）（R4より特別支援学校及び特別支援学級は対象外とする旨、明示）

※R3までは学級単位、R4からは学校単位で回答。

※調査基準日は12月1日現在（H25のみ12月2日現在）

※R4までは1単位時間の授業に占める割合、R5からは1年間の授業を通して占める割合を回答。

※調査年度によって項目立てが異なる。R3までは「授業中、おおむね言語活動を行っている（75%程度以上～）」、「半分以上の時間、言語活動を行っている（50%程度以上～75%程度未満）」、R4からは「授業中、75%以上の時間、言語活動を行っている」「授業中、50%以上75%未満の時間、言語活動を行っている」

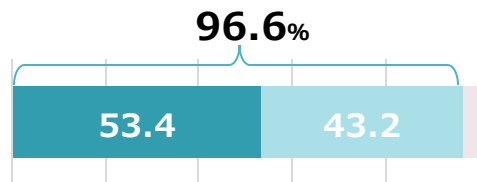
※割合の合計は、小数点第2位切り上げ前の数字を合計して算出しているため、小数点切り上げ後の割合の和と一致しないことがある。

言語活動中心の授業が定着しつつある

教師への調査では、言語活動の状況について**肯定的な回答の割合が高く、言語活動中心の授業が実施されている傾向にある**といえる

Q

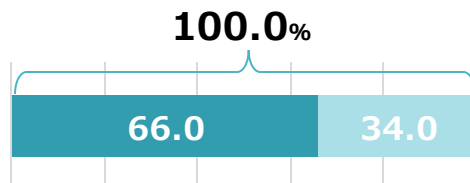
英語の授業で、児童が指導者や友達の考えや気持ちなどを聞く活動をしている



■ そうしている ■ どちらかといえばそうしている

Q

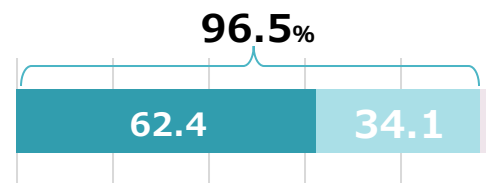
英語の授業で、児童が互いの考えや気持ちなどを伝え合ったり発表したりする活動をしている



■ そうしている ■ どちらかといえばそうしている

Q

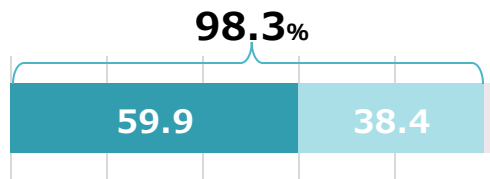
英語の授業で、児童がイラストなどをヒントにしながら、英語で書かれている単語や文を読む活動をしている



■ そうしている ■ どちらかといえばそうしている

Q

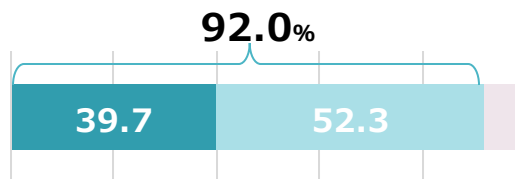
英語の授業で、児童が例文や単語を参考にしながら、自分の考えや気持ちなどを英語で書く活動をしている



■ そうしている ■ どちらかといえばそうしている

Q

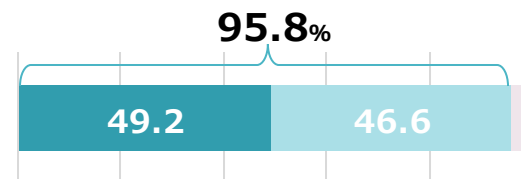
英語の授業で、まずは言語活動に取り組ませ、出てきた課題を共有し、指導したり児童に練習させたりした後、再度言語活動に取り組ませるなど、「言語活動を通して」指導することを意識している



■ そうしている ■ どちらかといえばそうしている

Q

単元を通じて、授業の中心が言語活動となるよう単元計画を立てている



■ そうしている ■ どちらかといえばそうしている

技能別の各問題通過率

相当数の児童ができている問題が多く、特に「聞くこと」については、小3・小4での外国語活動から音声に慣れ親しんできた積み重ねの成果が表れている。

「聞くこと」

5問中4問

問題番号	評価の観点	通過率
2	知・技	85.8%
3(1)	知・技	88.7%
3(2)	知・技	77.7%
4	思・判・表	89.1%
5	思・判・表	85.8%

「読むこと」

10問中9問

問題番号	評価の観点	通過率
1(1)	知・技	96.3%
1(2)	知・技	95.1%
1(3)	知・技	97.6%
6(1)	知・技	87.5%
6(2)	知・技	83.9%
7(1)	思・判・表	84.4%
7(2)	知・技	86.6%
8(1)	知・技	82.0%
8(2)	知・技	84.3%
9	思・判・表	79.4%

「書くこと」

4問中3問

問題番号	評価の観点	通過率
10	知・技	93.2%
11(1)	知・技	87.2%
11(2)	知・技	99.0%
11(3)	思・判・表	79.5%

「話すこと」

5問中4問

問題番号	評価の観点	通過率
12(1)	知・技	100.0%
12(2)	知・技	94.7%
12(3)	知・技	98.6%
12(4)	思・判・表	85.6%
13	知・技	64.0%
	思・判・表	64.7%

「聞くこと」の問題例

先生にインタビューをする設定の中で、尋ねるべき3つの事柄のうち、もう1人が先にどの2つの事柄を尋ねているかを把握し、そのあとに自分が尋ねるべき1つの事柄を選ぶ問題

4 (放送問題)

あなたは、教室にマリア先生のしょうかいコーナーを作るために、マリア先生にケンタさんとインタビューをします。あなたが聞きたいことは下の【メモ】に書いてあります。

あなたより先にケンタさんがマリア先生に質問をします。その会話を一度聞いてみましょう。



マリア先生 ケンタ

【メモ】

マリア先生にインタビュー

- ・好きな教科
- ・好きな食べ物
- ・行きたい国

ケンタ

(問題)

次は、あなたがマリア先生に質問をする番です。【メモ】に書かれていることを知るために、あなたはマリア先生にどんな質問をしますか。これから放送される1から3の質問の中から1つ選び、その数字を□の中に書きましょう。

□

(7)

この後ケンタさんとマリア先生の会話と質問を、もう一度放送します。

【ケンタさんとマリア先生の会話】

ケンタ : Hello, Maria sensei. We have some questions. OK?

マリア先生 : Sure.

ケンタ : I like sports. I like P.E.. What subject do you like?

マリア先生 : I like science.

ケンタ : Me, too. I want to go to India. Where do you want to go?

マリア先生 : I want to go to Brazil.

ケンタ : Brazil? Why?

マリア先生 : I like soccer. I want to watch soccer games in Brazil.

ケンタ : Oh, nice. Thank you.

- 【問題】**
- 1 What sport do you like?
 - 2 Do you like music?
 - 3 What food do you like?

正答率 : 89.1%

- ・日常生活に関する会話を聞いて、目的を達成するために足りない情報が何かを理解することができている
- ・対話を聞いて、簡単な語句や基本的な表現を聞き取った上で、どのような事柄が話されているかを把握できている

- 「書くこと」（一文を書き写す問題）について、学校間で正答率にばらつきが見られる
- 「読むこと」「書くこと」について、指導に難しさを感じている教師が少なからずいることがうかがえる

【書くこと】（一文を書き写す問題）



- **学校間で正答率の割合にばらつきが見られる。**
（学校によって3割程度～9割超の開き）
- **英語の一文を書き写すことに課題のある児童は、他の領域でも困難さを抱えていることが推察される。**
（正答群は、準正答群及び誤答群と比べて「聞くこと」「読むこと」の問題においても正答率が高い）
※課題のある児童は、アルファベットの文字を視覚的に認識できていないこと、アルファベットの文字の読み方と文字が一致していないこと、アルファベットの文字を書き慣れていないこと、単語や文を書く際の表記方法が意識されていないことなどが推察される。
- **教師がどう指導すべきか十分に理解していないことが推察される。**
（教師オンライン質問調査で、「児童が興味・関心をもちやすい」、「児童が理解しやすい」という回答の割合がいずれも低い質問は「書くこと」に集中）
※「書くこと」の質問項目で「児童が興味・関心をもちやすい」、「児童が理解しやすい」と回答した割合はいずれも6割程度。

【読むこと】



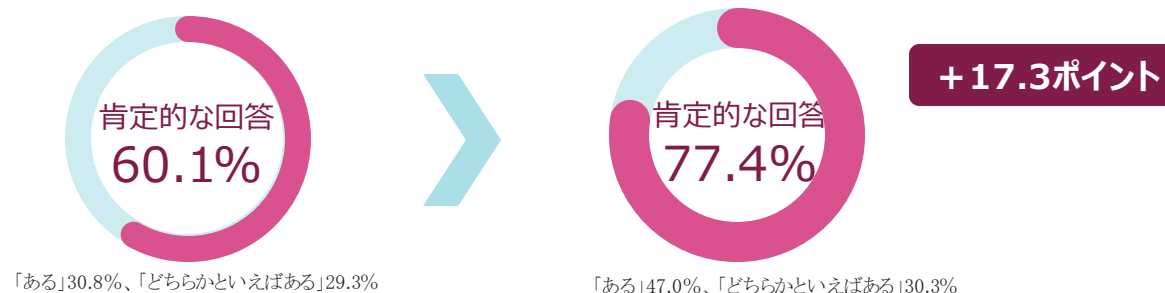
- **「読むこと」の指導について難しさを感じている教師が少なからずいることがうかがえる。**
（教師オンライン質問調査で、「日常生活に関する身近で簡単な事柄を内容とする掲示やパンフレットなどを見て、自分が必要とする情報を得ること」（読むこと）については、「児童が興味・関心をもちやすい」と回答した割合は77.6%である一方、「児童が理解しやすい」は62.3%と、15.3%の差がある。）

生徒質問調査の結果から、**肯定的な回答の割合が高く**、前回改訂時と比較して20%前後増加している。

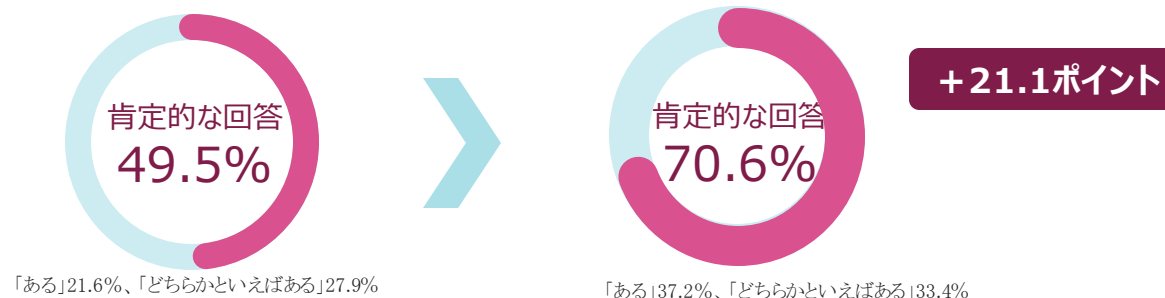
Q

英語を学習していて、小学校での英語の授業が役に立ったと思うことがある（H25→R5）

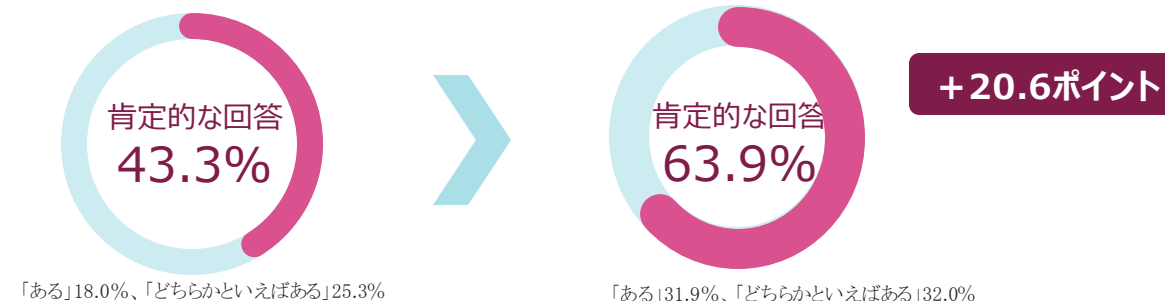
中1



中2



中3

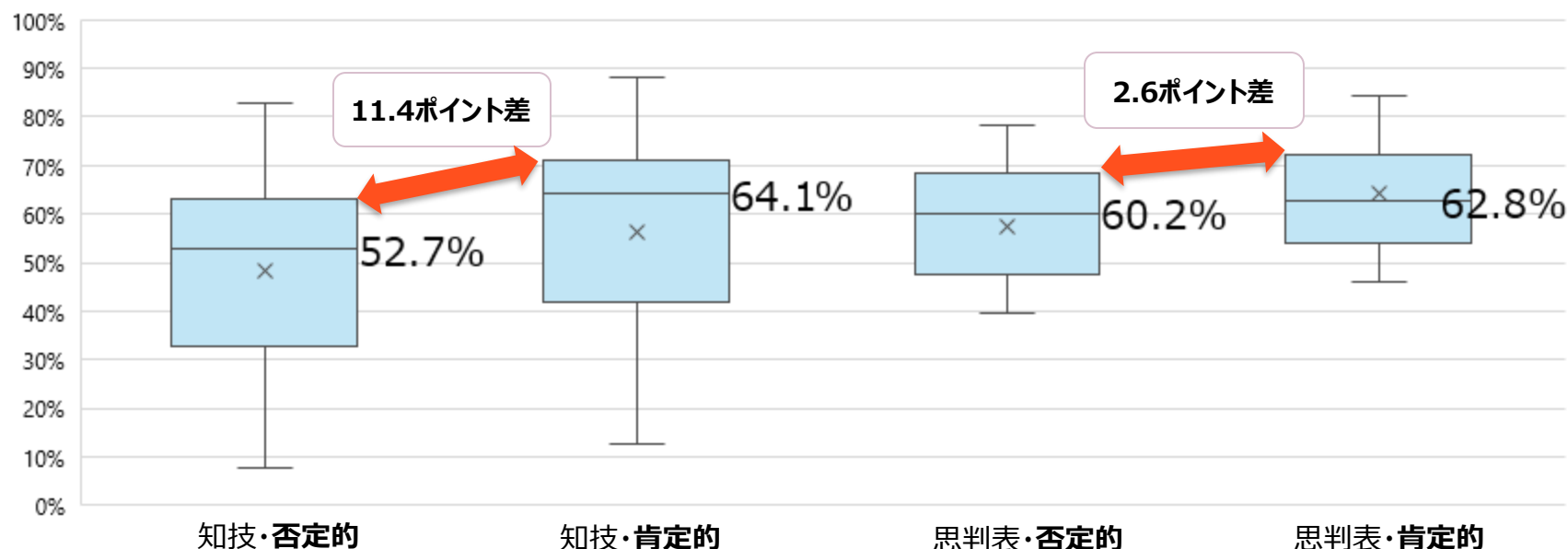


※肯定的な回答を求める際は、小数第2位以下も含めて計算をするため、それぞれの数値は一致しない場合がある。

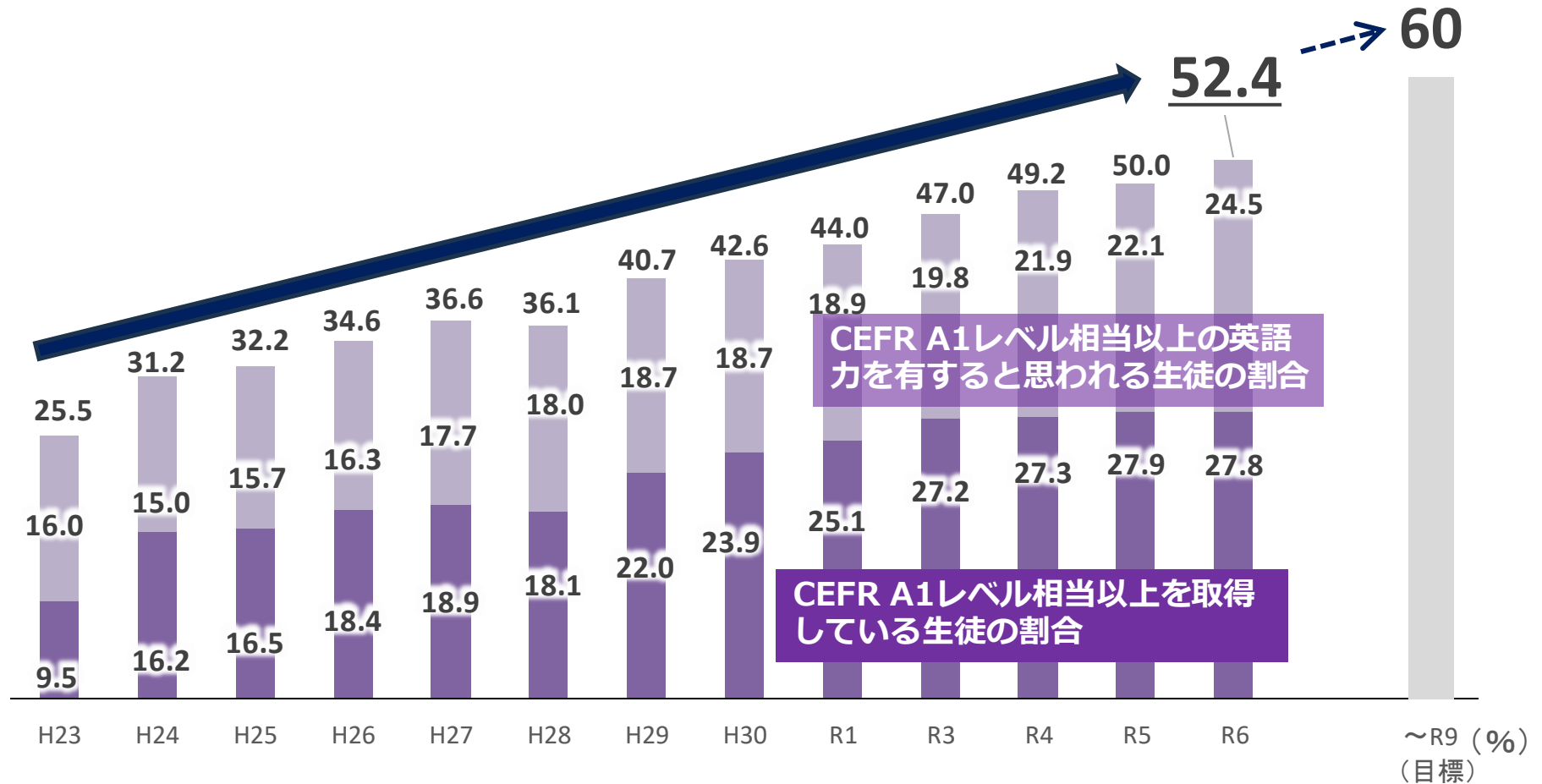
（出典）令和5年度中学校学習指導要領実施状況調査 生徒質問調査



- 「小学校の時、あなたは、英語の学習が好きでしたか」という質問に「そう思っていた」と回答している生徒ほど、どの学年においても「英語の学習が好きだ」という質問に「そう思う」と回答する傾向がある。
- 中1では、「そう思っていた」、「どちらかといえばそう思っていた」と肯定的に回答している生徒と「そう思っていなかった」、「どちらかといえばそう思っていなかった」と否定的に回答している生徒との間で、「知識・技能」問題の通過率の中央値では11.4ポイント、「思考・判断・表現」問題の通過率の中央値では2.6ポイントの差が見られる。この傾向は中2、中3にも同様に見られる。
- 「小学校の時、あなたは、英語の学習が好きでしたか」の回答群別に見た「知識・技能」問題、「思考・判断・表現」問題の通過率の平均の分布（中1）



3. 中学校・外国語に関する課題



※ 「第4期教育振興基本計画」(R5～R9)では、中学校卒業段階でCEFR A1レベル相当以上を達成した中学生の割合6割以上を目標としている。

※ CEFR A1:英検3級相当

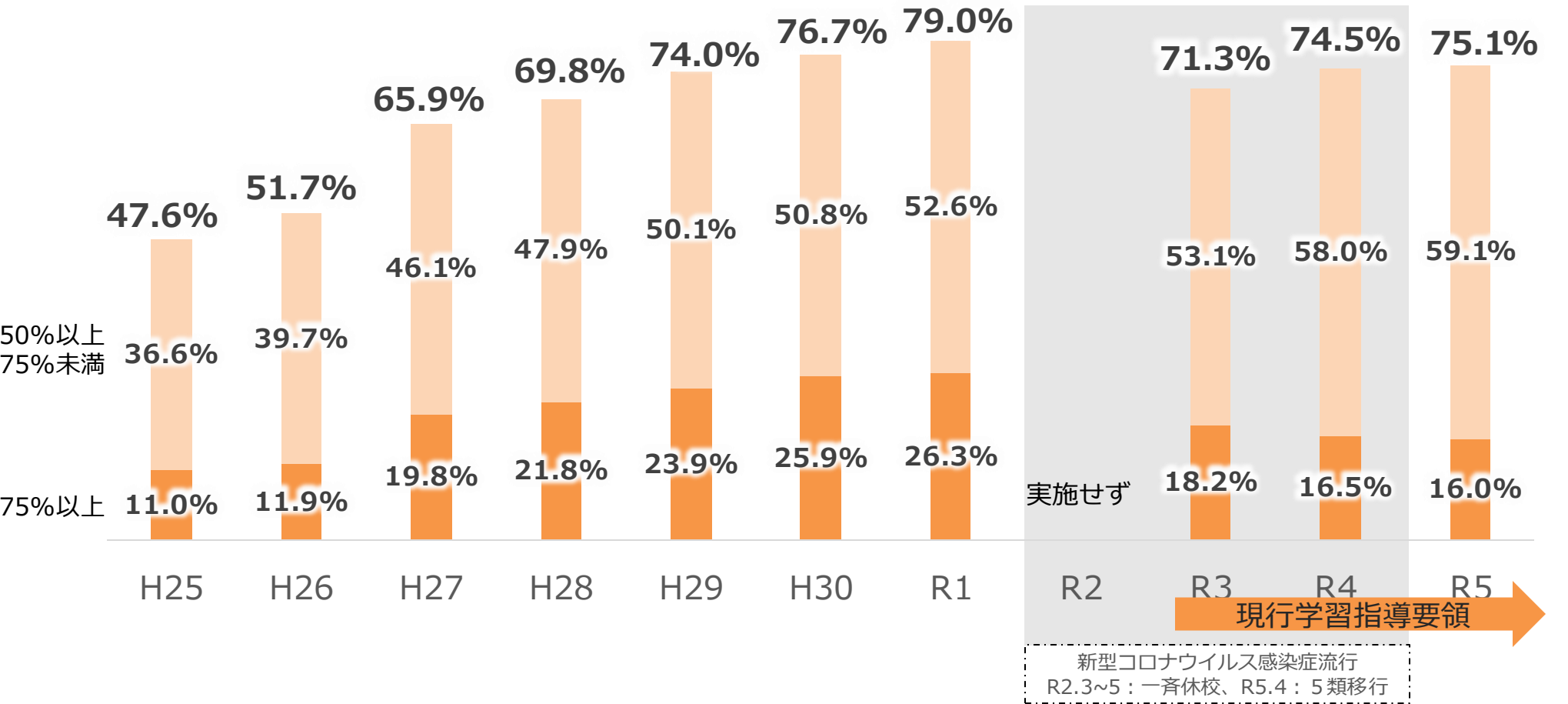
※ 「CEFR A1レベル相当以上の英語力を有すると思われる生徒」とは、実際に外部検定試験の級、スコア等を取っていないが、2技能又は3技能を測る試験におけるスコア、公式な記録としては認定されない試験のスコア、CAN-DOリストに基づく自校でのパフォーマンステストの結果、各教育委員会モデル校での検証に基づいて定めた目安等により、それに相当する英語力を有していると英語担当教師が判断する生徒を指す。

※ CEFR A1レベル相当以上を有するかどうかを判断する際に活用した根拠(複数回答可): 2技能又は3技能を測る試験におけるスコア51.3%、公式な記録としては認定されない試験のスコア41.1%、CAN-DOリストに基づく自校でのパフォーマンステストの結果52.2%、MEXCBTに搭載しているCBT問題の解答状況1.9%、AIツール等による英語力の判定結果1.8%、その他13.5%

※ 上のグラフでは、中学校第3学年の生徒に占める割合を算出している。

※ H23・H24の数値は「『国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策』に係る状況調査」に基づく。

※ 割合の合計は、小数点第2位切り上げ前の数字を合計して算出しているため、小数点切り上げ後の割合の和と一致しないことがある。



※調査対象は公立中学校、義務教育学校の後期課程（H28～）及び中等教育学校の前期課程（R4より特別支援学校及び特別支援学級、R6より夜間学級は対象外である旨、明示）
※R3までは担当教員ごと、R4からは学校単位で回答。H28～30は臨時的任用の者、H25～H30は非常勤講師は除くとの指示あり。
※調査基準日は12月1日現在（H25のみ12月2日現在）
※～R4は1単位時間の授業に占める割合、R5～は1年間の授業を通して占める割合を回答。
※「言語活動」に関する項目に記載の定義について、調査年度により具体例は異なっている。
※調査年度によって項目立てが異なる。R3までは「授業中、おおむね言語活動を行っている（75%程度以上～）」、「半分以上の時間、言語活動を行っている（50%程度以上～75%程度未満）」、R4からは「授業中、75%以上の時間、言語活動を行っている」「授業中、50%以上75%未満の時間、言語活動を行っている」
※割合の合計は、小数点第2位切り上げ前の数字を合計して算出しているため、小数点切り上げ後の割合の和と一致しないことがある。

教師への調査では、言語活動の状況について**肯定的な回答の割合が高く**、**言語活動中心の授業が実施されている傾向にある**といえる

Q

英語の授業では、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等を設定し、それらを生徒が理解し、外国語で表現し伝え合うことを大切にしている

中 1	93.4%
中 2	92.5%
中 3	88.7%

※「そうしている」、「どちらかといえばそうしている」という肯定的な回答の割合

Q

英語の授業で、まずは言語活動に取り組み、出てきた課題を共有し、指導したり生徒に練習させたりした後、再度、言語活動に取り組みさせるなど、「言語活動を通して」指導することを意識している

中 1	83.1%
中 2	87.1%
中 3	73.1%

※「そうしている」、「どちらかといえばそうしている」という肯定的な回答の割合

Q

生徒の英語による言語活動が授業の中心となるようにしている

中 1	74.2%	+2.6ポイント (前回比較)
中 2	77.0%	+9.1ポイント (前回比較)
中 3	71.9%	+5.4ポイント (前回比較)

※「そうしている」、「どちらかといえばそうしている」という肯定的な回答の割合

Q

英語の授業では、言語材料の定着を図るため、意味のある文脈の中でコミュニケーションを通して繰り返し活用し定着を図ることができるよう指導している

中 1	91.9%
中 2	88.7%
中 3	87.7%

※「そうしている」、「どちらかといえばそうしている」という肯定的な回答の割合

Q

英語の授業では、文法はコミュニケーションを支えるものであることを踏まえ、言語活動と効果的に関連付けて指導している

中 1	94.5%	+3.6ポイント (前回比較)
中 2	97.6%	+4.6ポイント (前回比較)
中 3	96.4%	+4.6ポイント (前回比較)

※「そうしている」、「どちらかといえばそうしている」という肯定的な回答の割合

文法はコミュニケーションを支えるものであることを踏まえ、言語活動と効果的に関連付けて指導していることがうかがわれる

「知能・技能」

「聞くこと」

	R5調査の 問題番号	H25の 通過率	R5の 通過率
中1	A 1(1)	58.6%	↑ 64.0%
中2	A 1(3)	36.4%	↑ 50.9%
中3	A 1(2)	44.0%	↑ 51.7%

「読むこと」

	R5調査の 問題番号	H25の 通過率	R5の 通過率
中1	A 6(1)	60.4%	↑ 66.6%
中2	A 6(1)	70.9%	↑ 71.8%
中2	B 9(2)	77.8%	↑ 78.1%
中3	A 6(1)	46.0%	↑ 54.6%

「書くこと」

	R5調査の 問題番号	H25の 通過率	R5の 通過率
中2	B 6(1)～(3)	25.0%※	↑ 43.7%※
中3	A 10(1)	39.7%	↓ 36.9%
中3	A 10(2)	55.9%	↓ 35.5%
中3	A 10(3)	40.6%	↓ 24.1%

※中2の問題の通過率は平均値



「聞くこと」「読むこと」の問題では通過率が軒並み上がっているが、
「書くこと」の問題では、中2は通過率が上がっているものの、中3では下がっている。

「思考・判断・表現」

※問題番号は前半出題冊子の番号

「聞くこと」

	R5調査の 問題番号	H25の 通過率	R5の 通過率
中2	A 3	17.7%	↑ 47.5%
中2	C 3	63.9%	↑ 75.5%

「読むこと」

	R5調査の 問題番号	H25の 通過率	R5の 通過率
中1	B 10	68.5%	↑ 69.3%
中1	A 9	66.0%	↑ 67.5%
中2	B 10	43.4%	↓ 41.6%
中2	A 8	48.2%	↑ 49.0%
中3	A 7	64.8%	↑ 67.4%
中3	A 8	71.7%	↓ 70.9%

「書くこと」

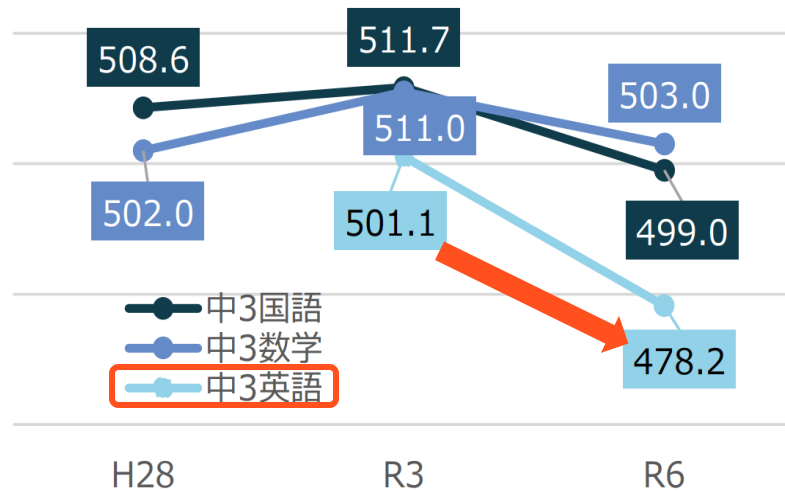
	R5調査の 問題番号	H25の 通過率	R5の 通過率
該当問題なし			



「聞くこと」の問題では、中2で同一問題が2問出題されており、2問とも通過率が上がっている。
また、「読むこと」の問題でも各学年2問ずつ出題されており、6問中4問で通過率が上がっている。

R3→R6でスコアが低下 4技能のうち特に「書くこと」「話すこと」で正答率が低下

平均スコアの推移（中学校）



同一問題の比較※

聞くこと

正答率
上昇 正答率
低下



読むこと

正答率
上昇 正答率
低下 正答率が
5ポイント以上
低下



書くこと

正答率
低下 正答率が
5ポイント以上低下



話すこと

正答率
上昇 正答率が
5ポイント以上低下



基本的な語や文法事項等を理解して書くことができていないと考えられる

問題例

- 1人称単数過去進行形の肯定文を正確に書くことができるかどうかをみる問題

正答率 R3 27.2% > R6 19.2%
8.0ポイント減少

- 与えられた情報に基づいて、3人称単数現在形の否定文を正確に書くことができるかどうかをみる問題

正答率 R3 36.7% > R6 29.8%
6.9ポイント減少

全体的に無解答率が多くなっている

問題例

- 与えられたテーマについて考えを整理し、まとまりのある内容を話すことができるかをみる問題（通し番号44）

・ 正答率 : 7.9ポイント減の13.3%
・ 無解答率 : 11.2ポイント増の22.0%

※ R3とR6（PBT実施校）の結果のうち継続して出された問題のみを比較。

（出典）令和6年度全国学力・学習状況調査経年変化分析調査実施結果報告書（令和7年7月）p.43～45
https://www.nier.go.jp/24chousakekkahoukoku/kannren_chousa/pdf/24keinen_report.pdf

- 「聞くこと」「読むこと」において日常的な話題について必要な情報を捉えたり、大まかな内容（概要）を捉えたりすることは相当数の生徒ができています設問がある
- 一方、「読むこと」において社会的な話題について要点を捉えることは課題がある

中2「聞くこと」

日常的な話題について話の概要を捉えることができるかをみる問題

授業で友達のスピーチを聞いて、全体の内容を捉えタイトルが何かを選ぶ問題

3 (放送問題)

英語の授業で、「My Favorite Things ～私のお気に入り～」を紹介するという活動をしています。あなたは、友だちが全体として何を伝えようとしているのかを聞き取り、スピーチのタイトルを聞き取りシートに記入します。今日の山野さんのスピーチを聞いて、★のところに記入するタイトルとして最も適切なものを次の1から4の中から1つ選びなさい。英文は2回繰り返して言います。15

聞き取りシート

スピーチ発表会「My Favorite Things ～私のお気に入り～」聞き取りシート

学習日	発表者	スピーチにタイトルをつけよう	一言感想
2/3(月)	川田さん	サイクリングに熱中している理由	川田さんがサイク
2/4(火)	山野さん	★	

【スピーチの原稿】

Hi, everyone. Today I'm going to talk about my favorite things. Well, I like studying English. I'll tell you my reasons.
First, I like English songs. When I sing in English, I feel happy.
Second, I like using computers. A lot of information on the Internet is in English. I enjoy getting new information in English.
Finally, speaking English is really fun for me. When I talk with my friends in English, I learn a lot about them.
Thank you.

【選択式（CD冊子）の選択肢】

- 1 英語の勉強が好きな理由
- 2 英語の歌が好きな理由
- 3 コンピュータが好きな理由
- 4 友達との会話が好きな理由

通過率：75.5%

中2「読むこと」

社会的な話題について、まとまりのある文章を読んで、文章の要点を捉えることができるかをみる問題

ごみ問題に関する新聞記事を読んで、記事の内容に合う選択肢を選ぶ問題

- 9 カナダに留学をしているあなたは、新聞に中学生が投稿した記事を見つけました。この中学生が一番言いたいことは何ですか。最も適切なものを次の1から4の中から1つ選びなさい。(13)

Trash Problem

Mary Smith

Trash is a big problem nowadays. On my way home, I see a lot of trash on the road. It's really sad. How can we improve this problem?

First, I think people should take their trash home. It is also a good idea to put more trash cans around the city. However, it costs money and some people still may throw trash on the road.

Second, I want more people to join volunteer activities to clean the city. I belong to a volunteer club. Last Sunday, I joined "Clean Up Day" in my city. We picked up various trash. For example, cans, papers, and bottles. After that, the streets were so clean!

Everyone can do something small for our city. Let's try together! If the city is clean, everyone can have a good life.

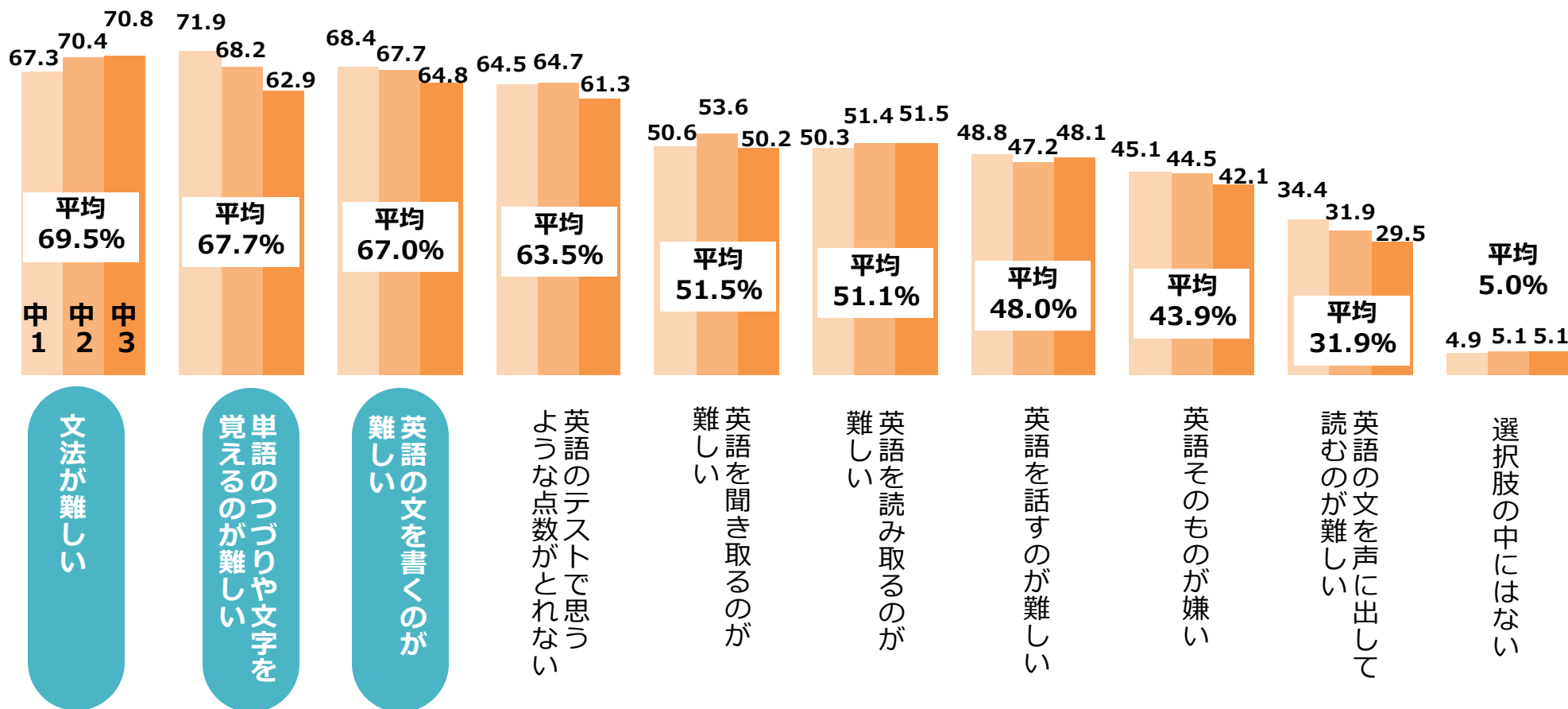
(注) nowadays：最近 cost：お金がかかる throw：捨てる
belong to：所属している various：様々な can：缶 bottle：ビン
activity：活動 take action：行動を起こす

【選択肢】

- 1 最近ごみ問題が生じている。
- 2 一人一人がゴミを持ち帰るべきだ。
- 3 多くの人にゴミを拾う活動に参加してほしい。
- 4 みんなが町のために何か行動しよう。

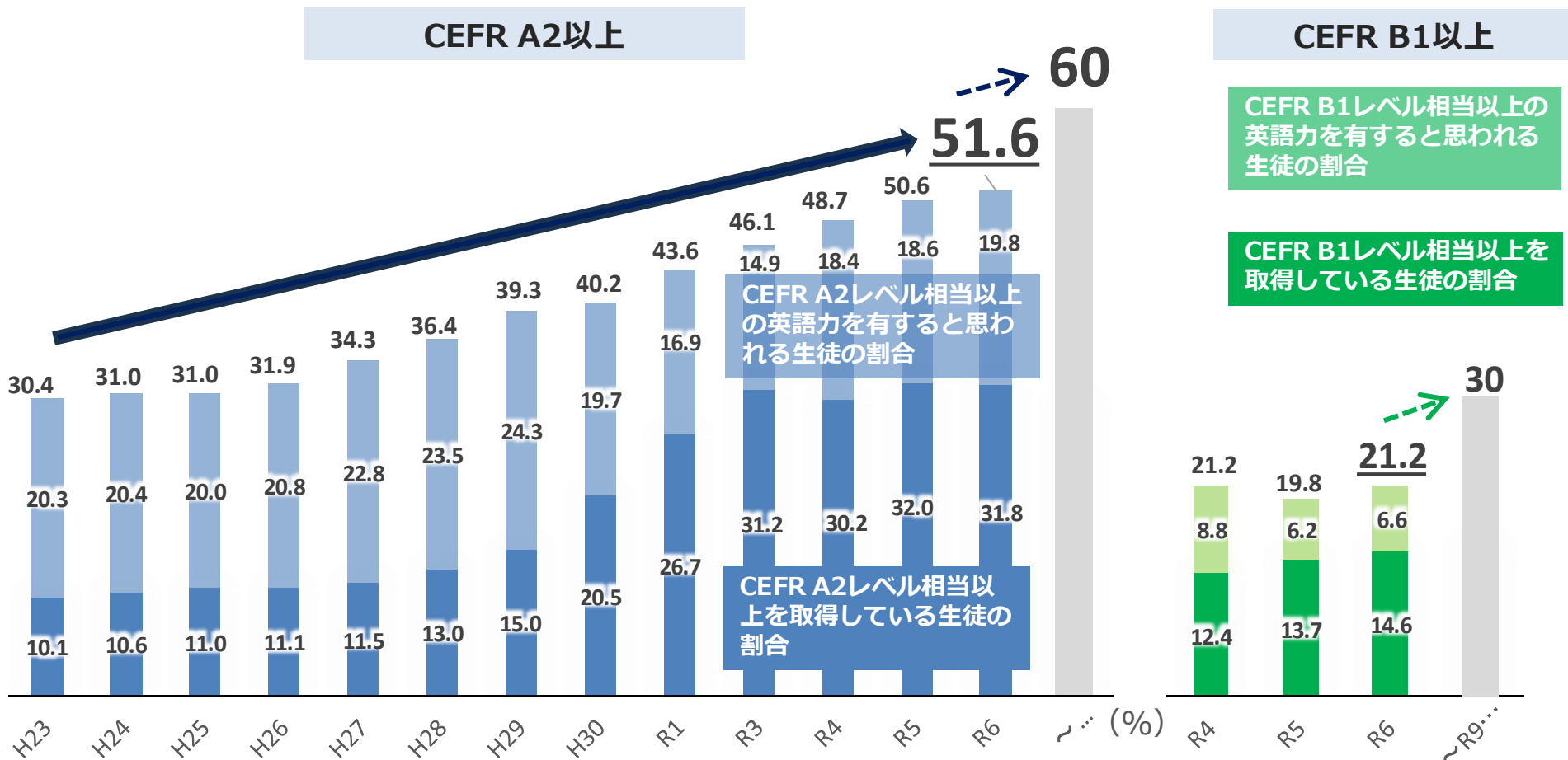
通過率：42.9%

「英語の学習が好きだ」に否定的な回答の理由



4. 高等学校・外国語に関する課題

- CEFR A2レベル相当以上を達成した高校生の割合は**51.6%**で増加
- CEFR B1レベル相当以上を達成した高校生の割合は**21.2%**で増加



※「第4期教育振興基本計画」(R5~R9)では、高等学校卒業段階でCEFR A2レベル相当以上を達成した高校生の割合6割以上、CEFR B1レベル相当以上を達成した高校生の割合3割以上を目標としている。

※CEFR A2:英検準2級、B1:英検2級相当

※「CEFR A2/B1レベル相当以上の英語力を有すると思われる生徒」とは、実際に外部検定試験の級、スコア等未取得していないが、2技能又は3技能を測る試験におけるスコア、公式な記録としては認定されない試験のスコア、CAN-DOリストに基づく自校でのパフォーマンステストの結果、各教育委員会でモデル校での検証に基づいて定めた目安等により、それに相当する英語力を有していると英語担当教師が判断する生徒を指す。

※CEFR A2/B1レベル相当以上を有するかどうかを判断する際に活用した根拠(複数回答可): 2技能又は3技能を測る試験におけるスコア47.4%、公式な記録としては認定されない試験のスコア16.1%、CAN-DOリストに基づく自校でのパフォーマンステストの結果45.0%、MEXCBTに搭載しているCBT問題の解答状況0.3%、AIツール等による英語力の判定結果1.2%、その他21.6%

※上のグラフでは、高等学校第3学年の生徒に占める割合を算出している。

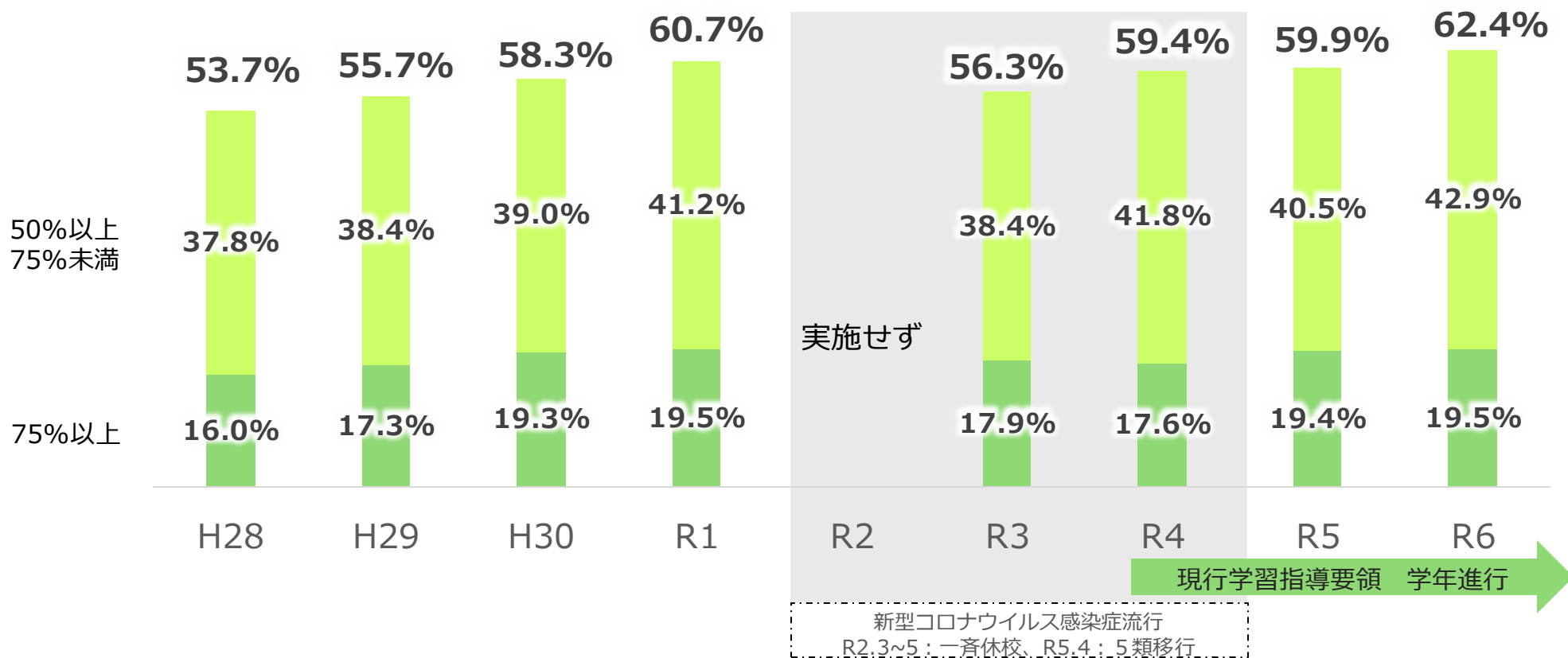
※H23・H24の数値は「『国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策』に係る状況調査」に基づく。

(出典) 令和6年度英語教育実施状況調査

生徒の英語による言語活動時間の割合

(コミュニケーション英語Ⅰ、英語コミュニケーションⅠ)

【普通科+その他の専門学科及び総合学科】



※調査対象は公立高等学校及び中等教育学校の後期課程（定時制及び通信制の課程は対象外。R4より特別支援学校は対象外である旨、明示）

※R3までは担当教員ごとに、R4からは学科単位で回答。H28～30は臨時的任用の者、非常勤講師は除くとの指示あり。

※調査基準日は12月1日現在

※R4までは1単位時間の授業に占める割合、R5からは1年間の授業を通して占める割合を回答。

※「言語活動」に関する項目に記載の定義について、調査年度により具体例は異なっている。

※調査年度によって項目立てが異なる。R3までは「授業中、おおむね言語活動を行っている（75%程度以上～）」、「半分以上の時間、言語活動を行っている（50%程度以上～75%程度未満）」、R4からは「授業中、75%以上の時間、言語活動を行っている」「授業中、50%以上75%未満の時間、言語活動を行っている」

※現行CSの年次進行のため、R4は高1について、R5は高1・2について回答。

※割合の合計は、小数点第2位切り上げ前の数字を合計して算出しているため、小数点切り上げ後の割合の和と一致しないことがある。

言語活動中心の授業に一定の進捗 (英語コミュニケーション I)

教師への調査では、言語活動の状況について**肯定的な回答の割合が高く**、**言語活動中心の授業が実施されている傾向にある**といえる

Q

コミュニケーションを行う目的や場面、状況等を設定し、それらを生徒が理解し、外国語で表現し伝え合うことを大切にしている

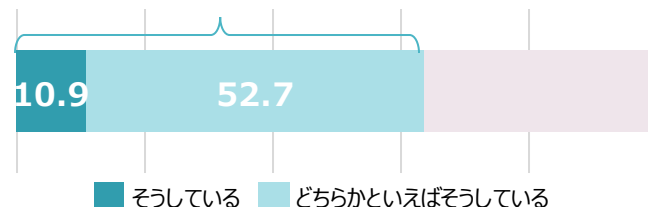
79.9%



Q

生徒の英語による言語活動が授業の中心となるようにしている

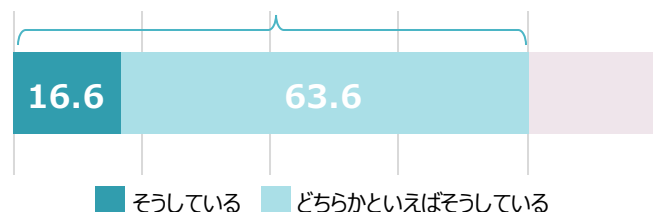
63.6%



Q

外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動及びこれらを結び付けた統合的な言語活動を行っている

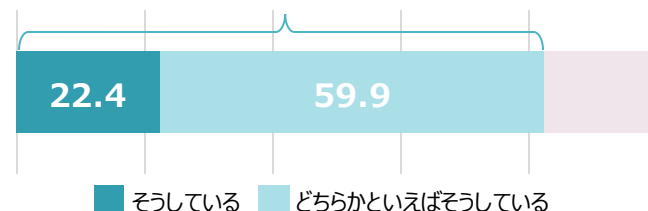
80.2%



Q

文法はコミュニケーションを支えるものであることを踏まえ用語や用法の区別などが指導の中心とならないように配慮し、実際に活用できるよう言語活動と効果的に関連付けて指導している

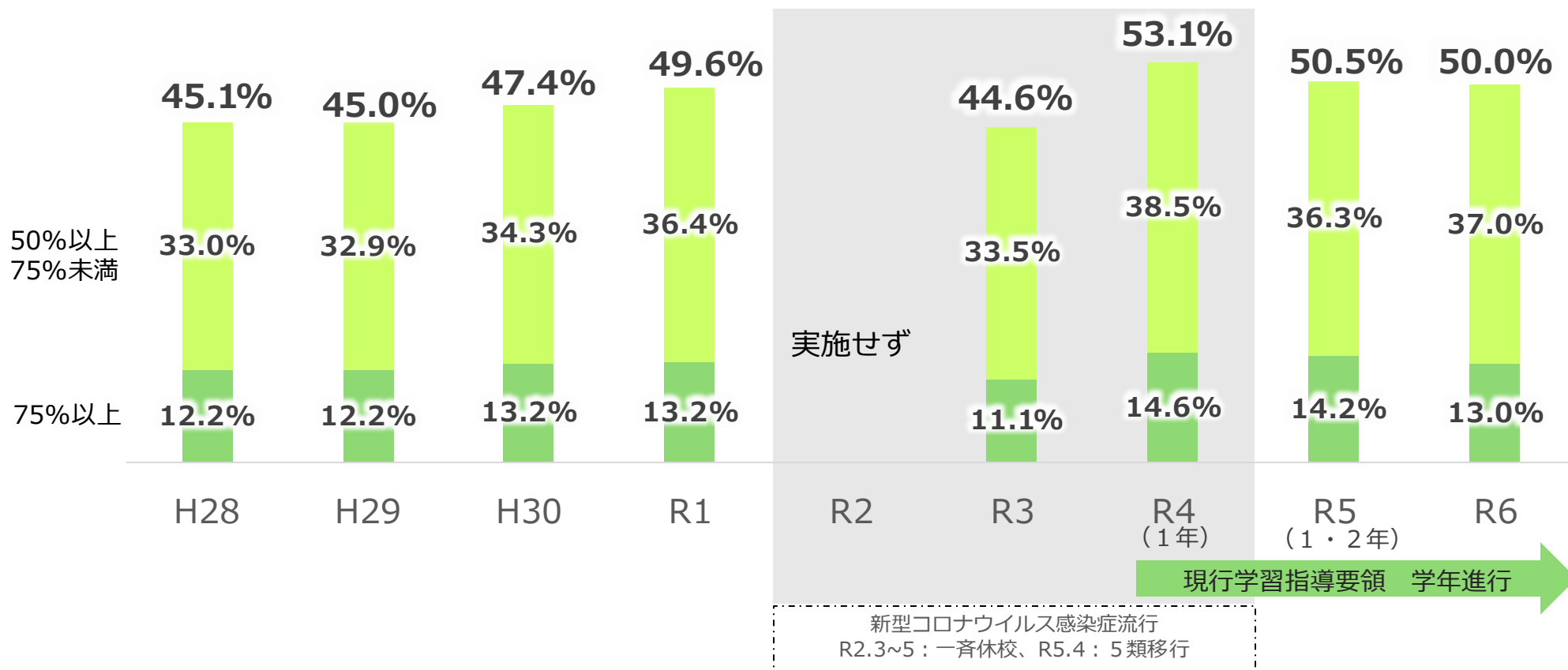
82.3%



生徒の英語による言語活動時間の割合

(英語表現Ⅰ、論理・表現Ⅰ)

【普通科＋その他の専門学科及び総合学科】



※調査対象は公立高等学校及び中等教育学校の後期課程（定時制及び通信制の課程は対象外。R4より特別支援学校は対象外である旨、明示）

※R3までは担当教員ごとに、R4からは学科単位で回答。H28～30は臨時的任用の者、非常勤講師は除くとの指示あり。

※調査基準日は12月1日現在

※R4までは1単位時間の授業に占める割合、R5からは1年間の授業を通して占める割合を回答。

※「言語活動」に関する項目に記載の定義について、調査年度により具体例は異なっている。

※調査年度によって項目立てが異なる。R3までは「授業中、おおむね言語活動を行っている（75%程度以上～）」、「半分以上の時間、言語活動を行っている（50%程度以上～75%程度未満）」、

R4からは「授業中、75%以上の時間、言語活動を行っている」「授業中、50%以上75%未満の時間、言語活動を行っている」

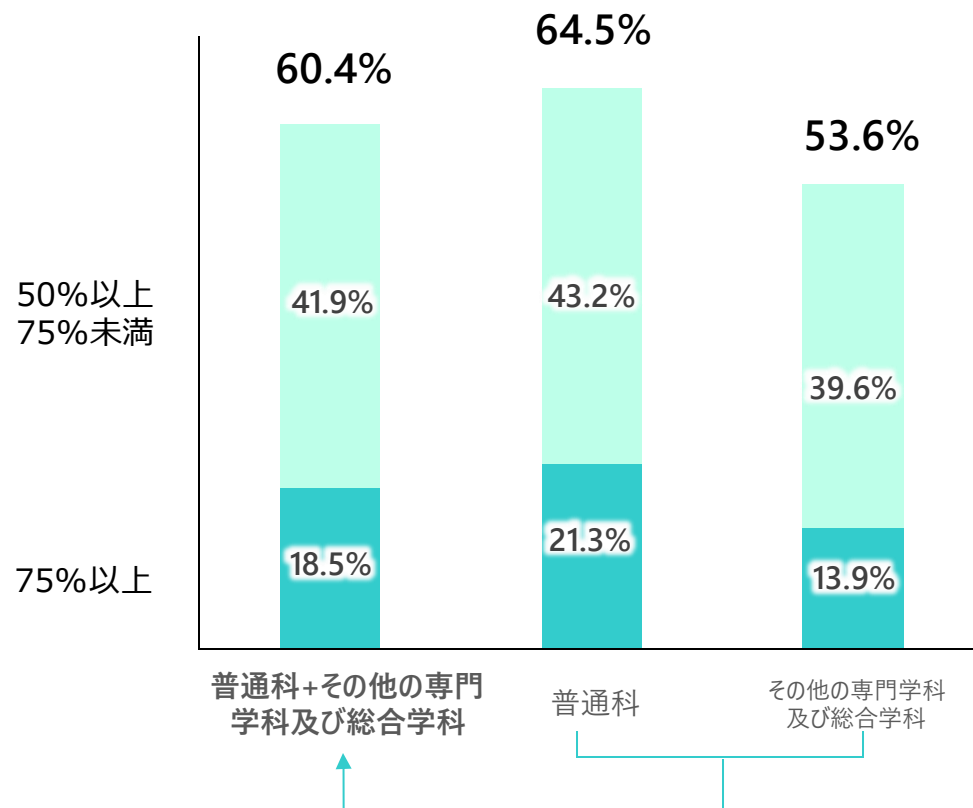
※現行CSの年次進行のため、R4は高1について、R5は高1・2について回答。

※割合の合計は、小数点第2位切り上げ前の数字を合計して算出しているため、小数点切り上げ後の割合の和と一致しないことがある。

英語コミュニケーション

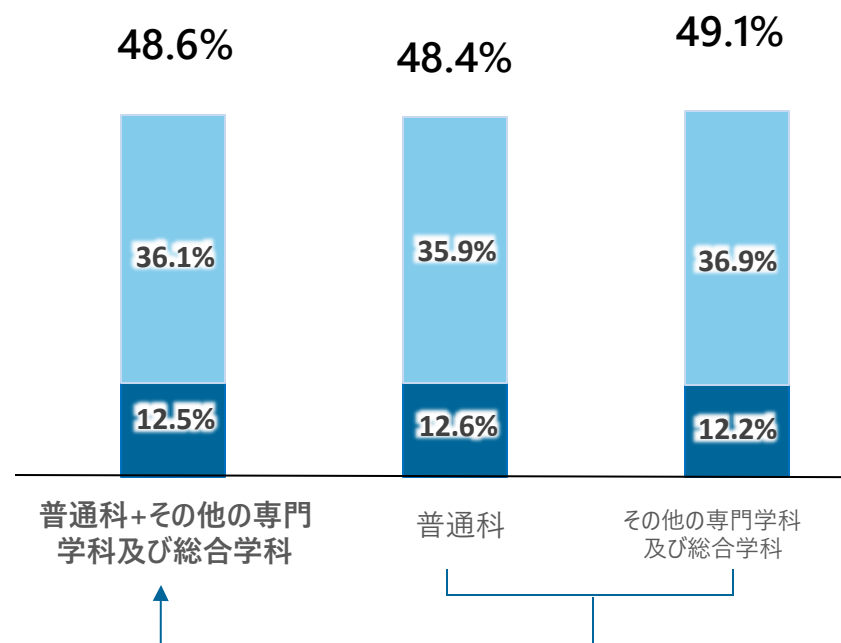
5領域を総合的に扱う科目群

(授業中の言語活動の割合)



論理・表現

ディベートやディスカッション等を通して
発信力を高める科目群



※ 【英語コミュニケーション】は英語コミュニケーションⅠ～Ⅲ、【論理・表現】は論理・表現Ⅰ～Ⅲの回答を合算して集計している。

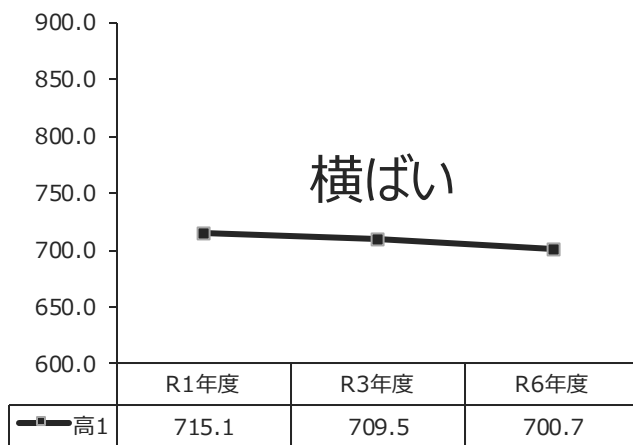
(出典) 令和6年度英語教育実施状況調査より作成。

高校の全体傾向（4技能総合スコア）

文部科学省から株式会社ベネッセコーポレーションに委託し、R1、R3、R6年度におけるGTECの結果等を分析したもの。詳細は参考資料12を参照。

4技能総合 全国平均スコア

高1

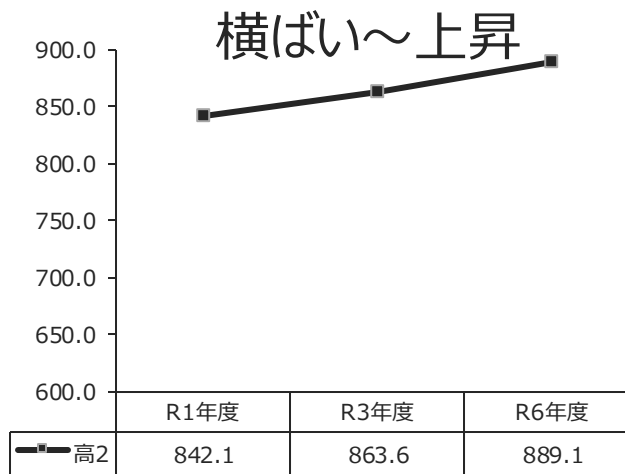


※ η^2 : 0.002

平均 CEFR	A2	A2	A2
平均 CEFR-J	A2.1	A2.1	A2.1

※標準偏差：R1は136.4、R3は138.9、R6は145.3。

高2



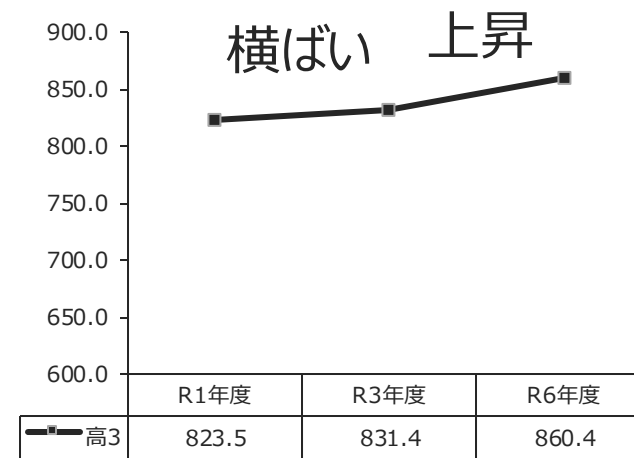
※ η^2 : 0.018

※Cohen's d : R1-R3 -0.154 ; R3-R6 -0.186

平均 CEFR	A2	A2	A2
平均 CEFR-J	A2.2	A2.2	A2.2

※標準偏差：R1は138.6、R3は129.6、R6は149.7。

高3



※ η^2 : 0.013

※Cohen's d : R1-R3 -0.059 ; R3-R6 -0.204

平均 CEFR	A2	A2	A2
平均 CEFR-J	A2.2	A2.2	A2.2

※標準偏差：R1は134.0、R3は136.8、R6は147.0。

スコア680～929：CEFR A2、スコア680～809：CEFR-J A2.1、スコア810～929：CEFR-J A2.2

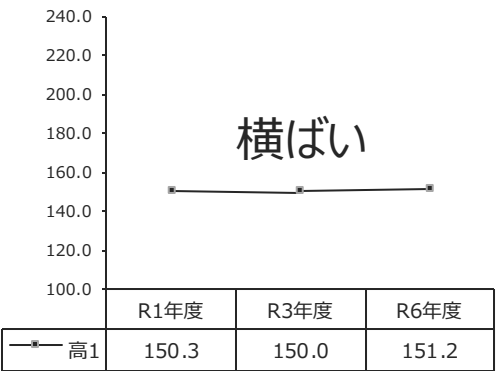
※「4技能」の表記について、本調査はJCS下の生徒も対象としているため、「4技能・5領域」と表記していません。

※集団属性情報【高校】：学校実施の受検データであり学年全体のデータが基本／公立高校が約6割、私立高校が約4割を占める／4年制大学に進学する生徒が約9割以上の学校の生徒が約8割を占める／首都圏・近畿の受検者が約5割を占める。

高1 経年比較 4 技能別の傾向

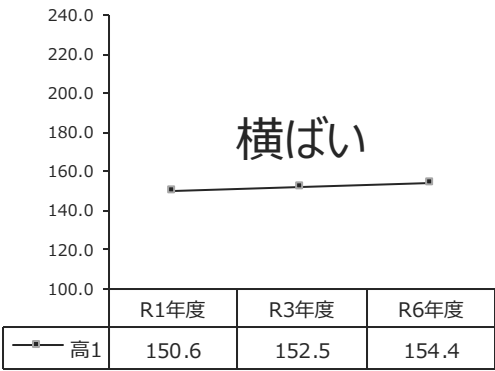
各技能 全国平均スコア

聞くこと Listening



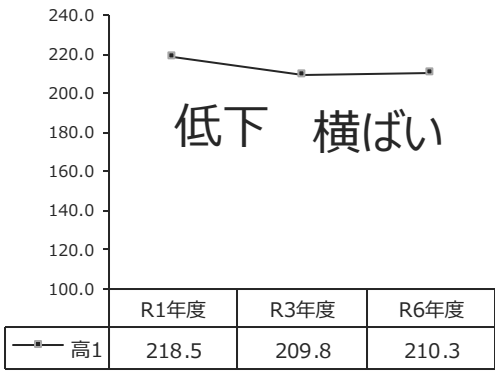
※ η^2 : 0.000

読むこと Reading



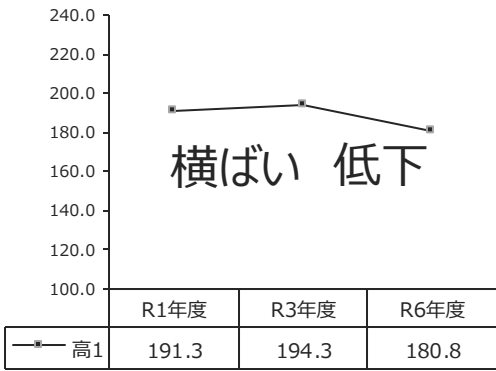
※ η^2 : 0.001

話すこと Speaking



※ η^2 : 0.012
※Cohen's d : R1-R3 0.229 ; R3-R6 -0.012

書くこと Writing



※ η^2 : 0.015
※Cohen's d : R1-R3 -0.068 ; R3-R6 0.301

平均 CEFR	A1	A1	A1
平均 CEFR-J	A1.3	A1.3	A1.3

※標準偏差 : R1は42.2、R3は45.7、R6は46.8。

平均 CEFR	A2	A2	A2
平均 CEFR-J	A2.1	A2.1	A2.1

※標準偏差 : R1は39.0、R3は39.7、R6は41.2。

平均 CEFR	A2	A2	A2
平均 CEFR-J	A2.1	A2.1	A2.1

※標準偏差 : R1は39.9、R3は36.9、R6は38.0。

平均 CEFR	A2	A2	A1
平均 CEFR-J	A2.1	A2.1	A1.3

※標準偏差 : R1は43.9、R3は41.9、R6は48.7。

Listeningスコア70～159 : CEFR A1、スコア130～159 : CEFR-J A1.3

Readingスコア150～219 : CEFR A2、スコア150～179 : CEFR-J A2.1

Speakingスコア180～259 : CEFR A2、スコア180～229 : CEFR-J A2.1

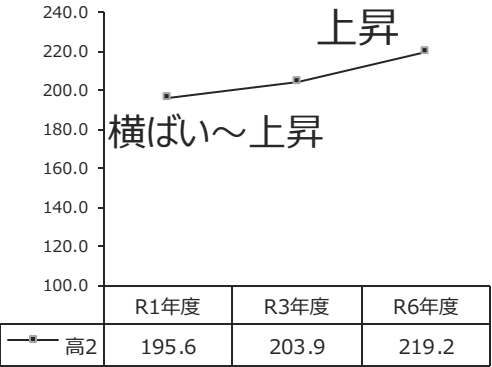
Writingスコア70～189 : CEFR A1、スコア190～229 : CEFR A2、スコア140～189 : CEFR-J A1.3、スコア190～209 : CEFR-J A2.1

※「4 技能」の表記について、本調査は旧CS 下の生徒も対象としているため、「4 技能・5 領域」と表記していません。
※集団属性情報【高校】 : 学校実施の受検データであり学年全体のデータが基本 / 公立高校が約6割、私立高校が約4割を占める / 4 年制大学に進学する生徒が約 9 割以上の学校の生徒が約 8 割を占める / 首都圏・近畿の受検者が約5割を占める。

高2 経年比較 4 技能別の傾向

各技能 全国平均スコア

聞くこと Listening

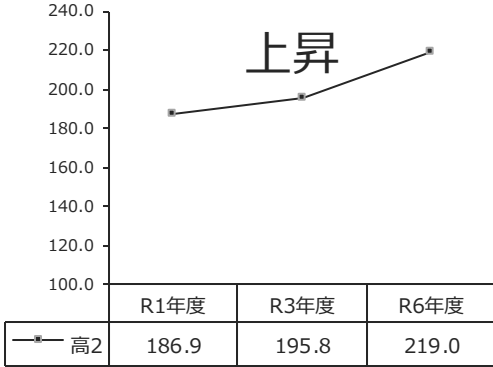


※ η^2 : 0.036
※Cohen's d : R1-R3 -0.170 ; R3-R6 -0.299

平均 CEFR	A2	A2	A2
平均 CEFR-J	A2.2	A2.2	A2.2

※標準偏差 : R1は45.7、R3は48.7、R6は52.4。

読むこと Reading

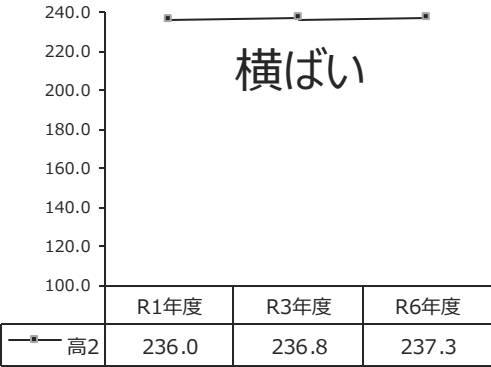


※ η^2 : 0.097

平均 CEFR	A2	A2	A2
平均 CEFR-J	A2.2	A2.2	A2.2

※標準偏差 : R1は37.3、R3は37.9、R6は45.9。

話すこと Speaking

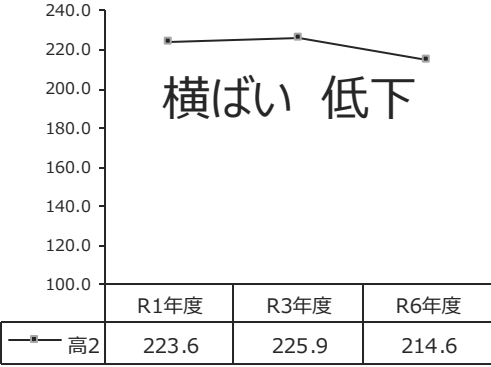


※ η^2 : 0.000

平均 CEFR	A2	A2	A2
平均 CEFR-J	A2.2	A2.2	A2.2

※標準偏差 : R1は42.0、R3は36.3、R6は33.1。

書くこと Writing



※ η^2 : 0.015
※Cohen's d : R1-R3 -0.055 ; R3-R6 0.287

平均 CEFR	A2	A2	A2
平均 CEFR-J	A2.2	A2.2	A2.2

※標準偏差 : R1は41.6、R3は34.7、R6は45.9。

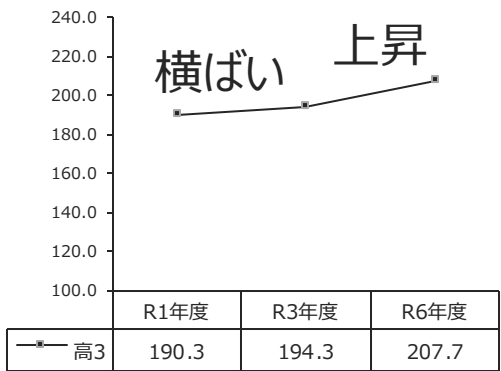
Listeningスコア160～219 : CEFR A2、スコア190～219 : CEFR-J A2.2
Readingスコア150～219 : CEFR A2、スコア180～219 : CEFR-J A2.2
Speakingスコア180～259 : CEFR A2、スコア230～259 : CEFR-J A2.2
Writingスコア190～229 : CEFR A2、スコア210～229 : CEFR-J A2.2

※「4 技能」の表記について、本調査は旧CS 下の生徒も対象としているため、「4 技能・5 領域」と表記していません。
※集団属性情報【高校】：学校実施の受検データであり学年全体のデータが基本／公立高校が約6割、私立高校が約4割を占める／4 年制大学に進学する生徒が約9 割以上の学校の生徒が約8 割を占める／首都圏・近畿の受検者が約5割を占める。

高3 経年比較 4 技能別の傾向

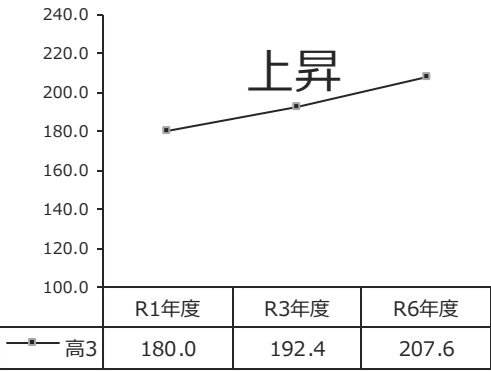
各技能 全国平均スコア

聞くこと Listening



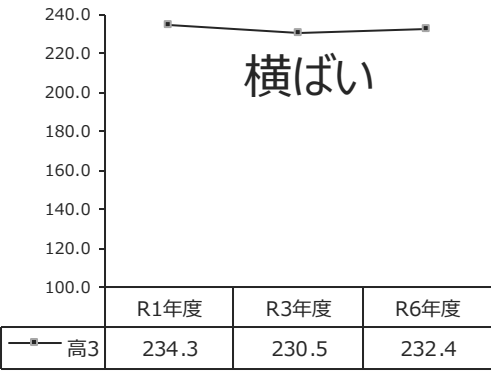
※ η^2 : 0.026
※Cohen's d: R1-R3 -0.092; R3-R6 -0.280

読むこと Reading



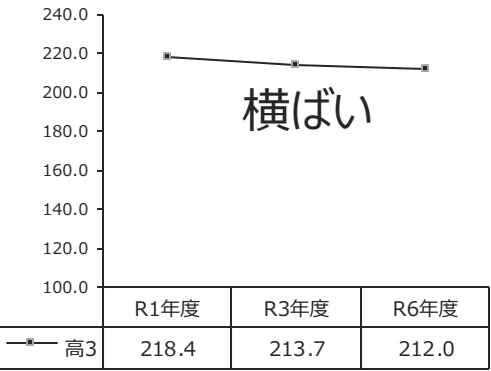
※ η^2 : 0.081
※Cohen's d: R1-R3 -0.357; R3-R6 -0.376

話すこと Speaking



※ η^2 : 0.001

書くこと Writing



※ η^2 : 0.004

平均 CEFR	A2	A2	A2
平均 CEFR-J	A2.2	A2.2	A2.2

※標準偏差: R1は42.2、R3は45.6、R6は49.8。

平均 CEFR	A2	A2	A2
平均 CEFR-J	A2.2	A2.2	A2.2

※標準偏差: R1は31.9、R3は36.7、R6は43.7。

平均 CEFR	A2	A2	A2
平均 CEFR-J	A2.2	A2.2	A2.2

※標準偏差: R1は42.3、R3は40.6、R6は37.4。

平均 CEFR	A2	A2	A2
平均 CEFR-J	A2.2	A2.2	A2.2

※標準偏差: R1は44.1、R3は37.6、R6は43.4。

Listeningスコア160～219: CEFR A2、スコア190～219: CEFR-J A2.2

Readingスコア150～219: CEFR A2、スコア180～219: CEFR-J A2.2

Speakingスコア180～259: CEFR A2、スコア230～259: CEFR-J A2.2

Writingスコア190～229: CEFR A2、スコア210～229: CEFR-J A2.2

※「4 技能」の表記について、本調査は旧CS 下の生徒も対象としているため、「4 技能・5 領域」と表記していません。
※集団属性情報【高校】: 学校実施の受検データであり学年全体のデータが基本／公立高校が約6割、私立高校が約4割を占める／4 年制大学に進学する生徒が約9 割以上の学校の生徒が約8 割を占める／首都圏・近畿の受検者が約5割を占める。

問題概要

会話文の中で空欄に当てはまるべき**内容を考え、与えられた動詞を活用して適切な文法事項を用いて表現する**問題

通過率

該当する3問のうち、
最も高い問題でも約3割程度

問題概要

日常的な話題について、目的や場面、状況に応じて、**自分の意見とその理由に具体例や説明を含めて書く**問題

通過率

問題a9 **20.1%**

問題概要

オンライン・ディスカッションにおいて、**複数の参加者の投稿を読んで、与えられた立場に立って、適切な理由を書いて伝える**問題

通過率

問題a10 **47.8%**

問題b10 **48.9%**

※ a・b共通問題。aとbは調査を受けた生徒が異なる。



これまで**学習した文法事項のレパートリー**から、伝えたい内容に最適なものを用いて英文を正確に書くことに課題



日常的な話題について、**基本的な語句や文を用いて、自身の考えを読み手の状況に合わせて書く**ことに課題
(理由が場面や状況に即して論理的に適切な内容となっていない)



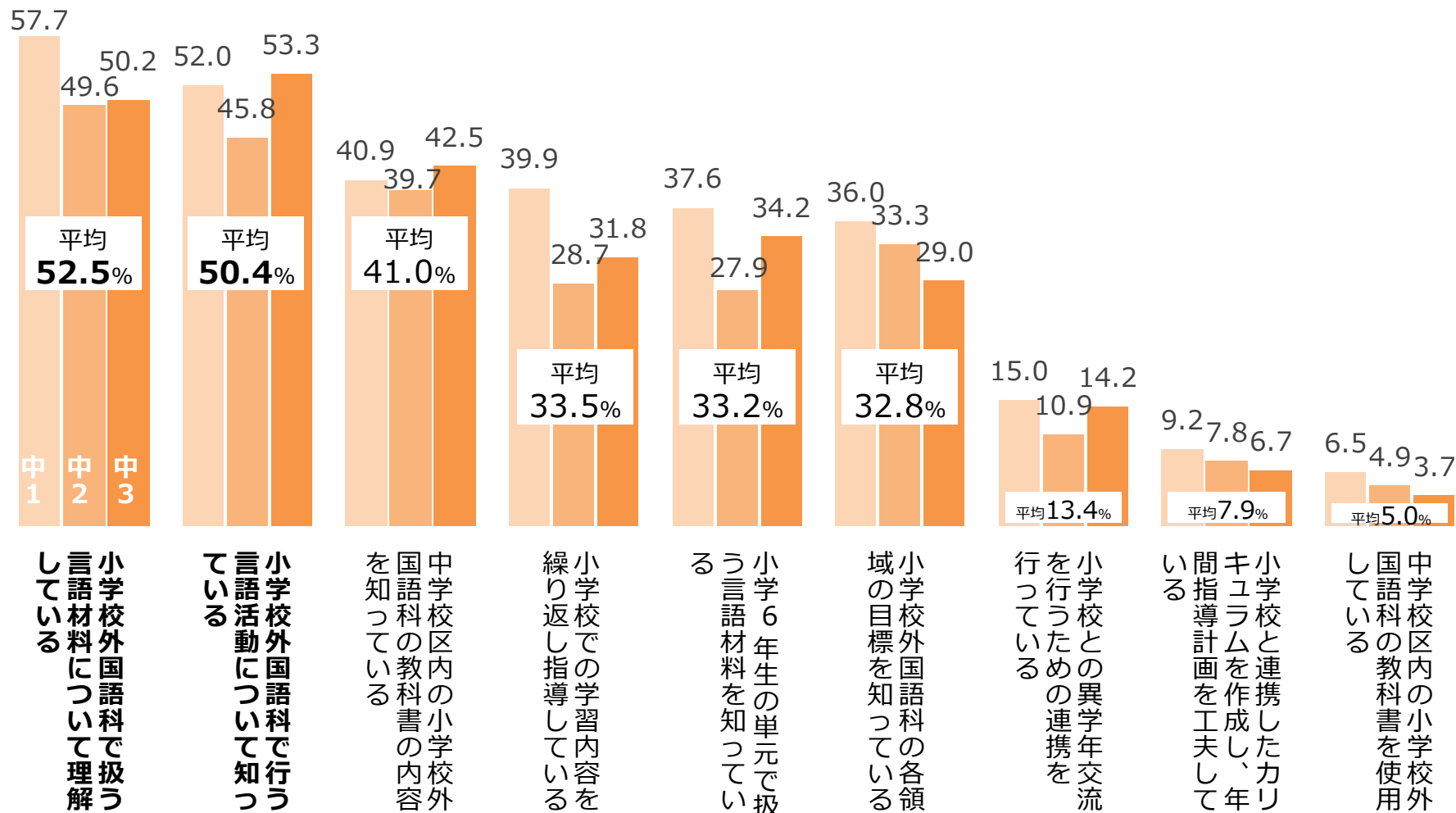
社会的な話題について**読んだことをもとに、自分の意見を具体例等とともに書く**ことに課題

5. 小中高に共通する課題

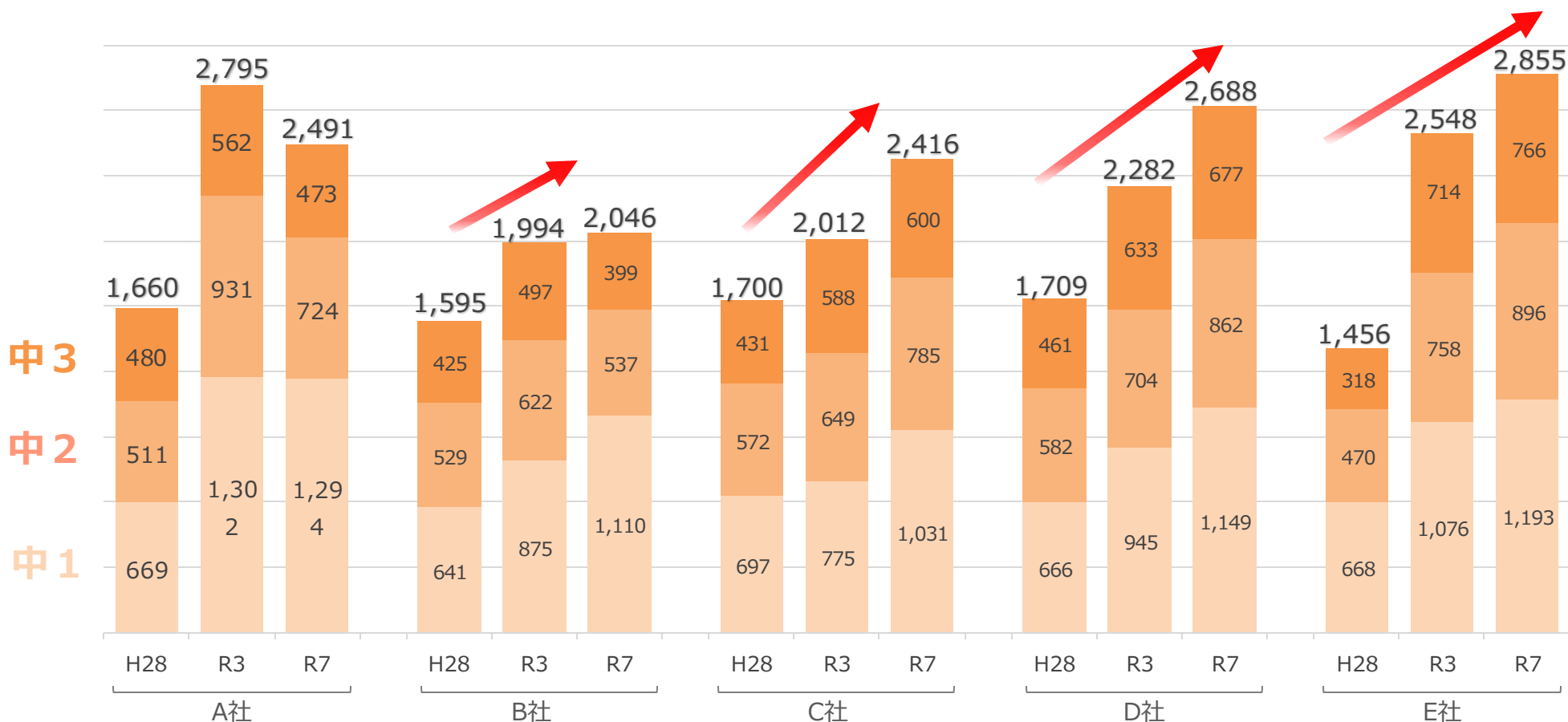
(1) 校種間の接続・連携に関する課題

教師質問調査では、**小学校外国語科で扱う言語材料や言語活動について理解している**と回答した割合の平均は**約50%に留まる**

- 英語の授業では、小学校における外国語活動や外国語科を踏まえ、円滑な接続を図れるように指導を工夫している。（複数選択）



(2) 語彙に関する課題



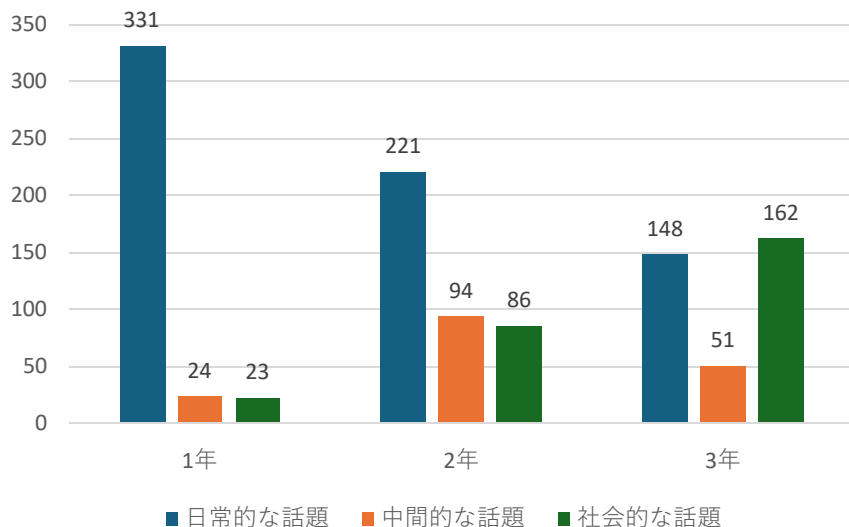
※ 語数は、調査者が、各教科書の巻末にある語彙リストの見出し語のうちから、短縮形を除いて数えたもの。（教科書によっては、語彙リストから固有名詞を省いているものもあるが、その場合も本文や別表等から補って加えていない。）

したがって、この数は、各教科書が固有名詞などを新出語扱いしないで設定している語数とは一致しない。

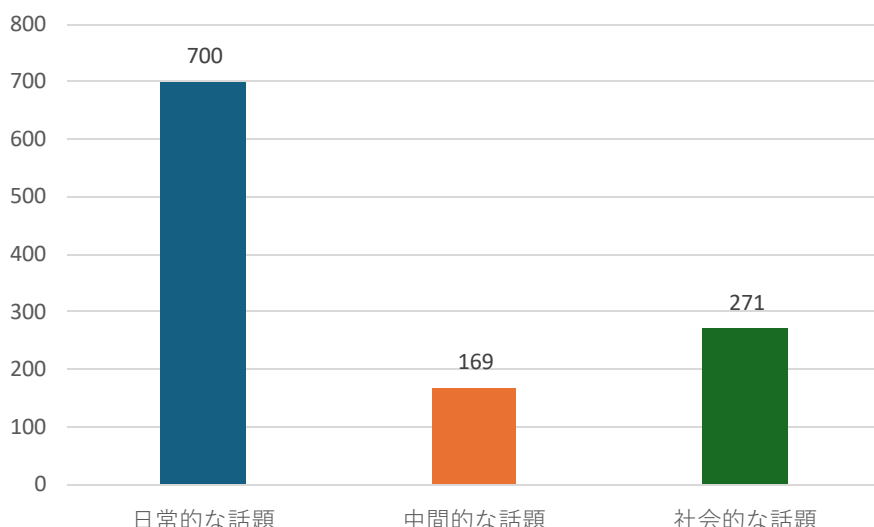
※ また、学習指導要領でいう「小学校で学習した語に1,600語～1,800語程度の新語を加えた語」という規定に即したものではない。

中学校の教科書においては、学校生活、家庭生活等の**日常的な話題**と、環境問題、国際情勢、人権問題等の**社会的な話題が多く、両者をつなぐ中間的な話題が少ない**（学習指導要領や解説の記載に起因）

6 社合計



3 学年合計（6 社合計）



【学習指導要領解説における記載・例示】

日常的な話題：生徒の日々の生活に関わる話題のうち身近な学校生活、家庭生活などにおけるもの

学校の行事や生活、生徒自身のこと（好きなこと、住んでいる場所、行きたい場所）、家族のこと、天気予報、交通情報、製品の取り扱い方 等

社会的な話題：社会で起こっている出来事や問題に関わる話題

自然環境問題、エネルギー問題、国際協力、平和問題、人権問題、世界情勢、科学技術 等

※中間的な話題として整理したもの：食文化、スポーツの歴史、日本の文化、アート、住んでいる町や地域の魅力 等

※中学校の検定教科書6社の合計。

※対象としたのは、教科書内全体で、話題が取り扱われている部分（話題が取り扱われていない文法の説明や歌などは除いている）。

※ユニット内のパート毎に、取り扱われている話題を、日常的な話題、社会的な話題、中間的な話題のいずれかに分類し、各話題の数をカウント。

※日常的な話題、社会的な話題、中間的な話題の分類の方法は、学習指導要領解説で日常的な話題、社会的な話題として例示されている事項を元に分類し、どちらにも当てはまらないものは中間的な話題として分類した。

※例えば、パート内の本文と活動の両方が日常的な話題を取扱っていた場合、日常的な話題 1としてカウント（本文で学校生活、活動で家庭生活など、異なる日常的な話題を取扱っている場合も1としてカウント）。一方、パート内の本文で社会的な話題、活動で日常的な話題を取扱っていた場合、社会的な話題 1， 日常的な話題 1としてカウント。

※リーディングやプロジェクトなど、複数のパートに分かれておらず、話題が同一であるものは、全体で1としてカウント。

※日常的な話題、社会的な話題、中間的な話題のいずれに分類するかは、各出版社が公開している「年間指導計画作成資料」「指導・学習内容一覧」等の資料に「話題」として掲載されている事項を元に判断した。当該資料に「話題」の記載がない場合は、「ねらい」「おもな活動」等の記載を元に判断した。当該資料から判断できない場合は、教科書に記載されている文言又は教科書の該当箇所の英文を見て分類した。

(3) 生徒の英語力の把握・評価に関する課題

パフォーマンステスト「話すこと」「書くこと」の両方を実施している割合は、 いずれの科目においても55%に満たない

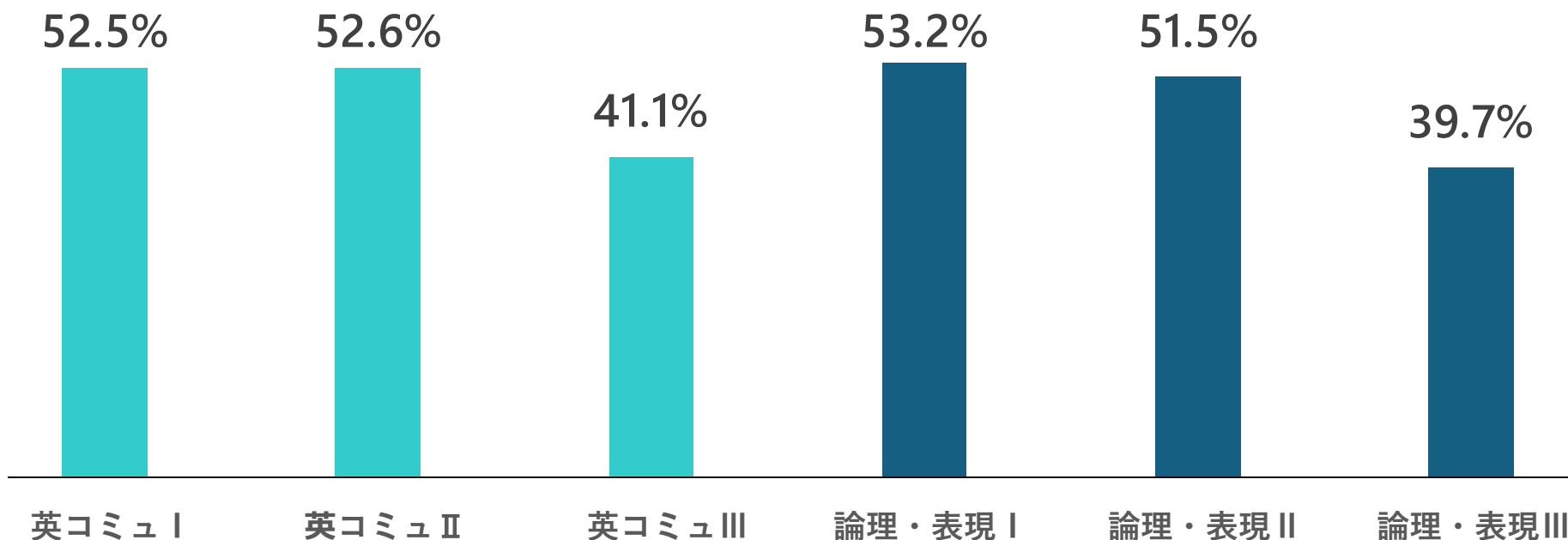
【普通科＋その他の専門学科及び総合学科】

英語コミュニケーション

5領域を総合的に扱う科目群

論理・表現

ディベートやディスカッション等を通して
発信力を高める科目群



※調査対象は公立高等学校及び中等教育学校の後期課程（特別支援学校、定時制及び通信制の課程は対象外。）

※調査基準日は令和6年12月1日現在

※学科単位で回答。「普通科」「その他の専門学科及び総合学科」について、それぞれ複数の学科が設置されている場合は、その学校に設置されている「普通科」「その他の専門学科及び総合学科」ごとに1つずつ回答として集計している。

※「英コミュⅠ」は「英語コミュニケーションⅠ」、「英コミュⅡ」は「英語コミュニケーションⅡ」、「英コミュⅢ」は「英語コミュニケーションⅢ」を示している。

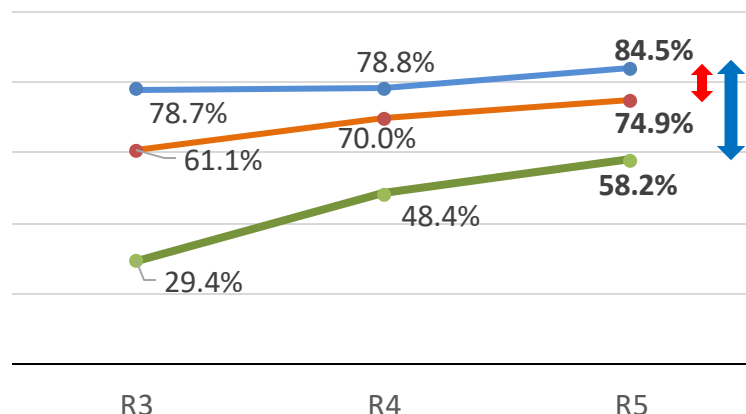
（出典）令和6年度英語教育実施状況調査より作成。

「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標

- 「英語を使って何ができるようになるか」という観点による「CAN-DOリスト」形式の学習到達目標については、設定・達成状況の把握・公表のいずれの割合も増加して改善している。
- 一方で、学習到達目標を設定しているものの、達成状況を把握していない学校や公表していない学校が一定数ある。

【小学校】

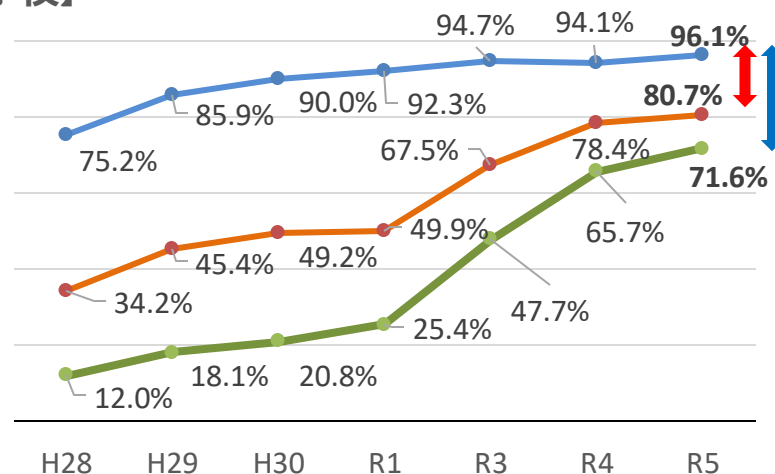
↕ 設定しているが達成状況を把握していない ↕ 設定しているが公表していない



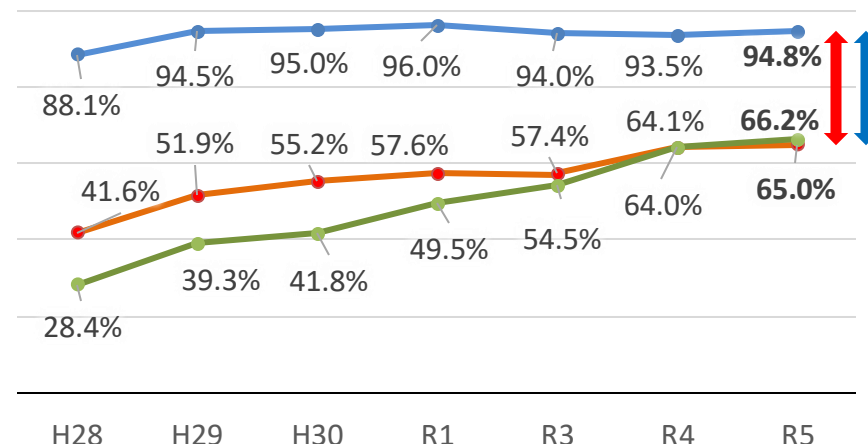
(参考)
学習指導要領では、外国語科の目標を各領域（聞くこと・読むこと・話すこと[やり取り]・話すこと[発表]・書くこと）ごとに「何ができるようになるか」という観点で設定していることを踏まえ、「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の設定と学習評価への活用等を普及する必要がある。

● 「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標を設定している学校の割合
● 「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の達成状況を把握している学校の割合
● 「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標を公表している学校の割合

【中学校】



【高等学校】 ※高等学校においては学科数を分母に割合を計算

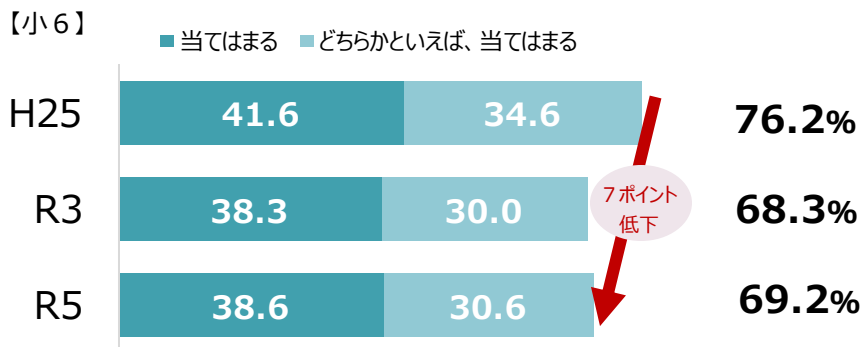


(4) 社会や社会変化に関わる課題

小学校

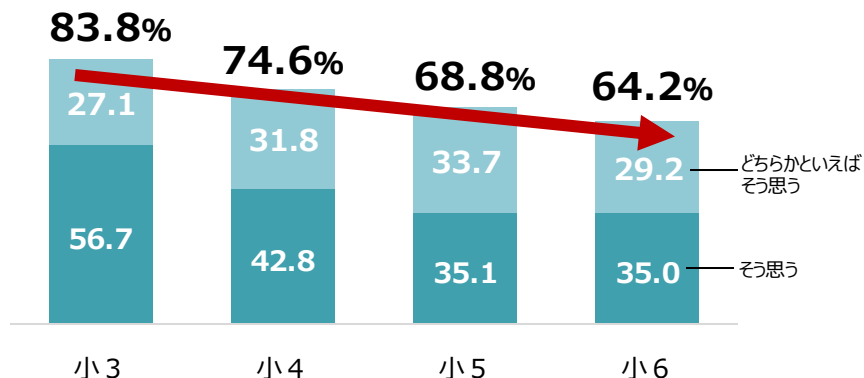
- 英語の学習が「好き」に肯定的な回答の割合は高いが、H25→R5で7ポイント低下。
また、学年が上がるほど低い傾向
- 一方、英語を学ぶことへの意欲は小5にかけて低下するが小6で上昇。全学年で8割以上と高い
- 授業の理解度への肯定的な回答は全学年で6割を超え、小6がもっとも高い

英語の学習（勉強）は好きですか（経年）



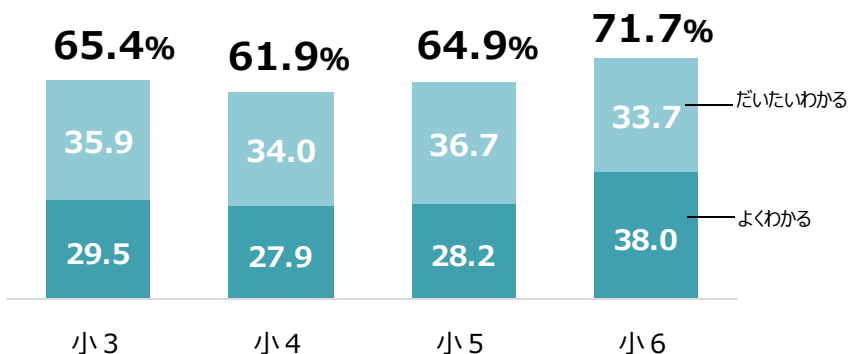
※H25は「英語の学習は好きですか」、R3、R5は「英語の勉強は好きですか」とたずねている。
（出典）全国学力・学習状況調査 悉皆調査

英語の学習が好きだ（学年別）



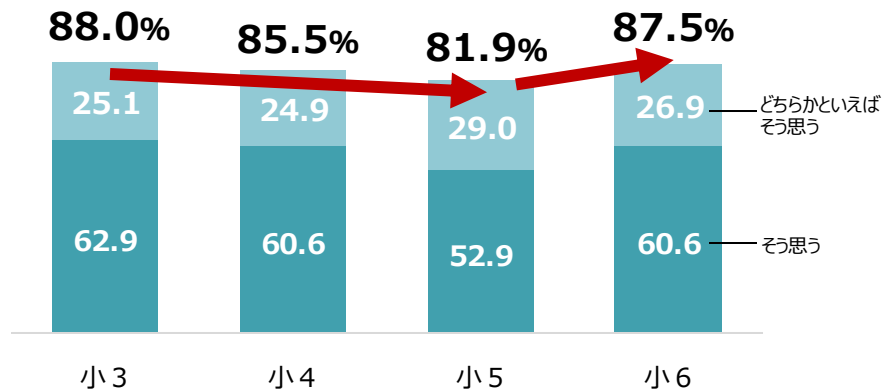
※小3～小5は、「そう思う」「どちらかといえば、そう思う」「どちらかといえば、そう思わない」「そう思わない」の4件法、小6は、「そう思う」「どちらかといえば、そう思う」「どちらかといえば、そう思わない」「そう思わない」「わからない」の5件法でたずねている。
（出典）令和4年度小学校学習指導要領実施状況調査 児童質問紙調査

英語の授業がどの程度わかりますか



（出典）令和4年度小学校学習指導要領実施状況調査 児童質問紙調査

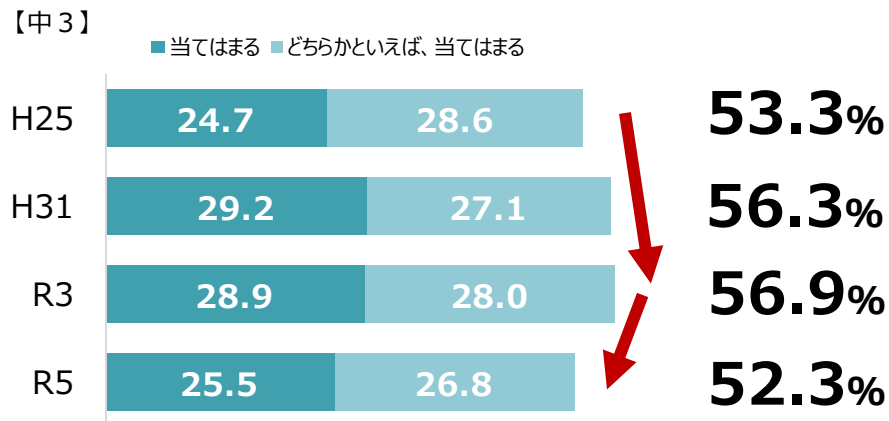
今後もっと、英語を聞いて相手の言いたいことがわかったり、
英語で自分の考えや気持ちなどを伝え合ったり、発表できるようになりたい



（出典）令和4年度小学校学習指導要領実施状況調査 児童質問紙調査

- 英語の学習が「好き」に肯定的な回答の割合は、H25と比較すると横ばいだが、H25→R3で若干上昇、R3→R5で若干低下。学年別で大きな変化は見られないが中2が最も低い
- 授業の理解度はH31→R5で大きな変化はない。学年別で大きな変化は見られないが中2が最も低い

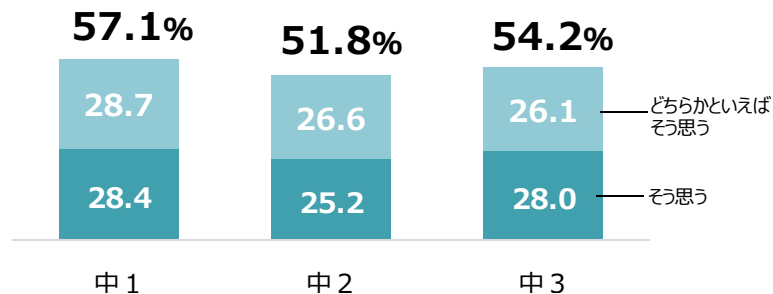
英語の学習（勉強）は好きですか。（経年）



※H25は「英語の学習は好きですか」、H31以降は「英語の勉強は好きですか」とたずねている。
（出典）全国学力・学習状況調査 悉皆調査

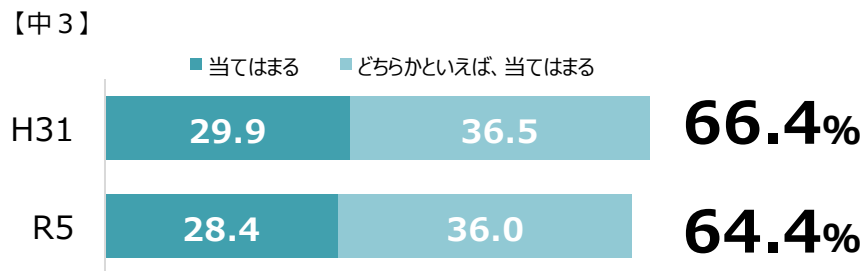
英語の学習が好きだ（学年別）

速報値



※各回答の数値は、小数第1位までの概数で表示。
肯定的な回答を求める際は、小数第2位以下も含めて計算をするため、それぞれの数値は一致しない場合がある。
（出典）令和5年度中学校学習指導要領実施状況調査 生徒質問調査

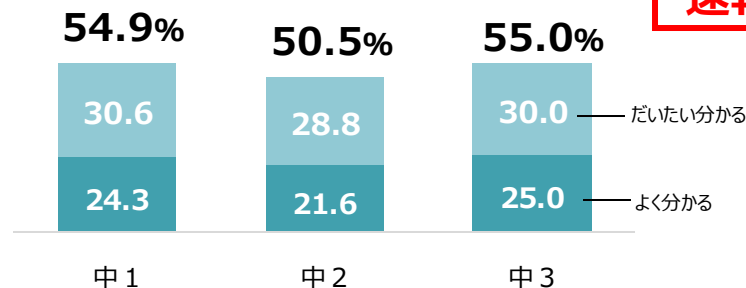
英語の授業の内容はよく分かりますか（経年）



（出典）全国学力・学習状況調査 悉皆調査

英語の授業がどの程度わかりますか（学年別）

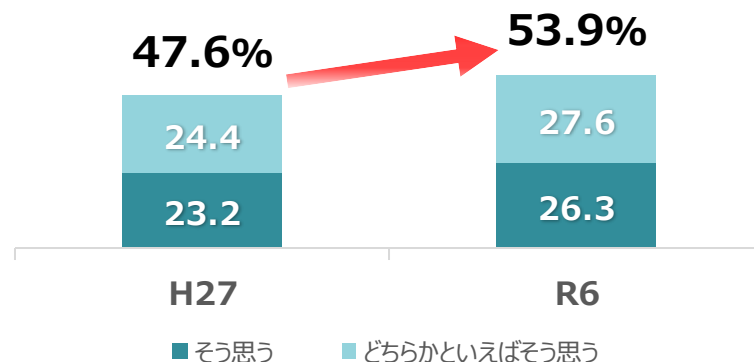
速報値



※各回答の数値は、小数第1位までの概数で表示。
肯定的な回答を求める際は、小数第2位以下も含めて計算をするため、それぞれの数値は一致しない場合がある。
（出典）令和5年度中学校学習指導要領実施状況調査 生徒質問調査

英語学習に対する意識

- 英語の学習が好きだ

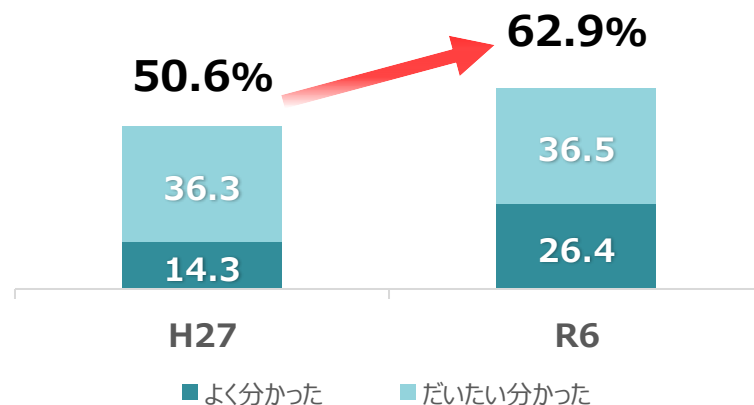


「英語の学習が好きだ」という質問に対して、
肯定的な回答をしている生徒の割合は、
前回調査から**6.3ポイント上昇**

授業の理解度

- 「英語コミュニケーションⅠ」の授業がどの程度分かりましたか

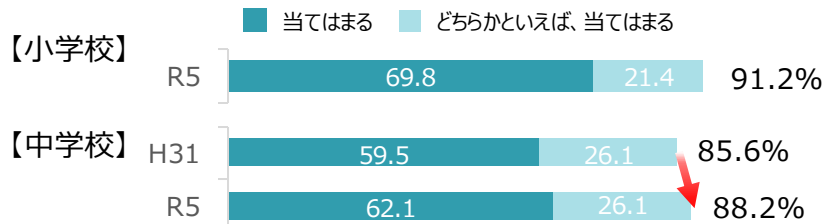
※H27は「コミュニケーション英語Ⅰ」



「『英語コミュニケーションⅠ』の授業がどの
程度分かりましたか」という質問に対して、
肯定的な回答をしている生徒の割合は、
前回調査から**12.3ポイント上昇**

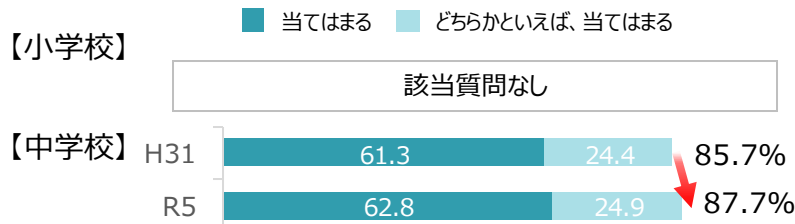
英語学習の重要度に関する意識を問う質問

- 英語の勉強は大切だと思いますか



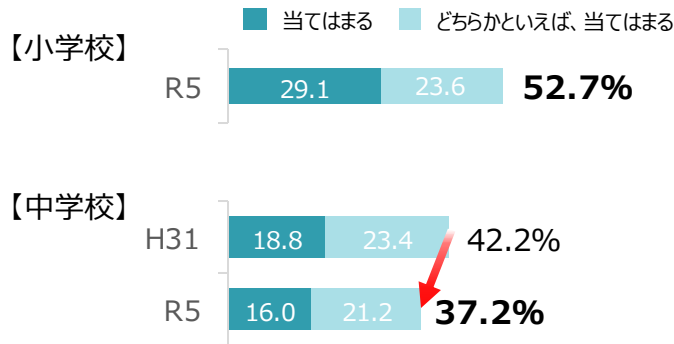
※小学校については、R5にて新出の質問のため、過去との比較はなし。

- 英語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか



将来的な英語活用に対する意識に関する質問

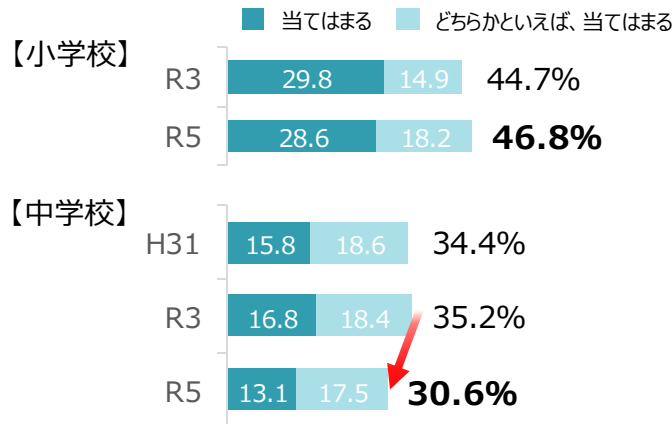
- 将来、積極的に英語を使うような生活をしたり職業に就いたりしたいと思いますか



※小学校については、R5にて新出の質問のため、過去との比較はなし。

日常生活での英語活用機会に関する質問

- これまで、学校の授業やそのための学習以外で、日常的に英語を使う機会が十分にありましたか（地域の人や外国にいる人と英語で話す、英語で手紙や電子メールを書く、英語のテレビやホームページを見る、オンラインで他者と英語で交流する、英会話教室に通うなど）

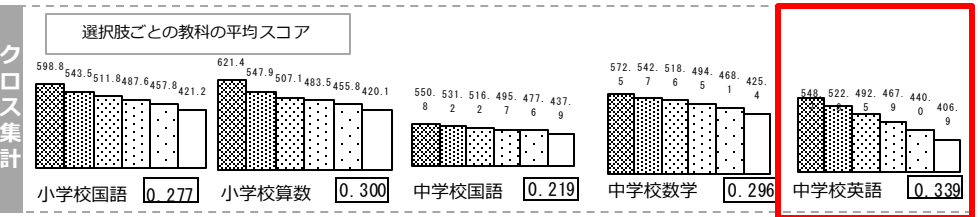
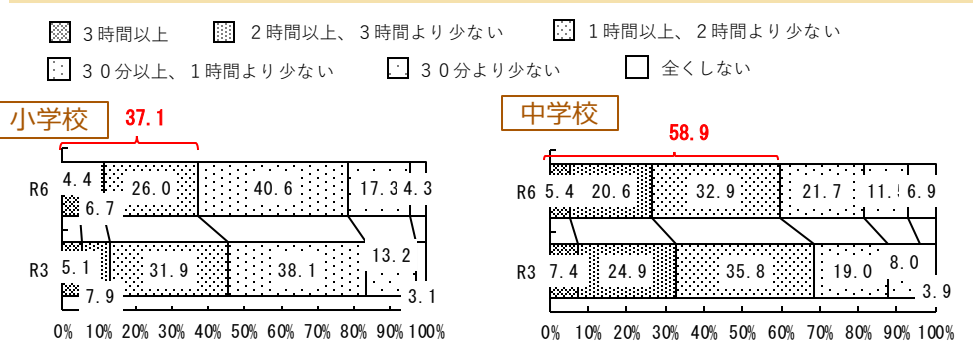


※小学校では、次の質問文となっている。「これまで、学校の授業以外で、英語を使う機会がありましたか（地域の人や外国にいる人と英語で話す、英語で手紙や電子メールを書く、英語のテレビやホームページを見る、PC・タブレットなどのICT機器を利用して他者と英語で交流する、英会話教室に通うなど）」

① 平日の勉強時間

保護者 2(1)

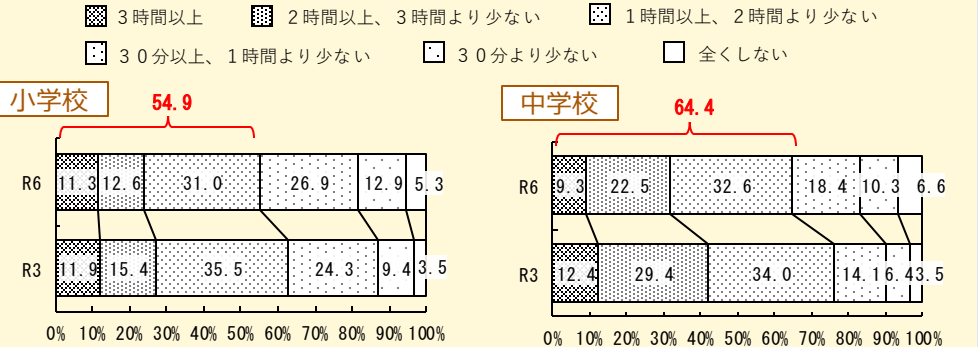
お子さんは、学校の授業時間以外に、普段（学校のある日）、1日当たりどのくらいの時間、勉強しますか（学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間、ICT機器を活用してインターネットのコンテンツから学ぶ時間も含む）。



<参考> 児童生徒への質問結果* *令和6年度本体調査の児童生徒質問調査結果より

児童〔21〕 生徒〔21〕

学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか（学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含む）。

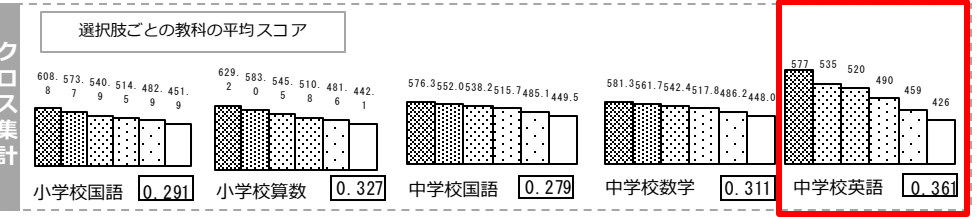
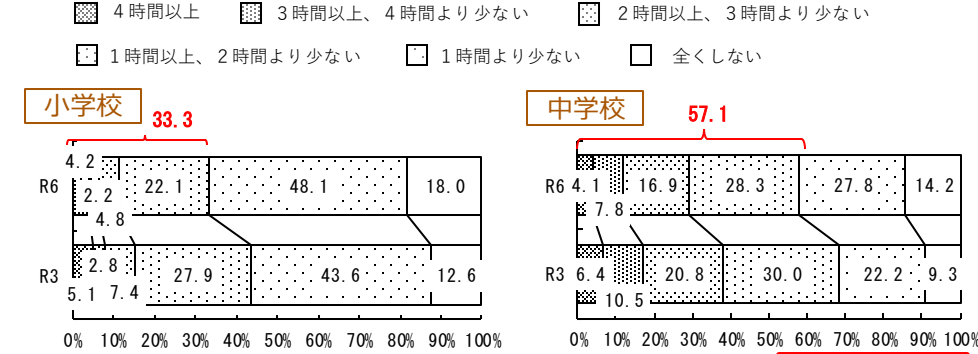


② 休日の勉強時間

保護者 2(2)

※ □ 内の数字は相関係数

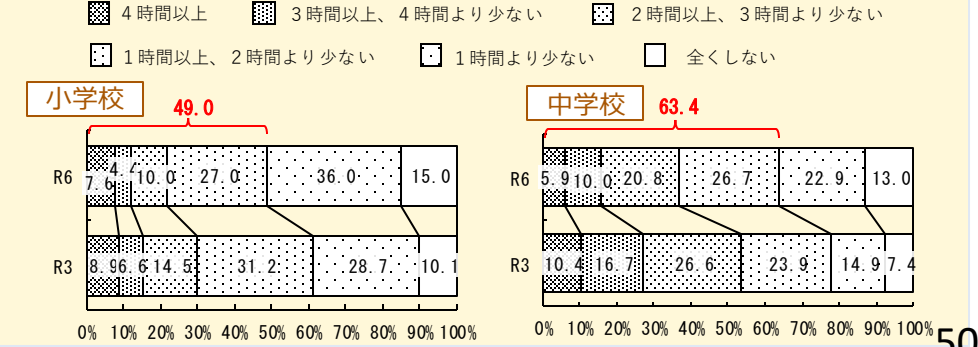
お子さんは、土曜日や日曜日など学校が休みの日に、1日当たりどのくらいの時間、勉強をしますか（学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間、ICT機器を活用してインターネットのコンテンツから学ぶ時間も含む）。



<参考> 児童生徒への質問結果* *令和6年度本体調査の児童生徒質問調査結果より

児童〔22〕 生徒〔22〕

土曜日や日曜日など学校が休みの日に、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか（学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含む）。



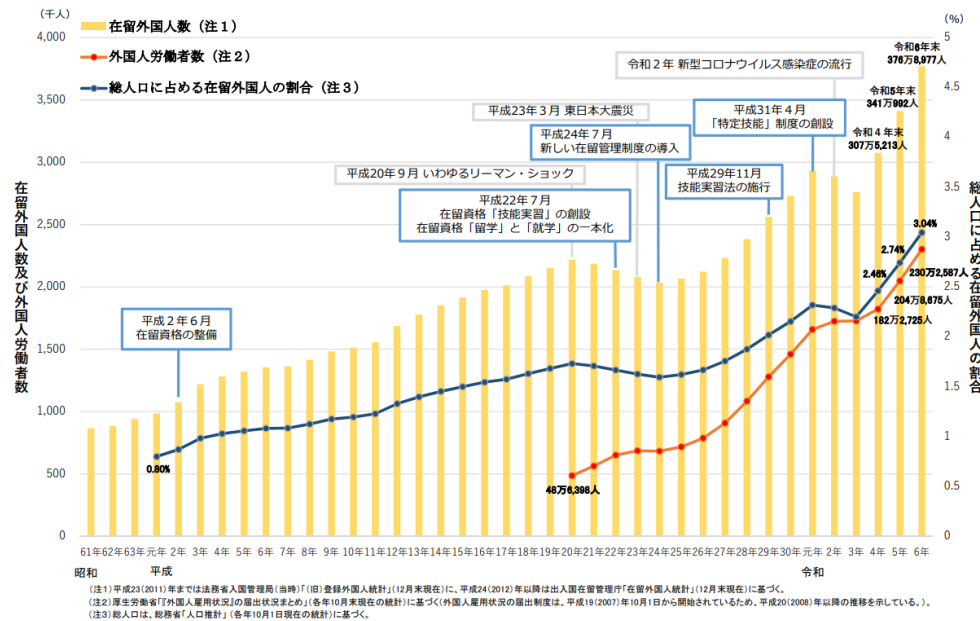
グローバル化・内なる国際化

在留外国人
24年末に約377万
(3年連続過去最高、国想定の2倍のペース)

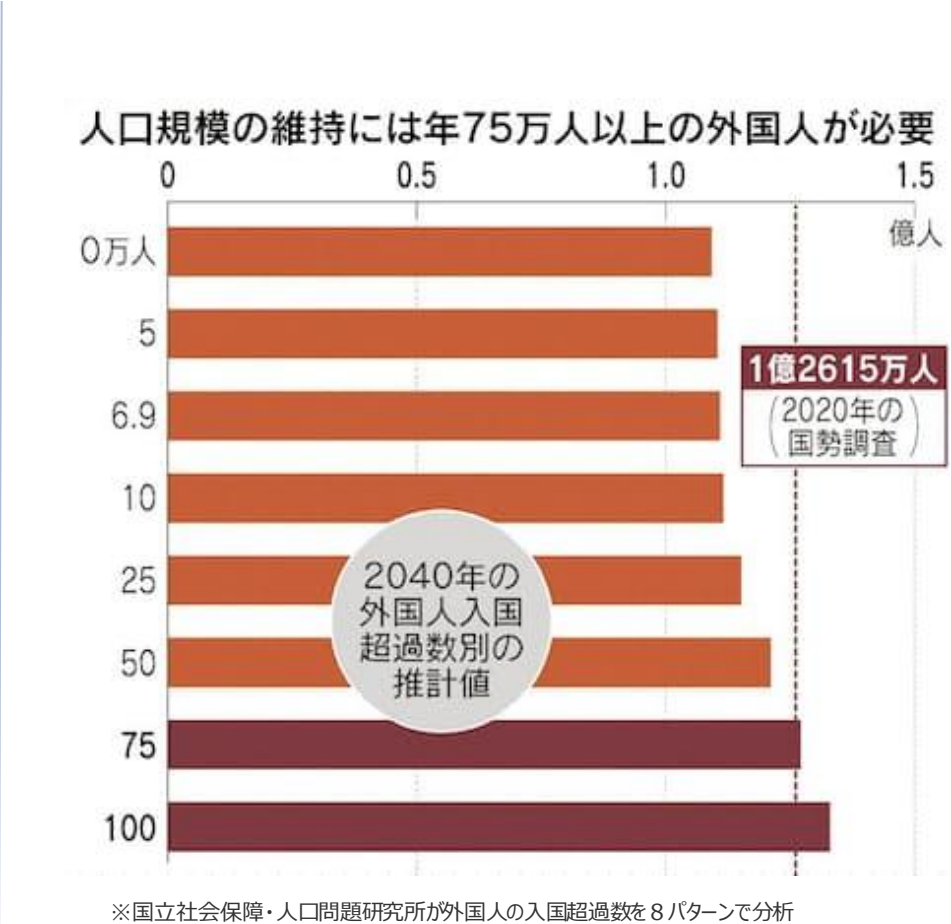
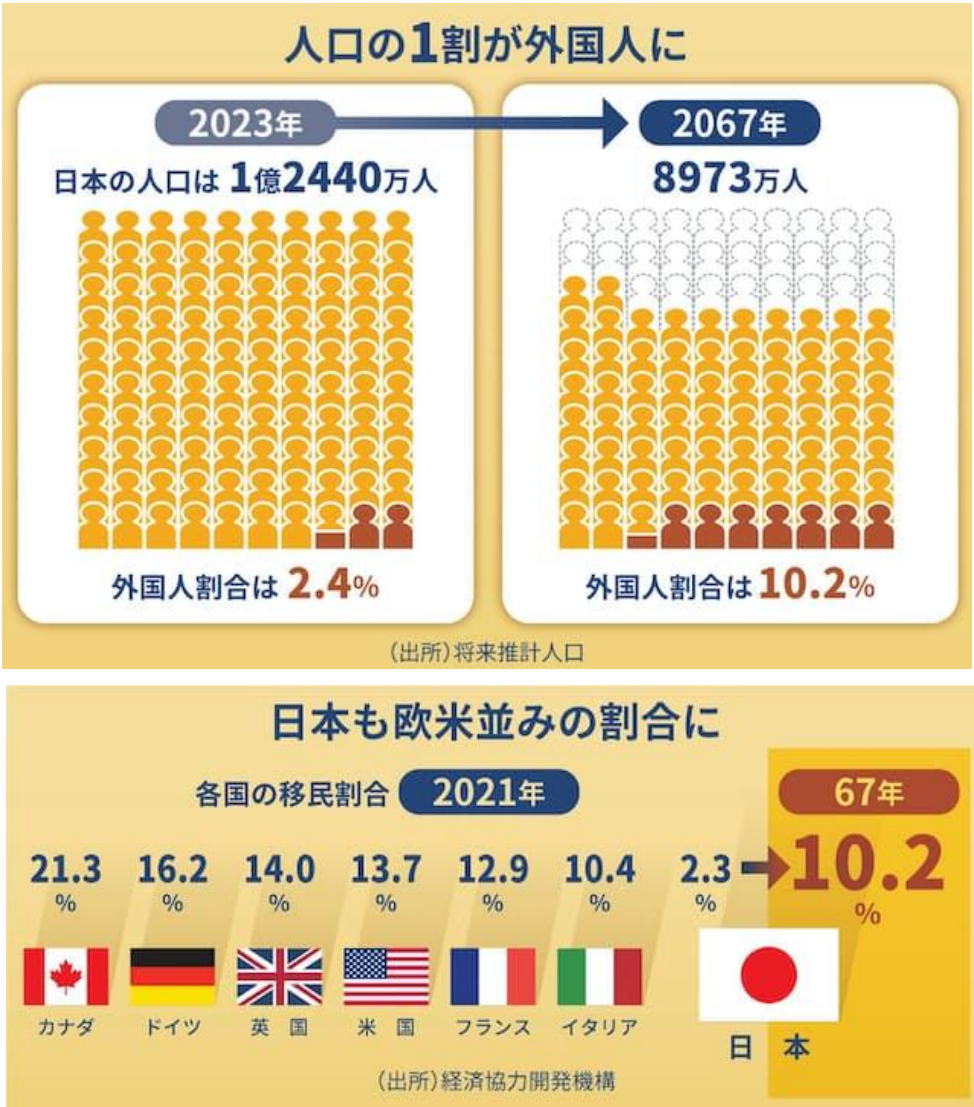
訪日外国人旅行者3,687万超
日本人出国者 1,301万超
(2024年段階、日本人出国者は回復途上)

在留外国人数及び外国人労働者数の推移

出入国在留管理庁
Immigration Services Agency



- 2067年に人口の1割が外国人 ⇒ 2040年頃に前倒し？
- 2040年に現在人口を維持するには、年75万人以上の外国人が必要との推計も



(出典) 【左】日本経済新聞「「公用語」は日本語だけ？ 外国人1割超の時代に 1億人の未来図」(2023年7月23日)
外国人人口、15年後に総人口の1割 鈴木法相の私的勉強会試算「国民の安全が絶対条件」 「移民」と日本人 (2025年8月6日産経ニュース)
【右】日本経済新聞「「少子化と向き合う」気になる数字 年75万人以上の入国超過必要」(2023年6月15日)

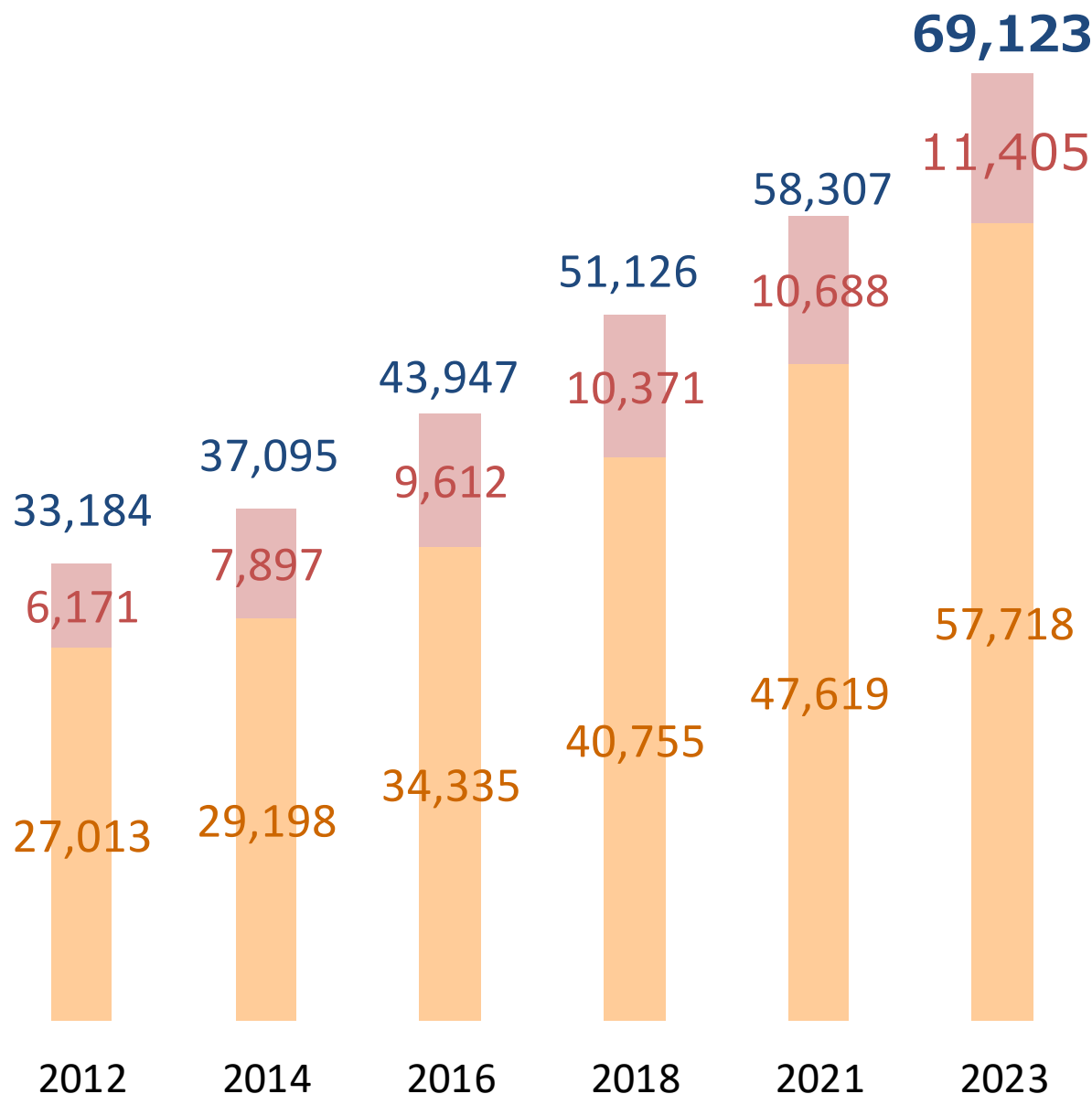
学校現場では外国につながる子供達が10年間で急増し、過去最大を更新

約10年間で

日本語指導が必要な児童生徒
は1.9倍増

日本国籍児童生徒は
1.4倍増

外国人児童生徒は
2.0倍増



2033年までの目標と高校生の留学（派遣・受け入れ）

中学・高校の国際交流

オンライン等での国際交流
→100%の中高で実施

対面での国際交流
→50%の高校で実施

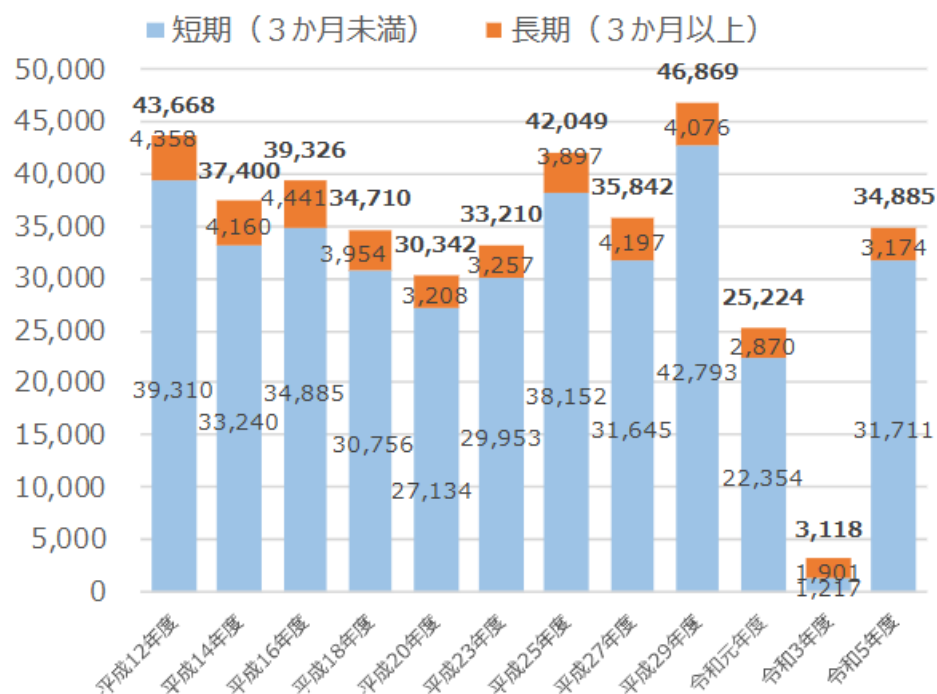
高校の留学

3カ月未満（研修旅行）
4.3万人→11万人
3カ月以上（留学）
0.4万人→1万人
外国人留学生の数
0.6万人→2万人

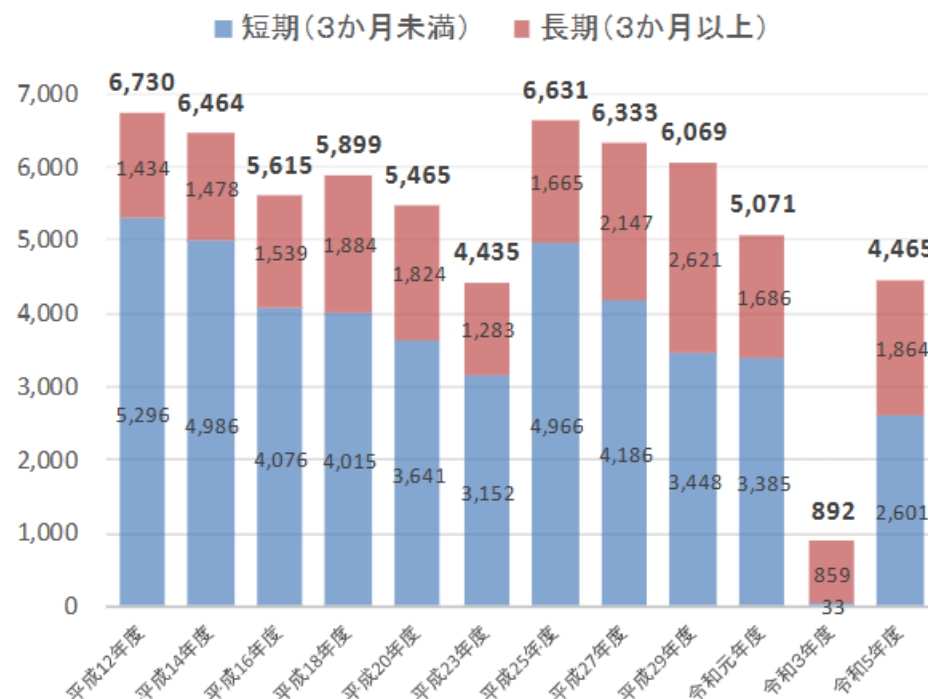
大学等の留学

学位取得のため長期
6.2万人→15万人
協定等に基づく中短期
11.3万人→23万人
外国人留学生の数
31.2万人→38万人

①高校生の海外への留学・研修旅行

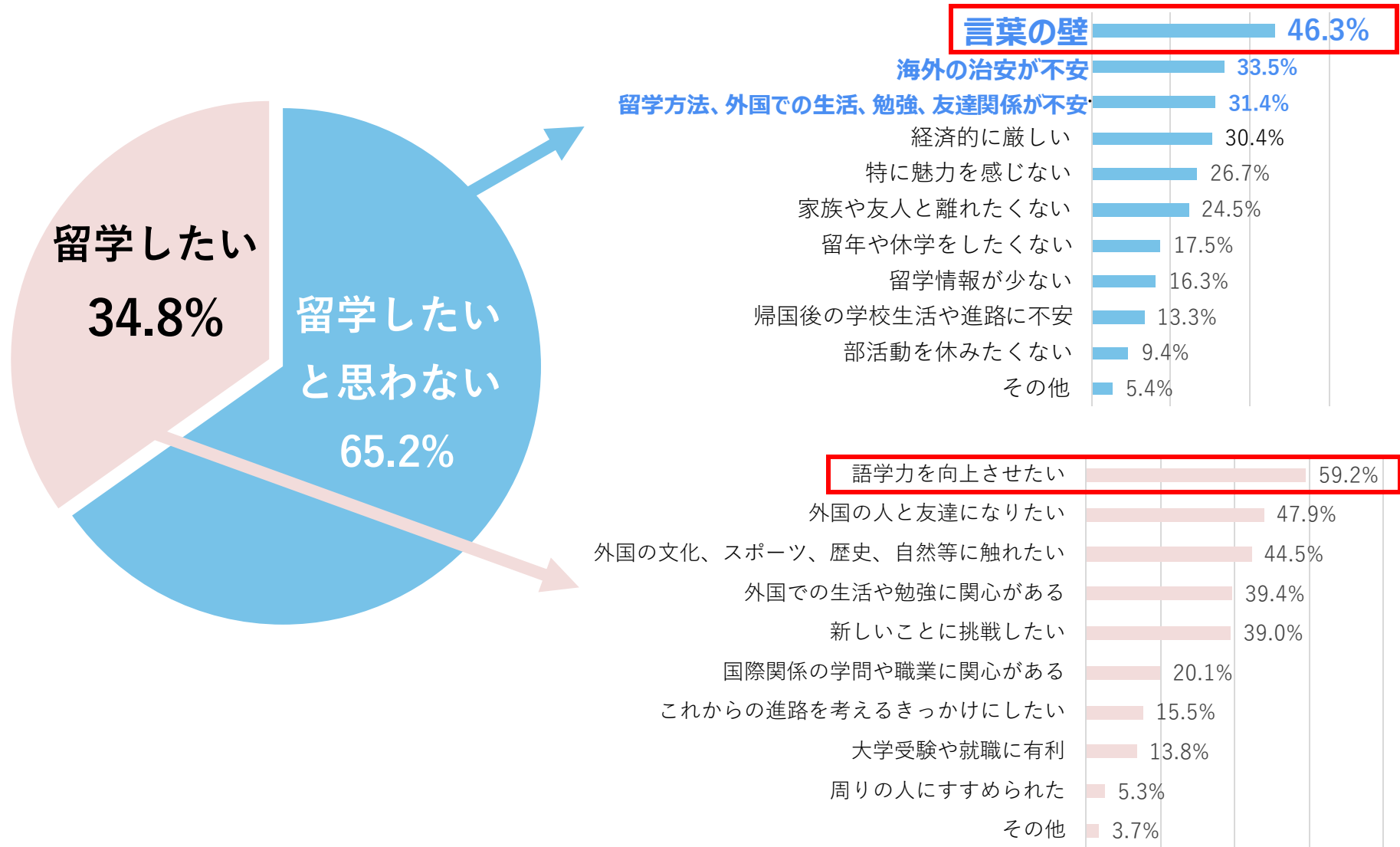


②外国からの留学・研修旅行の受け入れ



語学力は留学の「壁」であり、「動機」でもある

日本の高校生の海外留学への意向



探究的な学びは、生成AIが苦手な部分と親和性

令和7年5月22日
教育課程企画特別部会
資料1-1より

人間が得意なこと VS 生成AIが得意なこと

人間的

機械的

人間の能力

情熱・人としての意思

リーダーシップ

共感

五感を通じた経験・判断

課題定義

ルール定義

倫理判断

社会・文化適合性判断

ジェネレーティブAIの能力

高度な模倣能力

作画

作詞・作曲

小説の執筆

ビジネス文章作成

プログラミング

対人コミュニケーション

創造 ↔ 模倣

マシンの得意領域

スピード

安定したサービスレベル

機械との対話

知識量

大量データ解析

24時間365日労働

AI時代に外国語を学ぶ意義について

－AIによる代替・補完の視点から（イメージ）－

AIに代替・補完されうるもの

※写真はイメージです



即時に、高精度で、多言語に通訳・翻訳

例：外国語で書かれた対象にスマホをかざすだけで翻訳
内容のニュアンスに留意した会話の同時通訳
自分の声を保ったままプレゼン動画を多言語で発信



受信内容の要約、発信内容の作成

例：外国語の動画の要点を日本語で要約
外国語で目的に応じて文案を作成



人間に求められること



AIによる出力の正確性の判断



文化的背景やニュアンスの理解

例：直訳しにくい言葉、婉曲表現の「味」、
外国の文化を背景とするユーモア



自分の考え・意見の形成

例：自身の学び・経験を踏まえた独創性



創作や表現の多様性

例：自ら選んだ外国語の言葉を通じた発信
効果的に伝えるための「間」の取り方



コミュニケーション能力の向上

例：言語を自ら駆使することで得られるコミュニケーション
（共感・思いやり・相手への配慮）



人間関係・信頼関係の構築

例：相手の言葉で話すことによる心理的距離の短さ
（相手への深い理解）
自分の言葉で相手の心を動かすこと



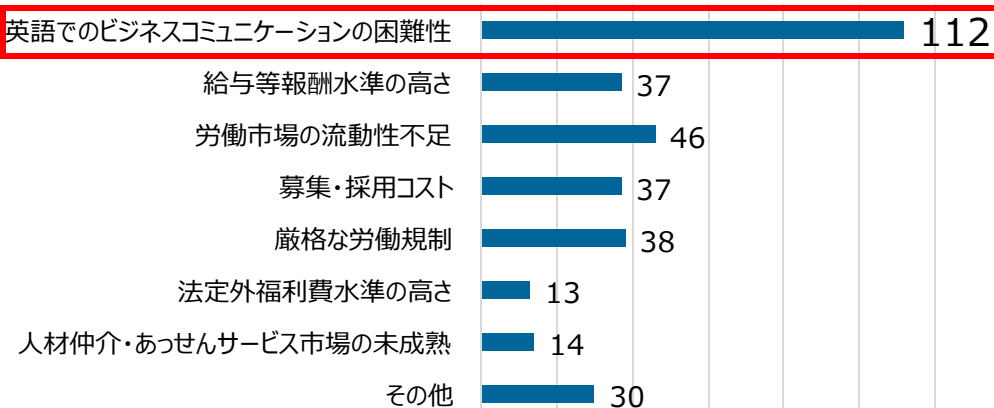
外国語の学びを通じた理解・思考の広がり・深まり

例：外国語・他国の文化のみならず日本語や
日本の文化等への理解・思考が広がる・深まる

企業がグローバル日本人人材を確保する上での阻害要因は英語が上位

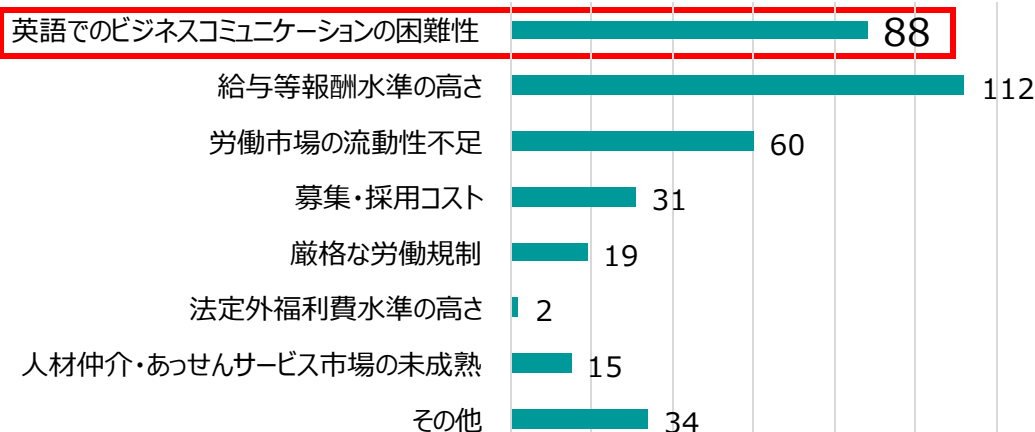
外国企業

回答企業数：141 社（1 つ以上回答した企業）



日本企業

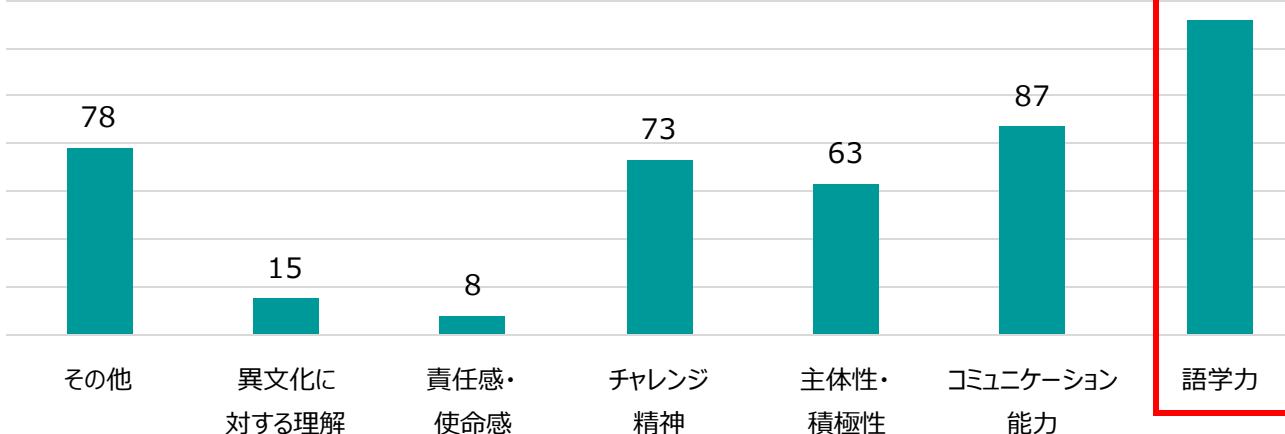
回答企業数：178 社（1 つ以上回答した企業）



日本人人材のグローバル化の課題

日本企業

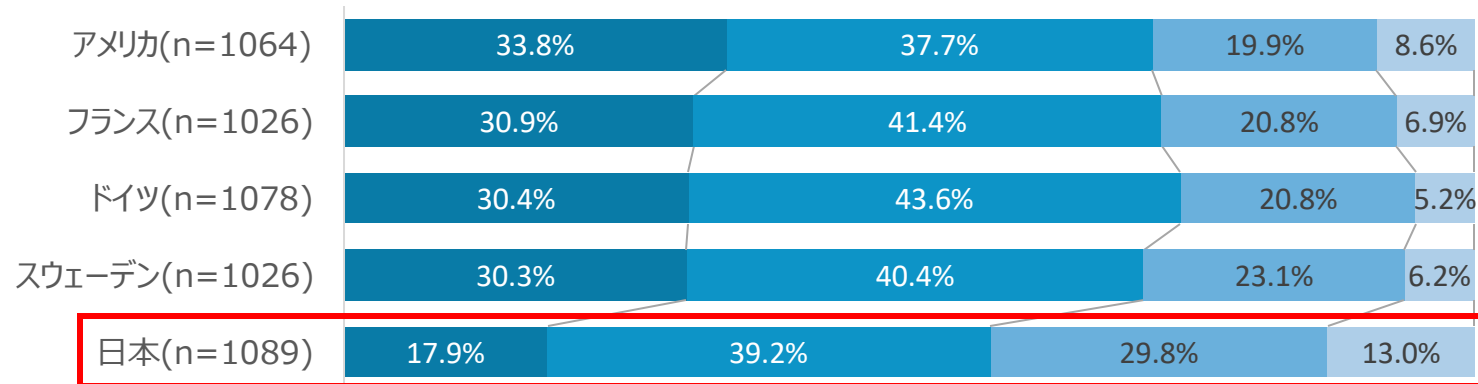
回答企業数：184 社（1 つ以上回答した企業）



日本の若者は諸外国に比べて発信力に課題

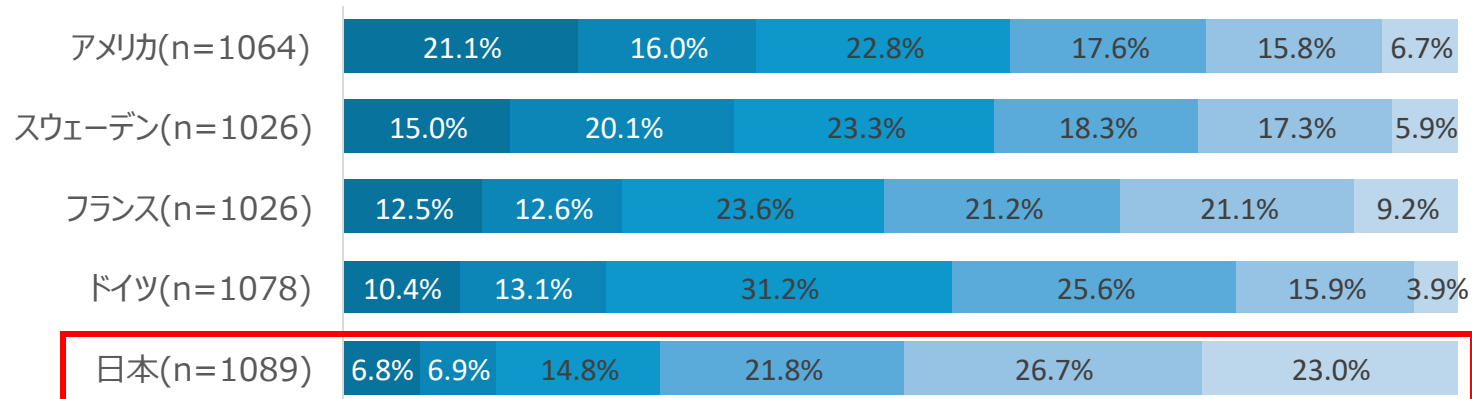
自分の考えをはっきり相手に伝えることができる

■ そう思う ■ どちらかといえばそう思う ■ どちらかといえばそう思わない ■ そう思わない



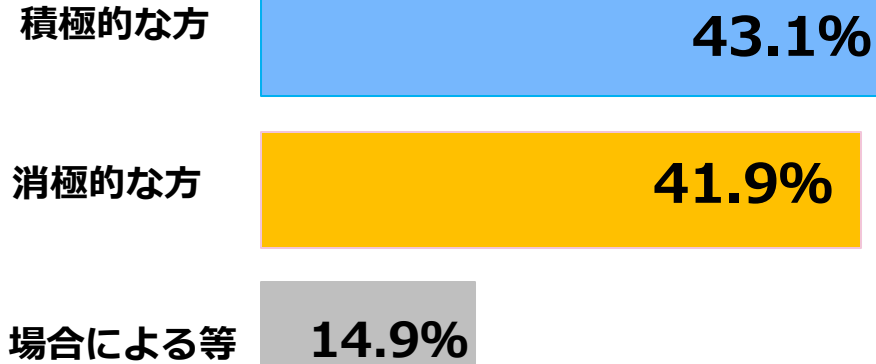
自信をもって自分のアイデアや意見を考えたり、話したりした

■ ほぼ毎日 ■ 週に4～5回 ■ 週に2～3回 ■ およそ週に1回 ■ 一度か二度 ■ 一度もない

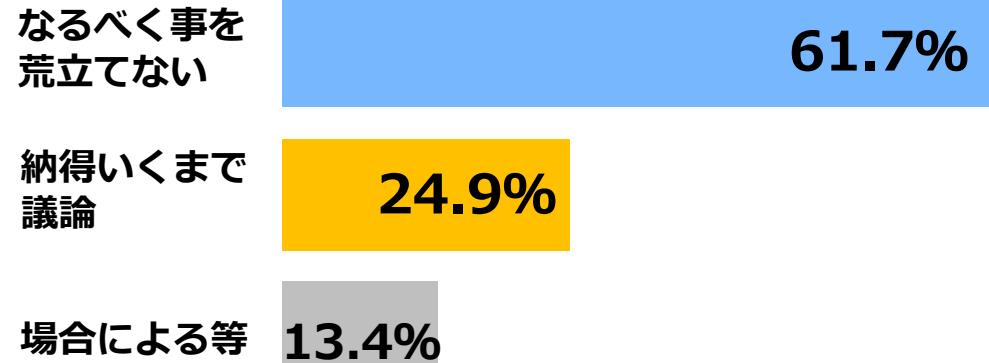


意見を主張することに消極的

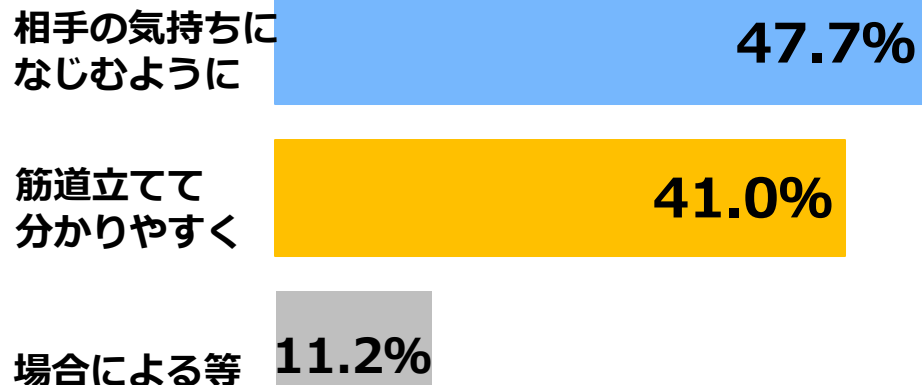
自分の考えや意見を表現すること



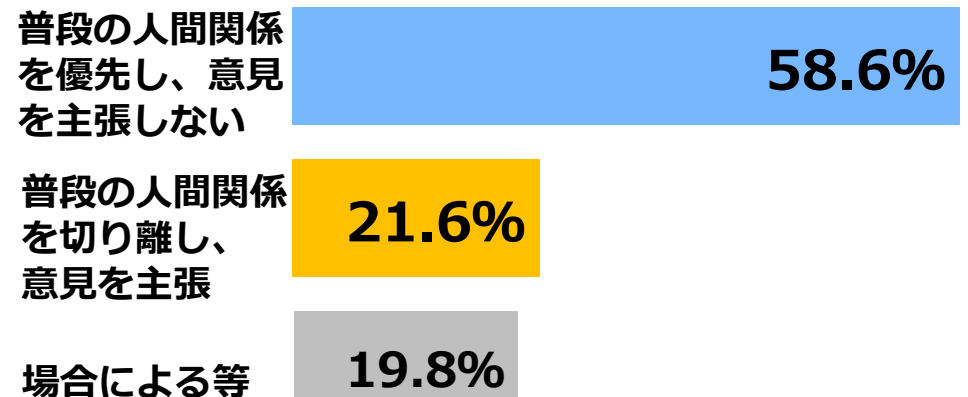
人と意見が食い違ったとき



人に話をするとき



友人や同僚などと意見交換するとき



「自分の考え」を書くことが苦手

全国学力・学習状況調査では、自分の考えをまとめたり書いたりする問題の正答率に課題が見られる

小6・国語

問題の概要	出題の趣旨	正答率	無解答率
「ごみ拾い」か「花植え」かのどちらかを選んで、 でどのように話すかを書く（R4）	互いの立場や意図を明確にしながら計画的に話し合い、 自分の考え をまとめる	47.8%	3.0%
【川村さんの文章】の空欄に学校の米作りの問題点と解決方法を書く（R5）	図表やグラフなどを用いて、 自分の考え が伝わるように書き表し方を工夫することができるかどうかをみる	26.8%	7.0%
資料を読み、運動と食事の両方について分かったことをもとに、自分ができそうなことをまとめて書く（R5）	文章を読んで理解したことに基づいて、 自分の考え をまとめることができるかどうかをみる	56.4%	8.4%

中3・国語

問題の概要	出題の趣旨	正答率	無解答率
参加者の誰がどのようなことについて発言するとよいかと、そのように 考えた理由 を書く（R3）	話合いの話題や方向を捉えて、 話す内容を考える	57.5%	3.3%
農林水産省のウェブページにある資料の一部から必要な情報を引用し、意見文の下書きにスマート農業の効果を書き加える（R4）	自分の考え が伝わる文章になるように、根拠を明確にして書く	46.5%	8.8%

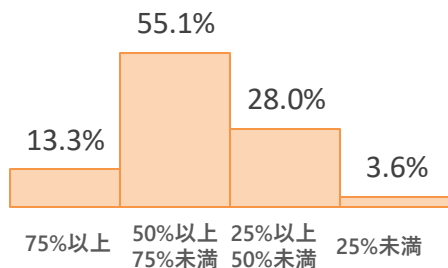
6. 指導体制・環境面に関する課題

(1) 5領域の活動を通じた指導に関する課題

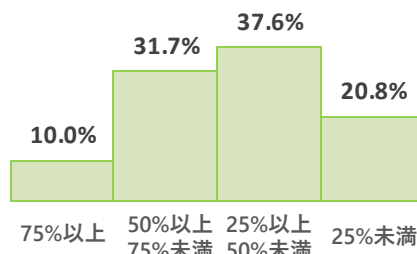
教師の英語使用状況

- 中学校では、約 7 割の学校で英語担当教師が発話の半分以上を英語で行っている
 - 高等学校では、約 4 割の学校で英語担当教師が発話の半分以上を英語で行っている
(ただし、英語教育を主とする学科及び国際関係に関する学科では約 8 割)
- 英語コミュニケーションと比べ、論理・表現では英語による発話の割合が少ない傾向

中学校（全体）※1

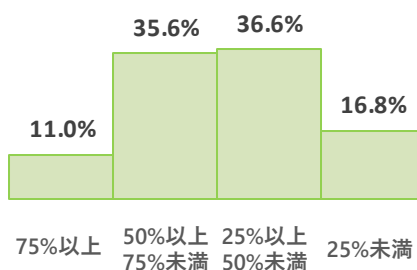


高校（全体）

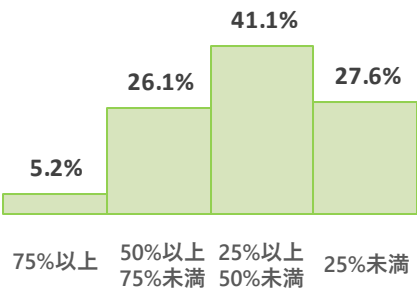


【科目別】※2

英語コミュニケーション

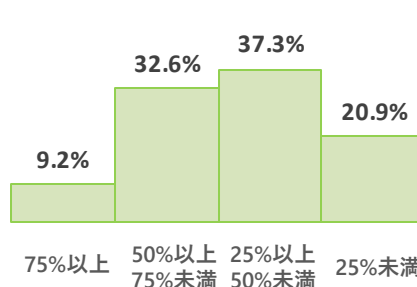


論理・表現

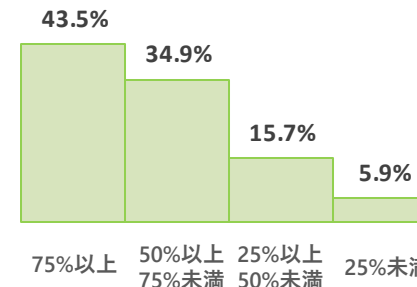


【学科別】

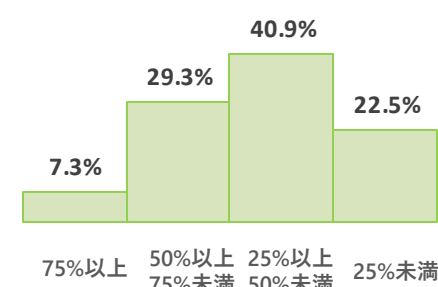
普通科



英語教育を主とする学科 及び国際関係に関する学科



その他の専門学科 及び総合学科



※1 中学校はR 5 調査、高校はR 6 調査。ここでの「教師」とは、調査基準日時点において英語の授業を担当している者（臨時的任用の者及び非常勤講師も含む。）

※2 【英語コミュニケーション】は英語コミュニケーションⅠ～Ⅲ、【論理・表現】は論理・表現Ⅰ～Ⅲの回答を合算して集計している。

なお、対象学科は「普通科」と「その他の専門学科及び総合学科」とし、「英語教育を主とする学科及び国際関係に関する学科」は含んでいない。

（出典）令和 5 年度及び令和 6 年度英語教育実施状況調査より作成。

授業は英語で行うことを基本としつつ、生徒の理解の程度に応じた、 教師による英語と補助的な日本語の使用が必要

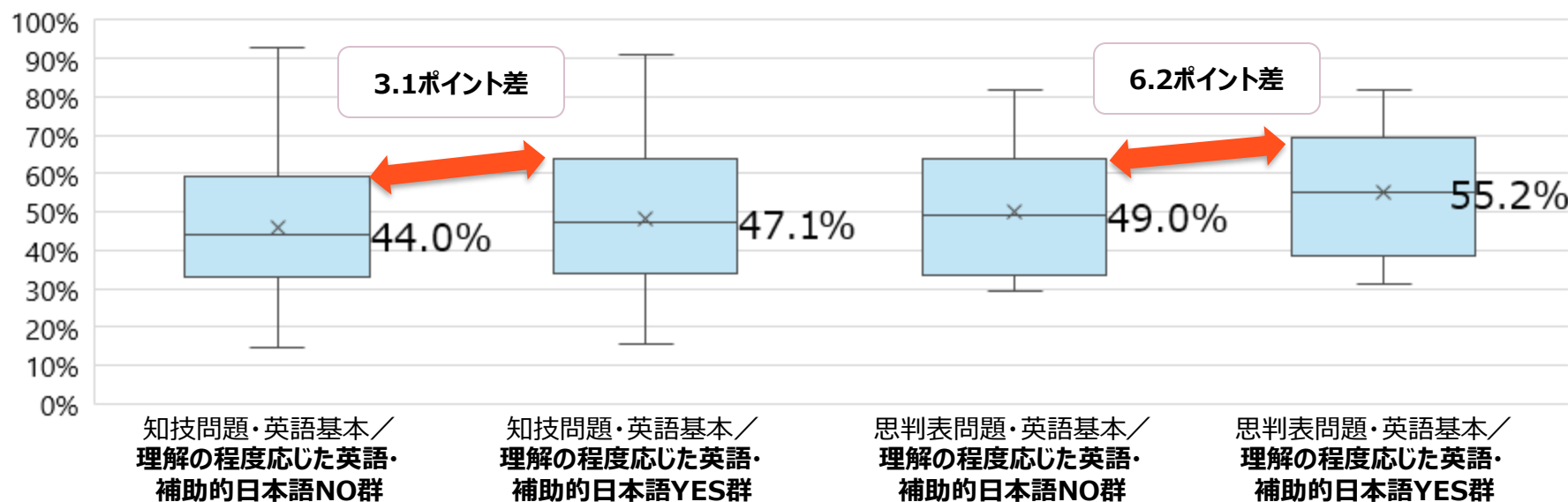


「英語で授業を行うことを基本としている」という質問に「どちらかといえばそうしている」「そうしている」と回答している教師の指導を受けている生徒の問題の通過率と、「どちらかといえばそうしていない」「そうしていない」と回答している教師の指導を受けている生徒の問題の通過率とを比べると、中3では、「知識・技能」問題の中央値では0.9ポイント、「思考・判断・表現」問題の中央値では1.3ポイント、前者の通過率が高い。



「英語で授業を行うことを基本としている」と「英語の授業で、生徒の理解の程度に応じた英語を用いたり、補助的に日本語を用いている」という質問の両方に「そうしている」と回答をしている教師の指導を受けている生徒の問題の通過率と、後者の質問のみ「そうしていない」あるいは「どちらかといえばそうしていない」と回答をしている教師の指導を受けている生徒の問題の通過率とを比べると、中3では、「知識・技能」問題、「思考・判断・表現」問題のいずれにおいても、おおむね前者の通過率が高い傾向（「知識・技能」問題の中央値では3.1ポイントの差、「思考・判断・表現」問題の中央値では6.2ポイントの差）を確認することができる。

- 「英語で授業を行うことを基本としている」と「英語の授業で、生徒の理解の程度に応じた英語を用いたり、補助的に日本語を用いている」の回答の組み合わせを元に2群を取り出した際の、「知識・技能」問題、「思考・判断・表現」問題の通過率の平均の分布（中3）



ICT活用やALTが生徒の英語力に与える効果

- ICTの活用、ALTの参画に関わるほぼすべての活動で効果が見られたが、特にALTの授業内での活動（例：ALTが生徒の発言にフィードバックする活動等）やICTでの遠隔地とのやり取りは、生徒の英語力に効果
- 生徒がICTを通じて実際に英語を使う機会を設けることや、ALTが生徒の発言にフィードバックすることが、指導上も重要

【グラフの見方】

例えば、ALTによる「生徒の発言や作文等に対するコメント・フィードバック」の実施状況が一段階高い学校は
（例：「50～75%の授業」→「75%以上の授業」）、CEFR A1以上割合が1.18%高い

4: 75%以上の授業で実施
3: 50～70%の授業で実施
2: 25～50%の授業で実施
1: 25%未満の授業で実施
0: 実施していない

生徒の発言や作文等に対するコメント・フィードバック

1.18 %高い

やり取り・発表のモデル提示

0.99 %高い

パフォーマンステスト等の補助

0.76 %高い

生徒のやり取りの相手

0.66 %高い

発音のモデル・発音指導

0.56 %高い

電子メールやSNS、チャットでやり取り

1.24 %高い

発話や発音などの録音・録画

0.76 %高い

1人1台端末を用いて発表や話すことにおけるやり取り

0.75 %高い

学習者用デジタル教科書を活用

0.64 %高い

デジタルドリルや動画のコンテンツを活用

0.57 %高い

1人1台端末を活用

0.52 %高い

ALT
(授業内)

ICT
(授業内)

枠間では数値の大きさの比較はできない

【グラフの見方】

例えば、ICTを用いた「遠隔地の生徒等と英語で話す活動」の実施状況が一段階高い学校は
（例：「半年に1回以上」→「月1回以上」）、CEFR A1以上割合が1.34%高い

4: 週1回以上
3: 月1回以上
2: 半年に1回以上
1: 年1回以上
0: 実施していない

一定の目的を持った授業外での教育活動

0.92 %高い

英語の授業以外の授業や学校行事での生徒との交流

0.52 %高い

遠隔地の英語に堪能な人との個別会話

2.21 %高い

遠隔地の生徒等と英語で話す活動

1.34%高い

遠隔地の教師やALT等とチーム・ティーチング

1.04 %高い

ICT
(遠隔地)

※ R5英語教育実施状況調査とR5全国学力・学習状況調査を活用し、ICT・ALTの活用等がCEFR A1レベル相当以上を達成した中学生の割合の向上に与える効果を分析。具体的には、R5全国学力・学習状況調査の英語に関する項目のうち、CEFR A1以上割合の予測に有効であった5つの要素：正答率_英語（聞く、読む、書く）、正答率_英語（話す）、生徒_英語への関心等4項目（生徒質問紙59～62）平均、生徒_言語活動7項目（生徒質問紙66～72）平均、学校_言語活動7項目（学校質問紙59～65）平均を統制変数とした上で、R5英語教育実施状況調査における各項目を独立変数に投入する階層的重回帰分析を用いて検討（正答率は第3学年4月の状況、その他は第2学年までの学習・指導状況。）。
※ 数値（非標準化係数）が大きいほど生徒の英語力に与える影響が大きい。それぞれの活動の取組状況への回答が一段階高い学校は、CEFR A1割合がその数値分高いことを意味する。上記はすべて5%水準で有意。
※ なお、キーボード入力等で書く活動の数値は0.25であった。
※ 各枠内は回答単位が同一のため比較可能だが、枠間では比較はできない。
※ 学校単位（中学校第3学年の生徒数21名以上）で分析。

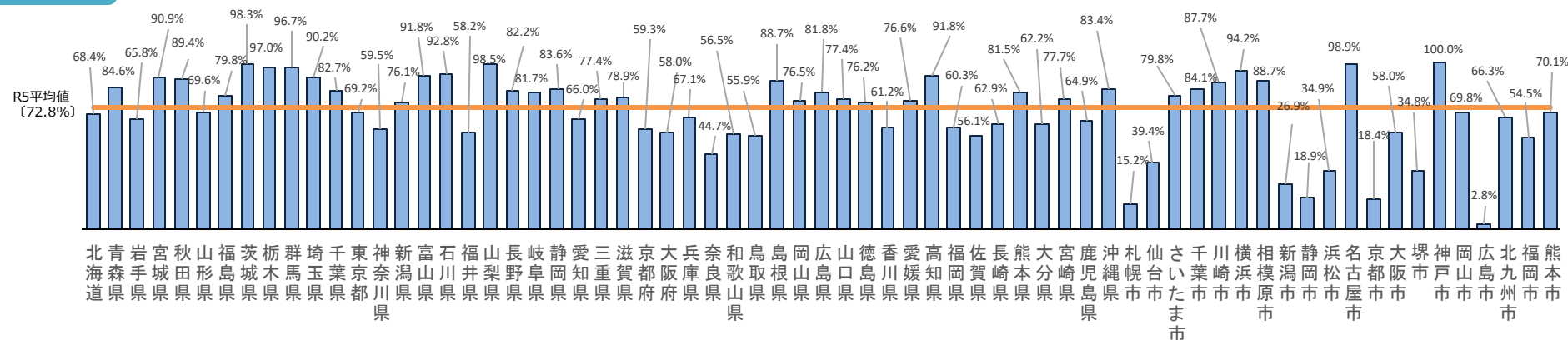
ALT等が授業の半分以上参画している学校の割合は増加している

ALT等が参画する時数割合	令和5年度	令和6年度
75～100%	2.9%	4.3%
50～74%	7.9%	9.2%
25～49%	29.0%	31.8%
1～24%	58.5%	52.9%
0%	1.8%	1.8%

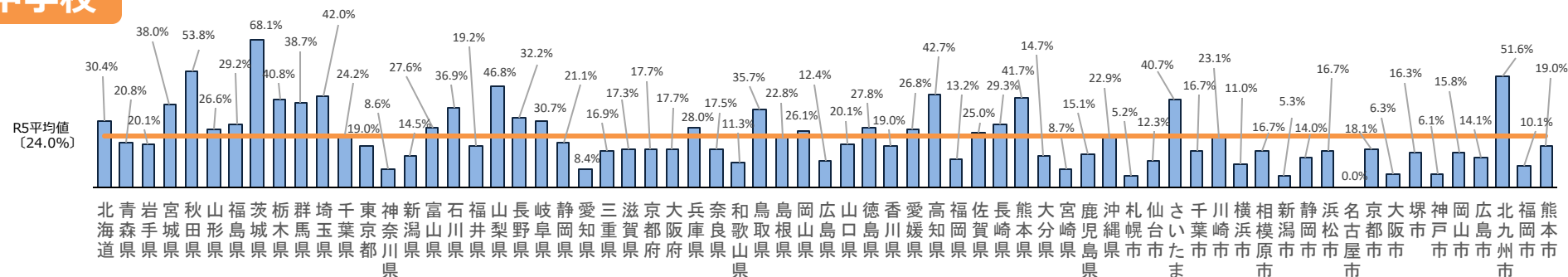
具体的な参画の内容	ALT等が参画した学科の割合
①教師とのやり取りを生徒に示すやり取り・発表のモデル提示	96.1%
②パフォーマンステスト等の補助	85.7%
③生徒のやり取りの相手	96.0%
④発音のモデル・発音指導	94.6%
⑤生徒の発言や作文等に対するコメント・フィードバック	94.1%
⑥英語の授業以外の授業や学校行事での生徒との交流	74.8%
⑦授業外での教育活動のうち、定期的に実施する活動 （例：部活動、個別の英会話練習、異文化理解のための学習）	70.3%
⑧授業外での教育活動のうち、不定期に実施する活動 （例：ディベート大会、スピーチ大会等に向けた指導）	54.1%

ALTの授業参画割合には、自治体間の差が見られる

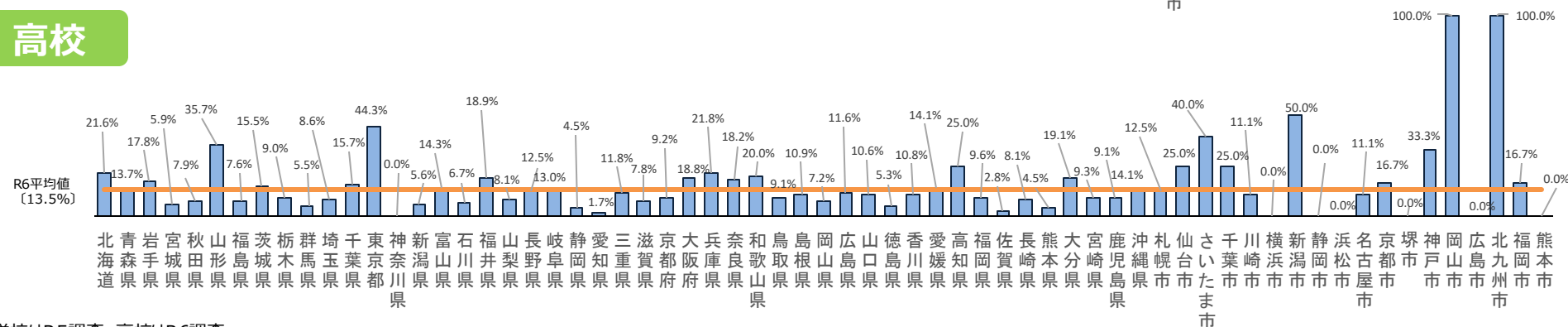
小学校



中学校



高校



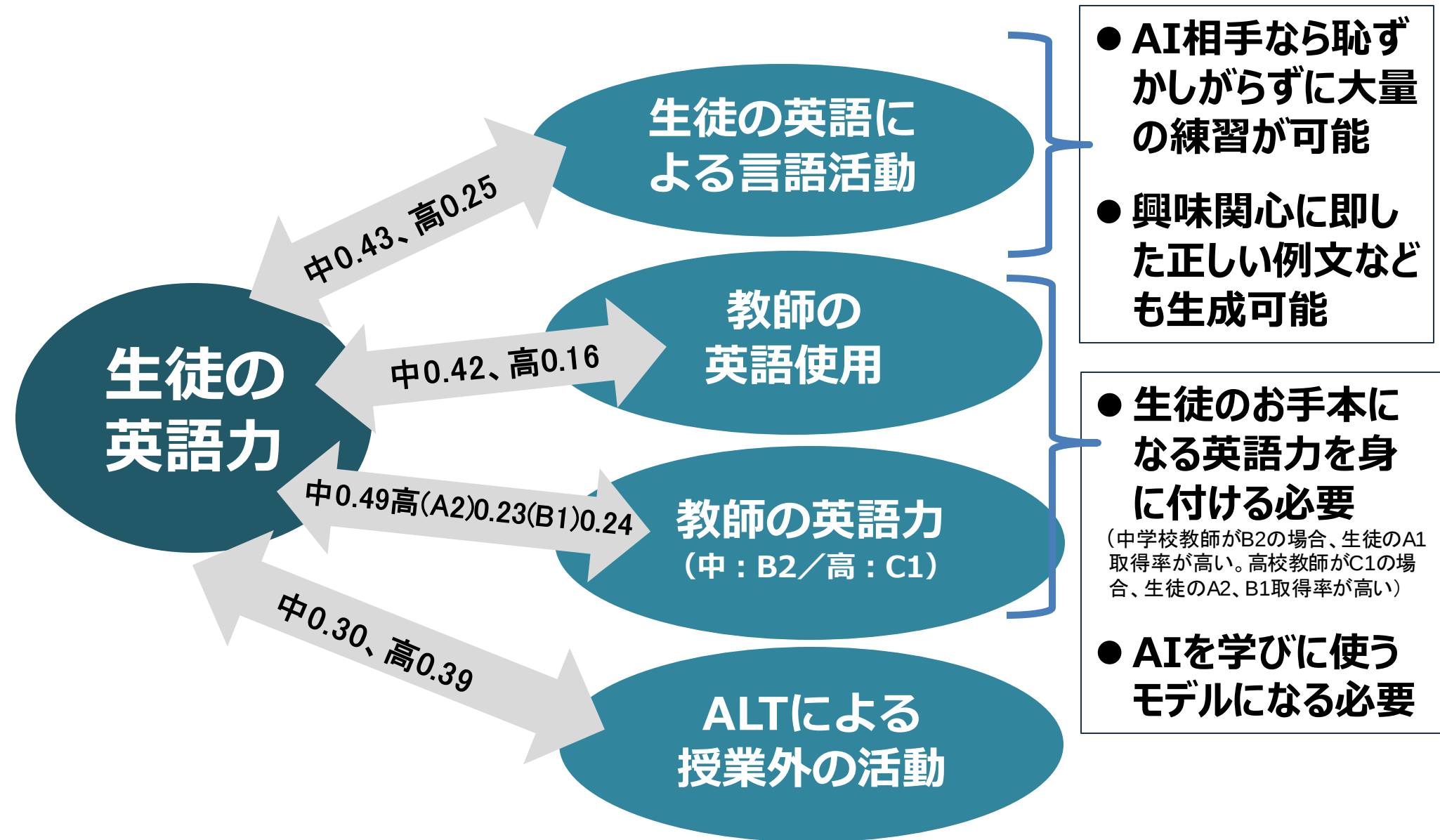
※小中学校はR5調査、高校はR6調査。

※英語の総授業時数の半分以上の時間、ALT等が参画した学校の割合。(高校は全学科) 半分以上とは、「75%以上」又は「50%以上75%未満」と回答した学校(又は学科)の割合の合計。

(出典) 令和6年度英語教育実施状況調査

(2) AIを含むデジタル学習基盤の活用 に関する課題

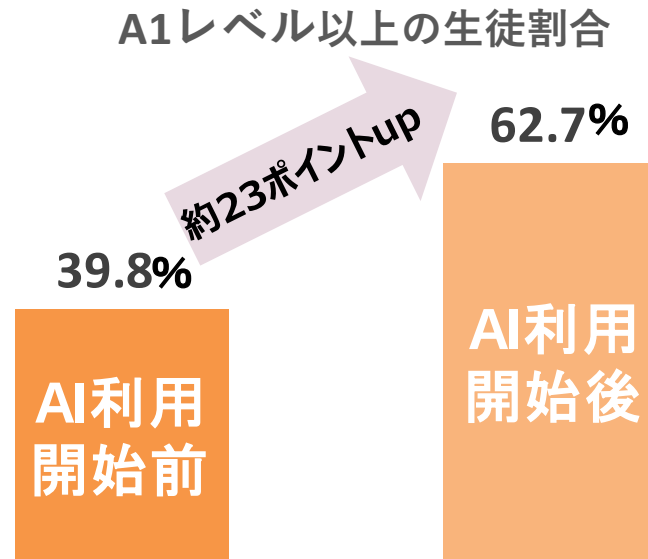
英語力を伸ばす要素と生成AIの可能性



英語教育におけるAI活用による効果の例

中学校 (A市)

AI学習の使用前後で、CEFR（話すこと）のA1レベル以上の生徒の割合が約**23ポイント増加**

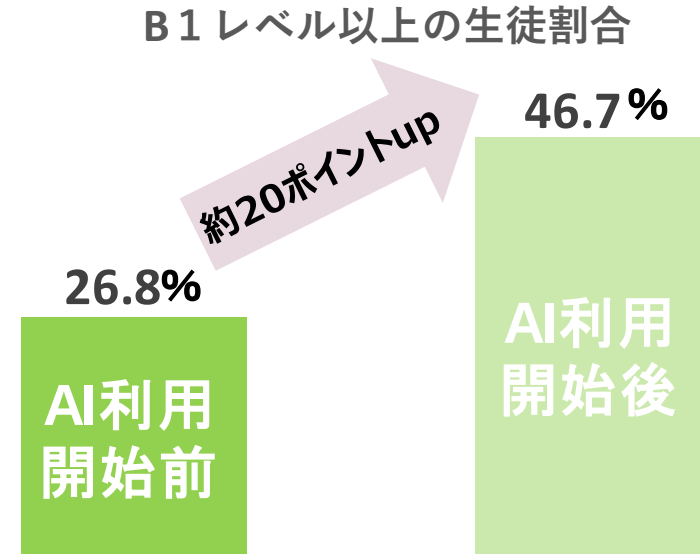


(AI利用期間：4カ月～半年)

※令和6年度の実証において、中学校3年生、3,169名を対象にAIとの英会話に取り組んだ。
※7回のAI英会話を実施。

高校 (B県)

AI学習の使用前後で、CEFR（話すこと）のB1レベル以上の生徒の割合が約**20ポイント増加**



(AI利用期間：1カ月)

※令和5年度の実証において、高校1年生、120名を対象に家庭学習としてAIとの英会話に取り組んだ。
※8回のAI英会話を実施。

AIの活用による英語教育強化事業

令和6年度補正予算額

6億円



現状・課題

- 生徒の英語力は向上傾向にあるが、社会の期待とは依然大きな乖離
- 英語を使う機会の圧倒的少なさや学ぶ動機付けの弱さが積年の課題
- 生成AIの効果的活用により、練習量の増加や動機付けの強化が期待できる

次期学習指導要領の検討を見据え、教師やALTによる指導とAI活用との効果的な組み合わせを実証研究し、知見を早急に蓄積する必要

事業内容

①AIを英語の授業等で活用するモデル校※を指定 …約**300**校

【考えられる取組項目】

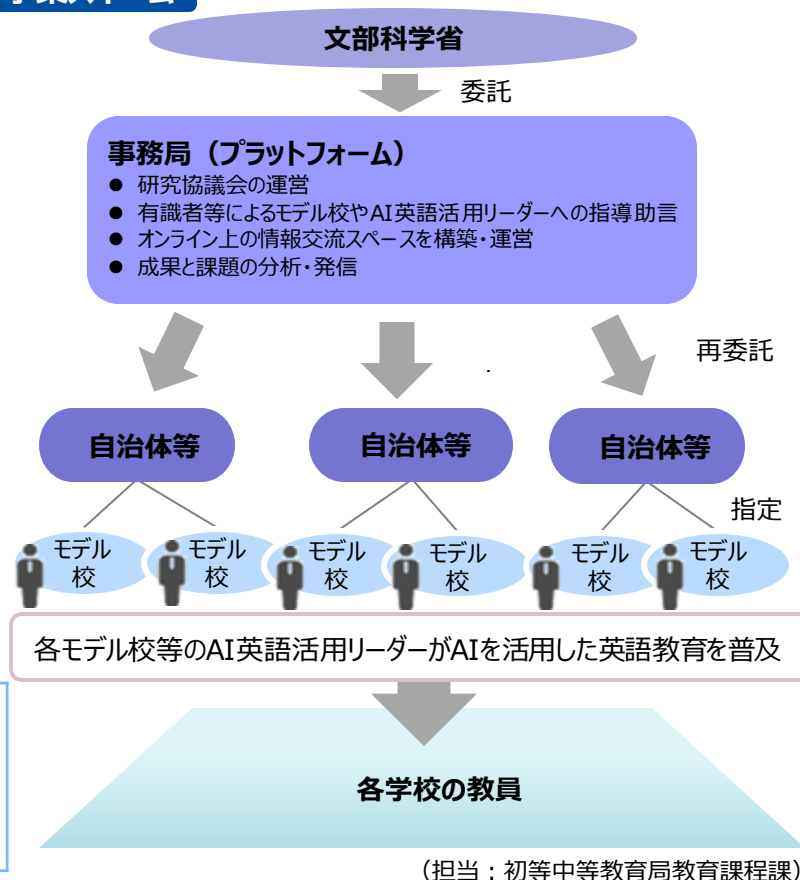
- 会話練習量の増加や言語活動の充実
- 家庭学習におけるAI活用方法、授業との連携モデル構築
- 個々の児童生徒の興味関心を踏まえた個別最適な教材生成
- 不登校や特別な支援を要する児童生徒への活用方法

※国公私を想定

②AI英語活用リーダーによる実践の普及 …約**1,200**名

- 授業等で自ら率先してAI活用を実践
- 研究協議を通じて全国のリーダー教師と切磋琢磨し、実践を改善
- 域内の教員へ実践を普及
(普及方法の例)
・AIを活用した公開授業を実施
・教育委員会主催研修のワークショップで、リーダーが講師役を担当

事業スキーム



件数	事務局：1箇所程度 都道府県・市区町村教育委員会、民間企業等：27箇所程度 (1箇所当たり1,500万円程度) ※民間企業の場合は、モデル校設置者と調整の上応募	委託先	事務局を民間企業等に委託 ※モデル校・AI英語活用リーダーは 都道府県・市区町村教育委員会等を通じて募集 民間企業の場合は、都道府県・市区町村教育委員会と連携して募集
----	---	-----	--

小・中・高等学校を通じた英語教育強化事業

令和8年度要求・要望額
(前年度予算額)

7億円
2億円



現状・課題

- ① 令和6年度全国学力・学習状況調査の結果、令和3年度比で有意な低下（「話すこと」「書くこと」に課題）
- ② 我が国の英語教育は、コミュニケーション総量の少なさ、学ぶ動機付けの弱さ、家庭学習の時間確保、即時フィードバックや既習事項の定着等が課題
- ③ これまでの英語教育には児童生徒が住む地域の魅力発信という視点がなく、地方創生の観点からも課題

⇒生成AIの活用には大きな可能性があるが、取組は緒についたばかり
(練習量の飛躍的増加、動機付け強化、即時フィードバック、地域の魅力発信に資するコンテンツの作成)

■経済財政運営と改革の基本方針2025
(略) AIの活用や地域の魅力発信等を通じ、英語教育を推進する。

■地方創生2.0
(略) AI活用による英語での地域の魅力発信(略)に取り組む

事業内容

事業実施期間：令和3年度～

1

AIを活用したグローバル人材育成のための英語教育強化事業 4.7億円(0.3億円)[令和6年度補正予算 6億円]

- AIを活用したスピーキングやプレゼン等の練習量の飛躍的増加(家庭学習を含む)、英作文等への即時フィードバック
- 学習指導要領改訂を見据え、AIを活用した地域発信コンテンツの作成、それらを活用した英語による地域の魅力発信 等



件数・単価

事務局：1箇所 都道府県・市町村教育委員会、学校法人、国立大学法人等：22箇所程度

委託先

事務局：民間企業

2

教師の英語力・指導力の向上のための実践的オンライン研修

0.4億円(0.4億円)

- 第二言語習得理論等の科学的知見に基づく効果的な指導法について、ネイティブ講師等から学ぶ大規模オンライン研修を実施



件数・単価

2箇所
×2,000万円

委託先

専門機関等

3

専門機関等による専門人材育成・確保事業

0.1億円(0.1億円)

- JETプログラムで来日した外国語指導助手(ALT)の資質・能力向上のための研修
- 英語以外の外国語に関する指導者の養成・確保のための講習や教材開発 等



件数・単価

3箇所
×100～500万円

委託先

大学、都道府県・指定都市教育委員会、専門機関等

4

学習指導要領に対応した外国語教育の条件整備・情報発信事業

1.5億円(1.4億円)

- 小学校外国語活動教材「Let's Try!」の配布

アウトプット(活動目標)

AIを英語等の授業で活用するモデルの構築

→実施都道府県等教育委員会等の数 等

長期アウトカム(成果目標)

① 中学3年生でCEFR A1レベル(英検3級程度)以上、高校3年生でCEFR A2レベル(英検準2級程度)以上を有する生徒の割合

■中3：令和6年度 52.4% →令和9年度 60%
■高3：令和6年度 51.6% →令和9年度 60%

② 全ての都道府県・政令指定都市において、中学3年生でCEFR A1レベル(英検3級程度)以上、高校3年生でCEFR A2レベル(英検準2級程度)以上を有する生徒の割合を5割以上とする。

■令和6年度 未達あり →令和9年度 全都道府県・政令指定都市にて達成

③ 高校3年生でCEFR B1レベル(英検2級程度)以上を有する生徒の割合

■令和6年度 21.2% →令和9年度 30%

連携施策

英語専科教員の加配措置(3,000人)

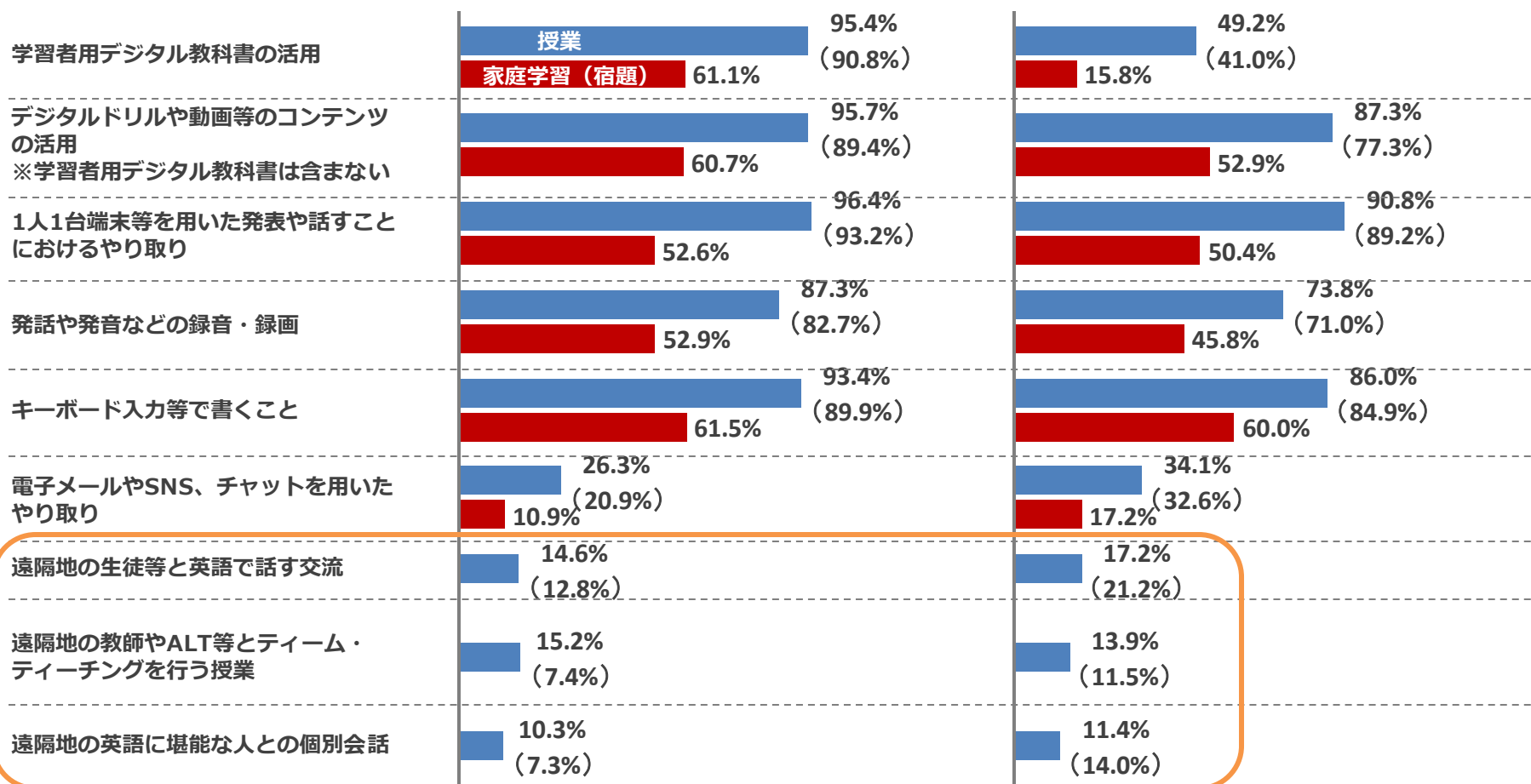
小学校英語教育の早期化・教科化に伴う専科指導に必要な教師の充実
※上記に加え、外国語を含む小学校の教科担任制を推進するための加配措置により更に取組を充実

(担当：初等中等教育局教育課程課)

- ICTの活用は、ほぼ全ての活動で**増加傾向**
- 家庭学習（宿題）を含め、様々な場面での更なる活用が望まれる

中学校

高等学校



※（ ）内は、令和5年度調査の結果。

※ 全ての割合について、「ICT機器を活用した学校数」を分子、全学校数を分母として算出。